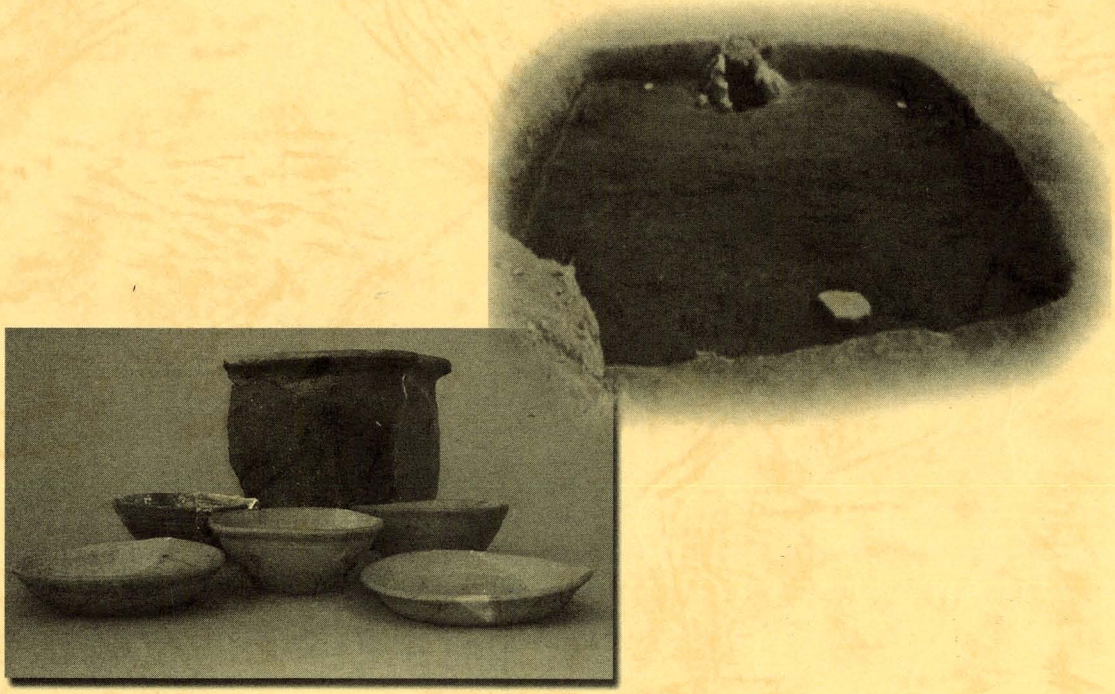
都留市埋蔵文化財調査報告　第12集

三ノ側遺跡

San-No-Gawa Site

田原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書



2003. 3

都留市教育委員会

都留市埋蔵文化財調査報告　第12集

三ノ側遺跡

San-No-Gawa Site

田原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書

2003. 3

都留市教育委員会

序

本報告書は、都留市田原土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の記録保存のために発掘調査を実施した三ノ側遺跡（第２次）の調査成果をまとめたものであります。

本遺跡の所在する都留市田原地区周辺は、桂川の右岸段丘上の広大な平坦地に位置しており、古代甲斐国都留郡、多良郷の推定地の一つとされている地域です。

かつて三ノ側遺跡は昭和 56 年（1981）に発掘調査を実施し、奈良・平安時代の住居跡を検出したところであり、また、遺物では国内の鋳造貨幣としては最古級の和同開珎や、皇朝十二銭のひとつで富寿神宝などの銭貨や、紡錘車・鎌・刀子などの鉄製品を発見しております。

今回の発掘調査は昭和 56 年の調査区よりも西方に 200 メートルほど離れた位置において実施したものであり、発掘調査は平成 13 年 12 月から翌 14 年４月までのおよそ５ヶ月を要しました。

発掘調査の結果、竪穴住居跡６軒、掘立柱建物跡２棟、土坑約 150 基、溝状遺構５条などの遺構を検出し、遺物は甲斐型土器を主体とする土師器をはじめ、須恵器などの土器、紡錘車・刀子・鉄鏃・鑿などの鉄製品を発見しました。出土遺物から９世紀中頃～10 世紀前半に位置づけられます。甲斐型土器とは系統の異なる土器も検出しており、当時の地域間の交流を示す資料として注目するところであります。

昭和 56 年(1981)の第１次調査の結果とあわせ、広大な奈良・平安時代の集落であることが確認するとともに、多良郷の存在を裏付ける事例のひとつとなりました。

末筆ながら、調査に当たってご指導・ご協力を賜った関係各位、並びに調査に従事された方々に厚く御礼を申し上げます。また、試掘調査・本調査・整理作業の全般にわたり多大な尽力をいただいた都留文科大学考古学研究会の諸君に敬意を表します。

2003 年３月

都留市教育委員会

教育長　富山　克彦

例　　言

1.　本報告書は、都留市田原地区土地区画整理事業に先立って、2001年度から2002年度に都留市教育委員会が行った三ノ側遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2.　本報告書は主に杉本悠樹が執筆・編集し、第Ⅲ章の第1節の一部は井部利春が執筆した。
3.　遺跡の写真は、杉本・中野一成・井部利春が撮影し、遺物は杉本が行った。
4.　整理作業は都留文科大学考古学研究会に委託し、杉本の指導のもと作業を進めた。
5.　写真図版のレイアウトのうち、発掘現場での写真については首藤久士が選択・構成した。
6.　挿図の編集において以下の作業分担を行った。

遺構頁レイアウト：川中裕二・林　雅彦・首藤久士（都留文科大学考古学研究会）
遺物頁レイアウト：井部利春・川中裕二・利光恭子（　　〃　　）
上記作業協力：入江俊行（日本大学大学院）・浅賀貴広（日本大学）

7.　調査の図面・写真・遺物は都留市教育委員会に保管してある。

凡　　例

1.　掲載した図面の縮尺は、原則として、住居跡・土坑・溝状遺構・竪穴状遺構・掘立柱建物跡は1／60、土器実測図・拓本は1／3、住居跡のカマドは1／30である。
2.　拓本で両面を載せてあるものは、断面左側が表面、右側が内面である。
3.　須恵器の断面は黒く塗色してある。
4.　遺構名や用語を便宜的に以下のように略する場合があるが本質的な意味に差異はない。

（例）A地点1号住居跡→A1住　　C地点1号土坑→C1土
C地点1号竪穴状遺構→C1竪　　C地点1号溝状遺構→C1溝
セクション→SEC　　エレベーション→ELV

5.　住居跡の図面上に貼られているスクリーントーンは焼土・粘質土の分布を示すものである。
6.　土器実測図に貼られているスクリーントーンは、土師器坏の内面は黒色土器、須恵器の内外面は釉を示すものである。

目　次

序
例　言
凡　例
目　次

第Ⅰ章　調査概況 …… 1
　第1節　調査に至たる経過 …… 1
　第2節　調査組織 …… 1
　第3節　調査方法 …… 2

第Ⅱ章　環　境 …… 4
　第1節　地理的環境 …… 4
　第2節　歴史的環境 …… 4
　　第1項　周辺の遺跡 …… 4
　　第2項　本遺跡の構築期前後の歴史的概観 …… 6
　　第3項　本遺跡の調査史 …… 6

第Ⅲ章　遺　構 …… 8
　第1節　竪穴住居跡 …… 8
　第2節　掘立柱建物跡 …… 11
　第3節　土坑 …… 12
　第4節　溝状遺構 …… 12
　第5節　竪穴状遺構 …… 14

第Ⅳ章　遺　物 …… 15
　第1節　住居跡出土土器 …… 15
　第2節　土坑出土土器 …… 24
　第3節　溝状遺構出土土器 …… 25
　第4節　竪穴状遺構出土土器 …… 26
　第5節　出土鉄製品 …… 26

第Ⅴ章　おわりに …… 27

挿　図 …… 29

写　真　図　版 …… 79

写真図版目次

中　扉　　A地点1号掘立柱建物跡

写真図版（1）　A地点調査前風景・A地点表土剥ぎ・C地点表土剥ぎ・A1住プラン確認
A1住カマド①，②，③・A1住調査風景・A1住カマド検出状況

写真図版（2）　A1住遺物出土状況①，②・A1住完掘状況・B1住検出状況
B1住遺物出土状況・B1住完掘状況・B1住カマド検出状況・B1住カマド断面
C1住遺物出土状況

写真図版（3）　C1住完掘状況・C2住2号カマド検出状況・C2住2号カマド断面
C2住2号カマド堀り方・C2住1号カマド断面・C2住1号カマド堀り方
C2住覆土セクション・C2住遺物出土状況①・C2住遺物出土状況②

写真図版（4）　C2住遺物出土状況③，④・C2住完掘状況・C3鉄鏃出土状況・C3住完掘状況
D1住検出状況・D1住カマド検出状況

写真図版（5）　D1住カマド構造・D1住遺物出土状況①，②，③，④・A地点プラン確認・A地点調査風景
A地点土坑群①，②，溝

写真図版（6）　A地点2号掘立建柱建物跡・C地点鑿出土状況・A地点近景①・②・B地点近景
C地点近景・C地点土坑群・B地点調査風景・C地点調査風景

写真図版（7）　A地点1号住居跡出土土器－1
写真図版（8）　A地点1号住居跡出土土器－2
写真図版（9）　B地点1号住居跡出土土器
写真図版（10）　C地点2号住居跡出土土器－1
写真図版（11）　C地点2号住居跡出土土器－2
写真図版（12）　C地点3号住居跡出土土器・D地点1号住居跡出土土器－1
写真図版（13）　D地点1号住居跡出土土器－2・土坑出土土器・「古代への旅」出土品展示状況

第Ⅰ章　調査概況

第1節　調査に至る経過

平成13年11月1日　　文化庁へ発掘通知を提出する
平成13年11月8日　　試掘による確認調査を開始する
平成13年12月10日　　発掘調査を開始する。
平成14年4月30日　　発掘調査を終了する。
平成14年5月2日　　都留警察署長宛てに埋蔵文化財発見届けを提出する。
平成14年5月7日　　山梨県教育委員会教育長宛てに埋蔵文化財保管証を提出する。

第2節 調査組織

調査主体　　都留市教育委員会
調査機関　　都留市教育委員会

調査担当者　　奈良泰史・杉本悠樹
調査員　　小林安典
調査補助員　　井部利春、飯沼こずえ、大竹直己、小澤正幸、片山　悟、川中裕二
佐藤三和、鈴木宏子、首藤久士、堂前陽子、利光恭子、林　雅彦、柳沢拓哉
若目田智子
（都留文科大学考古学研究会）

調査作業員　　加藤良造、天野茂治、渡辺金造、志村恵子、田代光男、田代久子、高部　潔
羽田喜久男、伊東大輔、石塚大介、飯沼容美、佐々木美沙

整理担当者　　杉本悠樹
整理補助員　　井部利春、川中裕二、林　雅彦、首藤久士、片山　悟、飯沼こずえ
利光恭子、若目田智子、増本敦子、瀧内砂斗美、佐々木寛章、佐々木一基
能澤和幸、河北昌美、柳瀬美紀、多田有希子
（都留文科大学考古学研究会）

協力者・機関（敬称略）　　笠原みゆき、小西直樹、新津　健、野代幸和、福田正人、保坂康夫
入江俊行、浅賀貴広、都留文科大学考古学研究会、山梨県教育委員会

事務局

	（平成13年度）	（平成14年度）
教育長	富山克彦	富山克彦
教育次長	武井邦夫	渡辺良二
生涯学習課長	小林千尋	小林千尋
同　課長補佐	安富康賀	安富康賀
同　文化振興担当	鈴木正子	牛田弘長
同　〃	中野一成	佐藤好男

第３節　調査方法

本遺跡は、都留市田原土地区画整理事業の施工に先立ち、同組合と都留市教育委員会との協議し、事業予定地において遺跡確認調査を実施した。確認調査は、事業予定地の全域に、２×２m の試掘トレンチを 50 箇所設定し、重機および作業員の人力により遺構確認面まで掘り下げ、作業員によりトレンチ内の精査を行った。その結果、駅舎と駅前広場の予定地、区画道路予定地の一部に平安時代を主体とする遺構および遺物が確認され、およそ 1,200 ㎡について本調査を行うことになった。仮称・田原駅の駅舎、および駅前広場の北側（家中川左岸）の範囲をＡ地点、駅前広場の南側（家中川右岸）をＢ地点、区画道路 4-3-2 号線予定地のうち、同 6-5 号線との交差地点よりも南側をＣ地点、北側をＤ地点とし、合計４つの地点を設定した。

調査は、事業予定地の範囲を示す杭を基準とし、調査区内に 10m×10m の大グリッドを先行して設定した後、さらに 2×2m の小グリッドを設定した。Ａ地点は、北から南へ大グリッドにはＡ・Ｂ・Ｃ～のアルファベットを、小グリッドには１～５の算用数字を付し、A1・A2…A5・B1・B2～とし、西から東へは小グリッド毎に 01・02…10・11～といった算用数字を付し、両者をあわせた A1-1・A1-2…B1-5～がグリッド名となる。Ｂ地点はＡ地点の要領とほぼ同様であるが、大グリッドを北から南へ、あ・い・う～の平仮名を付している点が異なり、あ 1-1 といったグリッド名になっている。Ｃ地点は、南北に細長い調査区であるため、小グリッドごとに西～東へＡ・Ｂ・Ｃ～を、南から北へ１・２・３～の算用数字を付し、A-1・A-2……B-12・B-13～と設定した。Ｄ地点はＣ地点と同じ要領でグリッド名を付している。

調査は、試掘の調査結果を参考にしたうえで、重機によって表土上層をを除去し、作業員による表土下層の除去ならびに精査を行い、遺構の検出につとめた。本遺跡は試掘調査の結果、赤褐色のスコリアを多量に含む黒色土上面に平安時代の遺構・遺物が検出されたが、その下からは溶岩が検出されたため、平安時代の遺構を中心に検出につとめることとなった。遺構確認面までの掘り下げで出土した遺物について、小破片のものは各グリッドごとに一括で取り上げ、必要に応じて平面実測及びレヴェリングなどの記録作業をした後、取り上げた。

遺構が確認できた場合、住居跡および竪穴状遺構はは十字形にベルトを設定し、土坑の場合は半裁、溝状遺構は任意でベルトを設定し、遺物を残しながら徐々に掘り下げ、土層断面図、遺構・遺物の平面図、遺物出土

状況写真などの記録作業終了後に取り上げ、遺構全体写真の撮影などを経て、各遺構ごとに調査を終了している。なお、住居跡の作図はＳ＝1/20、カマドの実測図はＳ＝1/10 を基本に作図している。

第Ⅱ章　環　　境

第１節　地理的環境

本遺跡の所在する山梨県都留市は、中部地方の東端と関東地方の西端の間もしくは重複部分にあり、山梨県の東南部に位置する。周囲は山に囲まれており、市の総面積に対して耕地が一割にも満たない山間部で平坦地は少ないものの、桂川（相模川）とその支流の流域には河岸段丘が発達しており数多くの遺跡が立地している。

今回調査された三ノ側遺跡は桂川の右岸段丘上に位置し、この遺跡が所在する上谷および田原地区周辺では段丘の幅も広く、平坦地が広がっている。都留市の南西にそびえる御正体山より北西に張り出した尾根の末端部や天狗山から伸びる複数の沢が交わる地域でもある。標高はA・B地点が約502m、C・D地点が約500mを測り、西から東に緩やかに傾斜している。A地点は家中川の左岸、B・C・D地点は同右岸に位置し、寺川との間に挟まれている。

第２節 歴史的環境

第１項　周辺の遺跡

都留市内には多くの遺跡が存在するが、特に縄文時代および奈良・平安時代の遺跡の分布は濃厚である。本遺跡は桂川流域に所在するが、同流域に分布する遺跡を中心に周辺の遺跡を概観する。1：下溝遺跡は十日市場にあり、かつて宅地造成の際に遺物が発見されているものの、時代等の詳細は不明である。2：山梨原遺跡は大明見溶岩上及び末端に位置する遺跡で中央自動車道4車線化工事に伴い発掘調査がなされ、縄文時代の住居跡4軒・土坑9基・集石1基・礫群・小ピット、平安時代および中世以降の土坑13基・溝状遺構45条が検出されている。3：下原遺跡・4：大堰遺跡・5：八ッ沢遺跡は、いずれも縄文時代の散布地である。6：山ノ神遺跡は宅地造成工事に伴う発掘調査において縄文時代前期諸磯B式期の土坑4基が検出され、玦状耳飾や石槍が出土している。7：城の腰遺跡は土師器が表採できる場所として知られている。8：鷹の巣遺跡は山梨原遺跡と同様、中央自動車道4車線化工事に伴い発掘調査を実施し、

平安時代の住居跡4軒、掘立柱建物跡7棟、土坑、溝状遺構などが発見された。9：牛石遺跡では、奈良・平安時代の住居跡 20 軒、掘立柱建物跡3棟が検出されている。縄文時代中期後葉の大環状配石遺構（直径約 50m）が発見されて有名となった遺跡である。10：前ヶ久保遺跡、14：九鬼Ⅰ遺跡は縄文・奈良・平安時代、11：亀石遺跡は平安時代のそれぞれ散布地である。12：揚久保遺跡はリニア山梨実験線建設工事に伴う発掘調査が山梨県教育委員会によって実施され、縄文時代の陥し穴1基、平安時代以降の 1 土坑 12 基、近世の掘立柱建物跡1棟、水路3条、溝状遺構2条、性格不明のピット 21 基が検出されている。13：下久保遺跡は縄文・平安時代の散布地である。15：九鬼Ⅱ遺跡は、揚久保遺跡と同様にリニア実験線建設に伴う発掘調査において、縄文時代の住居跡1軒・集石土坑4基・土坑 62 基、平安時代以降の住居跡 14 軒・竪穴状遺構1棟・掘立柱建物跡・柵列8棟、溝状遺構、近世の墓壙が発見されている。16：中溝遺跡は農場整備に伴う発掘調査によって、縄文時代中期中葉の新道式・藤内Ⅰ式の住居跡6軒が検出されている。2次調査が 1993 年に、やはりリニア実験線建設に伴い実施され、縄文時代早期末および平安時代の集落が確認されている。17：原遺跡は縄文時代中期曽利式の土器および平安時代と考えられる土師器が採取されている。18：中野原遺跡は縄文時代中期の土器片及び土師器の細片が採集されている。19：山梨遺跡は縄文時代中期の遺物が採集されている。20：桃園遺跡は周囲 100m にわたって土器片の散布がみられ、現在までに縄文時代前期末の諸磯 b・c 式、同中期勝坂・曽利式、同後期堀之内式、平安時代と考えられる土師器片が採取され、縄文時代から歴史時代にかけての遺物がみられ、長期にわたる集落跡が形成されたと想定できる遺跡である。21：神出遺跡は、工事中に遺物が出土し、相当な広範囲において土器片が大量に採取され、縄文時代前期諸磯 c 式、同中期勝坂式・曾利式、同後期加曽利Ｂ式及び土師器・須恵器がみられる。22：先ノ宮遺跡は、発掘調査は行われていないが、縄文時代中期の曽利Ⅱ式の深鉢が採取され、これまでに縄文時代前期黒浜式・諸磯 b・c 式、同中期曽利式、同後期加曽利Ｂ式の土器片や土師器片が採取されている。23：中谷遺跡は、昭和 39 年（1964）、同 46 年(1971)、同 54 年(1979)、平成5年(1993)～同6年(1994)の4次にわたる調査が行われた。第1・3次調査は中央自動車道建設工事に伴う事前調査で、第2次調査は農道拡張工事に伴う事前調査、第4次調査は山梨リニア実験線建設に伴う事前調査として行われた。第1次～3次の調査で縄文時代後期の住居跡5軒、晩期前半の住居跡 2 軒、奈良時代の住居跡2軒、縄文時代中期～晩期の配石遺構、さらには埋葬人骨などが確認されている。第4次調査では、縄文時代中期～後期の住居跡 16 軒、土坑約 60 基、縄文時代中期～晩期の配石遺構などが確認されており、その中には後期後半の環状配石遺構も含まれている。

第２項　本遺跡の構築期前後の歴史的概観

都留市においては弥生時代中期以降、遺跡があまり確認されなくなり、古墳時代全般を通して遺跡が皆無な状態が600年ほど続き、歴史的な空白期が存在する。この間は、日本の各地で稲作農耕が本格的に始まる時期であるが、都留市域は稲作農耕に不適な土地が多く、水田の造成が困難であったため、初期的な水稲栽培の技術では稲作は不可能に近く、人の生活には不向きな環境であったのだろう。その空白期を脱して遺跡が確認されるようになるのは奈良時代（８世紀初頭）になってからである。この時期は中央において律令体制が確立し、都の造営、地方制度、軍制などの整備がおこなわれた。

律令体制下の地方制度として、甲斐国には、巨麻・山梨・八代・都留の４郡が設けられ、国府が東山梨郡春日居町もしくは東八代郡御坂町に置かれ（国府推定地は議論の余地がある）、その周辺には国分寺・国分尼寺（東八代郡一宮町）が設けられ、甲斐国の政治の中心地域として整備された。

都留市の所属する郡内地域は、都留郡に含まれ、『和名抄』によると、この都留郡下に相模・古郡・福地・多良・加美・征茂・都留の７郷が置かれていたとある。これらのうちで都留市域には上・下谷村を中心に多良郷が、十日市場から富士吉田市にかけての地域に加美郷が、それぞれ設置されていたものと推定されている。特に多良郷は都留市田原のあたりとするのが通説となっている。今回調査された三ノ側遺跡の調査地点の東側200m程の地点が1981（昭和56）年に発掘調査された際、皇朝十二銭の和同開珎・富寿神宝、銅製の小壷が出土しており、本遺跡は郷の中心地に近い可能性が指摘されてきた。

第３項　本遺跡の調査史

1978（昭和 53）年に国道都留バイパス建設に伴う詳細遺跡分布調査が行われ、本遺跡の一部が通過予定地であるため、上谷第２地点として試掘地点のひとつに選定されている。第１と第２の２基のテスト・グリッドが設定され、そのうち、第２グリッドから土師器片（坏および甕）が１６点出土している。しかし、遺構は検出されなかった。位置的には今回の調査のＡ地点から西側に70mほど離れた場所に相当する。

本格的な発掘調査がなされたのは、第２項でも触れている1981（昭和 56）年のスーパーマ

ーケット建設に伴うものである。奈良・平安時代の住居跡が5軒検出され、前述のとおり古代の貨幣や銅製品が出土している。限定された範囲内だけの調査であったが、同時期に営まれた可能性の強い住居跡が検出され、古代都留郡下の多良郷の存在形態を示す好資料と考えられている。

【参考文献】

『国道都留バイパス建設に伴う詳細分布調査報告書』　1979　都留市教育委員会
『中谷・宮脇遺跡』　1981　都留市教育委員会・日本道路公団東京第二建設局
『都留市史』資料編　地史・考古　1986　都留市
『九鬼Ⅱ遺跡』　1996　山梨県教育委員会・日本鉄道建設公団
『中谷遺跡』　1996　山梨県教育委員会・日本鉄道建設公団
『山梨県史』資料編1　原始・古代1　考古（遺跡）1999　山梨県
『山梨県史』資料編2　原始・古代2　考古（遺跡）1999　山梨県

第Ⅲ章　遺　構

第１節　竪穴住居跡

本遺跡では６軒の竪穴住居跡が発見され、地点ごと検出順に１号、２号…と名称を設定した。

◎A地点　1号住居跡（第 10・11 図）

Ａ地点の調査区の北側に検出された。長軸方位をＥ－8°－Ｓに取る。平面形は、隅丸方形を呈する。規模は約 5.5×5.5m を測る。床面は平坦で、カマドの構築材の一部と思われる粘土が散布しており、焼土も混在していた。床面の標高は平均で 501.2m 前後である。しっかりと貼られた床面ではない。壁高は 50 ㎝前後であり、急角度をもって立ち上がる様相を示す。覆土は遺構確認土以下、概ね２色の土層の堆積であり、スコリアの含有量などを検討し基本的に５層に分層をした。カマドは東壁のほぼ中央に設けられており、粘質土と溶岩の袖石と天井石により構築され、ほぼ完全な形を留めていた。規模は 1.2×1.0m で、高さは約 0.6m を測る。竈内部には焼土が大量に分布し、支脚に用いたと思われる柱状の石が直立した状態でされ、甕の破片が混在していた。遺物は土器、特に坏や皿はカマド周辺～住居の南東コーナーに集中し、須恵器は覆土中より疎らに検出された。鉄製品は紡錘車と刀子が住居の北壁よりの床面のレベルに程近いところより出土している。また床面の西壁寄りの位置に作業台に用いたと思われる扁平な石が置かれたままの状態で出土した。出土遺物より、本住居跡は甲斐型土器編年Ⅸ期ないしＸ期、９世紀後半（平安時代）に構築されたものと考えられる。

◎B 地点　1号住居跡（第 12・13 図）

Ｂ地点の調査区の東側に検出された。長軸方位をＮ－17°－Ｅにとる。平面系は隅丸方形を呈していたと想定される。規模は約 4.3m×4.3m を測る。床面は平坦で、カマドの周辺には構築材の一部と思われる粘土が散布しており、焼土も混在していた。床面の標高は平均 501.676m である。しっかりと貼られた床ではない。残存する壁は北西と南東のみで、いずれも壁高は５㎝前後で、急角度をもって立ち上がる様相を示す。覆土は遺構確認土以下、概ね１色の土層堆積であり、粒子、礫、スコリアの含有量などを検討して６層に分層した。

カマドは北壁のやや西寄り壁面に設けられており、粘質土と溶岩により構築されていると思われるが、崩落が著しく、残存状況はかなり悪い。規模は 1.4m×1.2m、高さは 25 ㎝を測り、床面を掘り下げた部分の深さは 20 ㎝を測る。袖などの構築も認められず、煙道も確認されなかった。粘質土と焼土が層をなして検出されたことでカマドと断定した。カマド内部からは焼土が多量に検出され、甕の破片、獣骨片が出土した。

試掘の際にこの住居跡の直上に№26 トレンチが設定されたため、早い段階から覆土にカマド

の構築材の一部と思われる褐色の粘質土と焼土の混在が確認された。しかしながら、この住居跡の周囲は耕作等による削平を受けていたため、遺構確認面以下が浅く、遺構のプランはカマドの位置から推定し、北西部分と南東部分における土の色調の違いから確認に至った。しかし北西部分と南西部分のコーナーの遺構プランは損なわれ明確ではない。

主な遺物としては床面直上から坏の底部に「智□」と2文字の墨書があるものが出土しているが、甲斐型土器編年のⅧ期～Ⅸ期に比定されるもので、平安時代9世紀中頃と思われる。この住居跡の構築時期はその頃のものと推定される。

＜B地点1号住居跡の執筆は井部利春（都留文科大学考古学研究会）による＞

◎C地点　1号住居跡（第14・15図）

C地点の南端に検出された。グリッドは、F1～2、G1～2、H1～2に属する。住居の南東部分のおよそ半分は調査範囲外にあり全容は明らかでないが、平面形状は1辺約4.0m前後の隅丸方形を呈するものと理解できる。住居の南壁にC47号土坑、東壁をC32およびC53号土坑が重複している。主軸方位はE－7°－Sを示す。床面はほぼ平坦で、粘質土及び焼土の分布が一部で確認された。竈は検出されなかったが調査区外の未発掘部分に存在すると推測される。壁は全体に垂直よりもやや緩やかな立ち上がり約40㎝の壁高を有する。

本住居跡は、今回の調査で検出された竪穴住居跡の中で唯一、柱穴が検出できたものである。柱穴は住居跡のプランの外周に沿い、やや離れた位置に6基検出された。直径30㎝前後の規模である。C33・36・37・39・40・41号土坑とした小ピットがそれに相当する。

出土遺物からの構築時期の想定は難しいが、甲斐型土器編年X期以前と考えられよう。

◎C地点　2号住居跡（C地点2号住居跡a・C地点2号住居跡b）（第16・17・18図）

C地点の北端に検出され、グリッドはA12～15、B12～15、C12～15、D12・13にあたる。C地点で検出された住居跡の中で、このC2号住居跡のみが遺構全体を確認できた。重機による表土剥ぎで除去しきれなかった表土を作業員による人力で掘り下げてゆく段階から、この住居跡のプランの範囲では多量の土器片が検出され、住居跡の存在する可能性が高いと推測された。確認面精査の結果、約4.5m×6mの住居跡のプランが検出された。主軸方向はN－75°－Eである。東壁にはC50号およびC51号土坑が重複している。本住居跡の検出当初、粘質土のまとまりが北壁と東壁に認められ、カマドであることが予想された。2箇所でそのような兆候がみられることから、本住居跡は一度構築された後、改築もしくは再構築されたものと推定できる。2基のカマドをそれぞれ、東壁のものを1号カマド、北壁のものを2号カマドと設定した。カマドの調査の結果、1号カマドは袖石や天井石が良好な状態で遺存し、内部には焼土、炭化物、灰などが明確に分布していたが、2号カマドは粘質土に若干の焼土が混在する程度で、甕の破片が若干みられたものの、構築材となる石組などはみられなかった。よって2号

カマドよりも１号カマドの方が新しいものとであり、２号カマドは廃絶されたものと考えられる。１号カマド付近と２号カマド付近で出土した完形に復元し得る坏を比較したところ、両者には時期的な差異がなく、住居跡覆土の南北軸のセクションにも明確な切り合い関係が認められないことから、短期間のうちに住居の改築もしくは再構築がなされたと思われる。２号カマドが使用されていた段階をＣ２号ａ住居跡、１号カマドの使用されていた段階をＣ２号ｂ住居跡と考え、ほぼ同一のプランの範囲内に新旧の住居跡が存在したと仮定しえる。本住居跡には柱穴、壁溝等は検出されなかった。出土遺物から本住居跡は甲斐型土器編年ＸＩ～ＸⅡ期、平安時代10世紀前半のものと推定される。

◎C地点　3号住居跡（第19図）

C２号住居跡の南東側に隣接する位置に検出され、グリッドはD11～12、E11～12に所属する。Ｃ１号住居跡と同様、住居の南東部分のおよそ半分は調査範囲外にあり全容は明らかにし得なかった。調査部分の規模は約3.5m×3.0mで、平面プランは一辺3.5mの隅丸方形に近い形状を呈することが予測できる。主軸方位はE－82°－Wである。床面はほぼ平坦であるが、北壁と調査区域の接点部分に粘質土のまとまりと石組みがあり、甕の破片が偏在していたことから、カマドの袖であると思われ、カマドは北壁に設けられていた可能性が強い。壁高は40㎝を測り、ほぼ垂直な立ち上がりをもつ。本柱穴、壁溝などは検出されなかった。本住居跡の覆土中からは鉄鏃と鑿が１点ずつ検出されている。構築時期は出土遺物から甲斐型土器編年Ⅵ期～Ⅶ期、平安時代の８世紀末～９世紀初頭と推定される。

◎D地点　1号住居跡（第20・21図）

C地点の北側に所在するD地点は、この住居跡を調査するために設けられた。試掘調査の段階で多くの土器片、特に土師器片が包含層において見つかり、確認面精査によって住居跡のプランである可能性が濃厚となった。そのため本調査に際し、２ｍ×２ｍのテストピットを拡張し、住居跡全体のプランを検出することに努めた。その結果、約3.5m×3.1　mのややコーナーに丸みをもつ方形の住居跡であることが確認された。主軸方位はN－72°－Eを示す。遺構確認面はC地点の近隣でありながら深く、現地表面から１ｍ以上掘り下げたレベルにある。古代の地形はC地点よりD地点の方が低く、南から北にかけて傾斜していた可能性も指摘し得るであろう。壁高は約35㎝を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はやや軟弱で、明確に貼り床と言えるものではなく、カマドから飛散したと思われる粘質土の分布を手掛かりにした。カマドは住居跡の東壁の南寄りに設けられていた。本住居跡の特徴として、カマドから屋外に向けて溶岩石の配列が認められたことが挙げられる。カマドの袖石や天井石に続いておよそ１ｍの長さをもつ。カマドの煙道と予測し、セクションを観察したが、張り出した部分には、焼土や粘質土の分布がみられなかった。カマドに連結している在り方からカマドの構築材である可能性が強い。カマドの前方から甲斐型坏が完形で１点出土している。また、本住居跡からは、甲

斐型と系統が異なる皿と甕が1点ずつ出土していることが特筆すべきものであろう。出土遺物から本住居跡は甲斐型土器編年ＸⅠ～ＸⅡ期、平安時代10世紀前半のものと推定される。

第2節　掘立柱建物跡

本遺跡ではA地点において2棟の掘立柱建物跡が発見されている。今回の調査では、AおよびC地点において、150を超える土坑が検出され、この他にも掘立柱建物跡を構成するものも含まれる可能性があるが、対応関係が不明瞭なため、ここでは2棟について触れるにとどめる。

◎A地点　1号掘立柱建物跡（第22図）

A地点の北東側に検出された8基の土坑から構成される遺構である。52、53、54、58、59、66、67、68号土坑がそれに相当する。これらの土坑の深さは35㎝から深いものでは70㎝を測るものもあるが、平面プランは掘立柱建物跡として捉えうる規格性を備えている。この掘立柱建物跡の規模は長軸約3m×短軸約2.5mである。柱穴間の距離は1m前後を測る。建物の構造を想定した場合、中央部分に柱穴が検出されていないことから、8本の柱穴が外周するタイプであろう。なお、本遺構の西側に49、50、51号（49、51号は重複）土坑が隣接するが、本遺構に伴うか否かは不明である。出土遺物は各土坑にまばらにみられたが、図示し得るほどのものはなかった。平安時代の住居跡と同じく黒色土を掘り込んでいるため、平安時代もしくはそれ以降の所産と思われる。

◎A地点　2号掘立柱建物跡（第23図）

A地点1号堀立柱の南側に検出された、やはり8基の土坑から構成される遺構である。しかし、北側に試掘トレンチが設定されていたため、確認調査の際に北側中央の1基を損なってしまったが、本来は9基の柱穴から構成されていた遺構であろう。土坑名は61、62、63、64、69、70、71号と設定されたものである。土坑の規模は62号が最大で、直径約1mを測り、最小の64号が直径0.5m程である。概ね0.6mが8基の土坑の平均的な規模である。深さは30㎝～40㎝を測るものが大半を占める。遺構としては、長軸約2.5m×短軸約2mの建造物が想定できる。柱穴間の距離は50㎝～70㎝である。1号掘立柱建物跡には検出されなかった、中央の柱穴と考えられるものも本遺構では検出され、1号とは型式的に異なった構造をもつものと考えられる。1号と同様、発見された遺物は乏しく、土器の細片が認められた程度である。本遺構も平安時代以降のものと思われる。

第3節　土　坑（第22図～第34図）

本遺跡ではA地点において101基、C地点では51基の計152基にのぼる多数の土坑が検出されている。この中には、第2節で掘立柱建物跡として触れた土坑もこの数に含まれている。掘立柱建物跡を構成すると思われる土坑を除いても、その数は140基も数える。構築時期を限定するのは難しいが、概ね平安時代もしくはそれ以降のものであろう。小規模なものは、柵列や簡易的な構築物を示すものも含まれていると考えられるが、安易に想定するのは危険性があるため避けることとする。また、大規模なものについては、柱穴以外に墓壙や貯蔵施設跡などであることも想定し得るが、墓壙である場合の根拠となる人骨や副葬品、蔵骨器等の検出がないことなどを理由に、それぞれの土坑に対する性格の位置付けは不可能である。140基のうち特筆すべきものとして次の2基の土坑が挙げられる。

◎A地点76号土坑

覆土から「東」という文字の一部であると思われる、墨書のある皿が発見されており、何らかの祭祀に伴うものの可能性がある。

◎C地点28号土坑

本土坑からは土器片が比較的多く検出され、覆土下層に粘質土や焼土の分布が僅かではあるが確認された。炉跡とも考えられ、竪穴住居跡以外の居住施設の一部である可能性も示唆し得る。

第4節　溝状遺構

今回の発掘調査においてA地点で4条、C地点で1条、計5条の溝状遺構が検出された。

◎A地点　1号溝状遺構

A地点の西端、A5-α、B1-α、B1-0、B2-α、B2-0、B3-α、B3-0グリッドに位置する。他の4条の溝状遺構とは異なり、重機による表土剥ぎの後、作業員の人力による表土除去の際に他の遺構の確認面よりも上層の黒色土に暗灰褐色の土が入り込んだ、ほぼ南北に伸びる細長い遺構として確認された。確認された範囲での規模は、全長約8m、幅0.8m～1.5mを測る。覆土は現水田下層の土壌と類似しており、時期的には近現代の所産と推定される。掘り込みは浅く、最も深い部分でも0.2mを測る程度である。溝の底面には砂や小礫の分布しており、水の流れた痕跡とも思われる。出土遺物は見られなかった。遺構の性格としては水路跡などが想定される。

◎A地点　2号溝状遺構

A地点の遺構西側、遺構が確認された範囲の南端に位置し、グリッドは B4-0～5、B5-0～5に所属する。ほぼ東西に伸びる遺構である。西端部の幅が狭く 0.6m程で、およそ 3m東の部分より幅が拡がり、約 1.8mを測る。全長は 11m。掘り込みは浅く、0.1m～0.2m程である。A地点1号溝状遺構と同様、溝の底面に若干の砂や小礫が分布していた。遺物は少量の土師器や須恵器の破片が確認されたが、図示し得るほどの資料はない。時期の特定は困難であるが、少なくとも平安時代以降の所産と考えるのが妥当であろう。遺構の性格は水路跡もしくは小規模な旧河床などと思われる。

◎A地点　3号溝状遺構

A地点2号溝状遺構と平行し東西に細長く伸びる遺構である。検出された溝状遺構のなかでは最長の規模をもち、全長は約 19mを測る。幅は 0.2～0.4m、深さ 0.1～0.2m。底面はU字形を呈する。覆土には遺物が若干みられた。遺物の大半は流れ込みと思われる。縄文時代の黒曜石製の石鏃、平安時代の土師器、須恵器の破片、中世の貨幣が混在していた。時期の確定は困難であるが、おそらく平安時代以降の所産と思われる。

◎A地点　4号溝状遺構

A地点の調査区拡張部分、A'4-15～16 、A'4-15～16 グリッドに検出された。A地点の駅舎建設予定地範囲の東側に土坑群と須恵器の大量の破片が試掘による確認調査の段階で検出されていたため調査区を拡張したが、本調査でこの溝状遺構の南半分のプランが確認され、住居跡の端である可能性も考えられたことから、さらに北側に拡張した。結果として住居跡ではなく、この溝状遺構と5基の土坑が検出された。全長 4m、幅 0.6m、深さ 0.5mの規模を測る。底面は平坦で、溝壁はほぼ垂直な立ち上がりをもつ。底面に砂や小礫等の分布も認められず、A地点で検出された他の3条の溝状遺構とは性格が違うものと考えられる。覆土からは平安時代の土器の破片が検出されている。

◎C地点　1号溝状遺構

C地点で検出された唯一の溝状遺構である。D-6グリッドに所在する。東西に伸びるものであるが、西側 12号土坑をはじめ3基の土坑が重複しており、従来の規模は不明である。重複部分を除く全長は約 1.8mを測る。幅 0.42m、深さは 0.3m。底面はほぼ平坦で、溝壁は垂直に立ち上がる。出土遺物はほとんど確認されていない。A地点の4号溝状遺構に類似する。構築時期の特定は難しいが、平安時代以降の所産と思われる。

第４節　竪穴状遺構

Ｃ地点において２基の竪穴状遺構が検出されている。

◎C地点　1号竪穴状遺構

Ｃ地点の調査区域の東端に検出され、遺構の大半は調査区域外に存在すると考えられる。F5～6、G5～6グリッドに所属する。南西のコーナーを10号土坑により切られている。検出された範囲の規模は幅 2.1m×0.6mという非常に限られたものである。一辺 2.1m前後の方形プランを呈する遺構と推測されることと、底面に粘質土や焼土の分布が認められないことから、住居跡である可能性は低いと判断するに至った。壁高は 0.35～0.4mを測り、立ち上がりはほぼ垂直である。遺物は覆土から須恵器の蓋の破片などが検出されている。構築時期を特定するための根拠に乏しいが、平安時代あるいはそれ以降の所産と思われる。遺構の性格は不明である。

◎C地点　2号竪穴状遺構

１号竪穴状遺構と同様、Ｃ地点の調査区域の東端に検出された。遺構の大半は調査区域外に存在すると考えられる。F8～9グリッドに所属する。コーナーの一部が検出された程度に留まり、全体の規模は不明。竪穴住居跡である可能性も否めないが、全体が把握できないことや底面（床面）に粘質土などの分布が確認されないことなどから、竪穴状遺構として認識することにとどめた。深さ 0.35mほどの掘り込みをもつ。出土遺物は僅少である。構築時期については、１号と同じく平安時代ないし、それ以降の所産と推定される。一部分の発掘であり、データに乏しく遺構の性格は不明である。

第Ⅳ章　遺　物

本遺跡から出土した遺物は主に平安時代の土師器、須恵器ならびに鉄製品である。以下遺構ごとに出土した遺物について述べるが、詳細は「土器観察表」を参照とされたい。

第１節　住居跡出土土器

◎A地点　1号住居跡出土土器

本住居跡から出土した土器のうち、図示し得たものは64点である。器種別に概略を示すこととする。

○土師器坏

1・4・6～9・23・30・31・33・34・36・37・40・45～47・53・57・58・63 が土師器坏である。1は口径11.2㎝、器高4.3㎝の、底径4.3㎝を測る完形に復元し得た資料である。内面暗文、外面にはロクロナデと篦削りで調整が施されている。底部は糸切りの後、篦削りを施したと思われ、解読不明の墨書がある。4は口縁から体部にかけての破片である。口縁の復元径は10.8㎝、残存器高は3.7㎝を測る。内面暗文、外面にはロクロナデと篦削りで調整が施されている。6は底部の半分と体部の一部の破片である。底面には「公」という文字の一部と推定される墨書がある。7は口径11.8㎝、器高4.2㎝の、底径5.0㎝を測り、1と同様に完形に復元し得た資料である。内面暗文、外面にはロクロナデと篦削りで調整が施されている。底部は糸切りの後、篦削りを施したと思わる。色調は内外面ともに茶褐色である。底面には良好に残存した「入」という文字の墨書がある。8は内黒の比較的大型のもので、口縁の復元径は17.8㎝を測る。内面はロクロ整形後に丹念に横ミガキがなされ、さらに縦方向に暗文が施されている。外面は淡い茶褐色の色調をもち、ロクロナデが施されている。体部の下部は欠損しているものの回転篦削りの施された部分が若干窺い知ることができる。9は底部片であるが回転糸切りがなされたものである。底径はおよそ7㎝であろうと推測される。体部内面には暗文が確認できる。23は口縁から体部にかけての部分片である。口縁の復元径は14.4㎝と思われる。内面暗文、外面にはロクロナデと篦削りで調整が施されているが、外面の篦削りは体部の上部、口縁に近接する部分にまで達している点が特徴的である。30は底部の一部と体部の下半分の部分片である。体部の内面暗文、外面篦削り、底部も篦削りで調整がなされている。僅かに残存している底面には墨書の一部が認められる。31は底部の1/4ほどの破片である。底面には墨書の一部が確認できる。33・34・36・37・45・46・47・53・57・63はいずれも底部の部分片である。34の見込み部には暗文が施されており、底面には墨書の一部がみられる。57の底面には回転糸切りの痕跡が明瞭に残っている。40は口縁から底部にかけての破片である。内面暗文、外面はロクロナデと篦削りが施されている。内外面ともにやや暗い黄褐色の色調をもつ。58は口径11.0㎝、器高4.4㎝、底径4.4㎝の完形に復元し得た資料である。内面には鋸歯状に暗文が、外面にはロクロナデと篦削りが施されている。底部は篦削りにより調整され、底面には「公」という文字の墨書がある。

○土師器皿

2・3・14・17・32・39・48～50・62が土師器皿である。このうち完形に復元し得たものは、2・3の資料である。2は口径12.6㎝、器高2.8㎝底径5.0㎝を測る。口縁部分はやや外反する。3は口径13.8㎝、器高2.2㎝、底径4.9㎝で、口縁部分は2よりもシャープに外反する。両資料ともに内面は渦巻き状の暗文、外面と底面は回転篦削りが施されている。2の底面には土師器坏の58と類似した筆跡で「公」という文字、3の底面には「男」と思われる文字の墨書がそれぞれある。14は底部の一部であるが見込み部には渦巻き状の暗文がみられる。17は口縁から器体部にかけての部分片である。内面には渦巻き状の暗文が確認できるが一部であるため、どのような形状を呈するかは不明。32・39・48・49・50・62は底部の部分片である。32以外は見込み部に渦巻き状の暗文が見て取れる。

○土師器甕

5・10・24～29・41～43・51・54・59・64が土師器甕である。5は推定口径26.2㎝、残存高14.6㎝を測り、本住居跡出土の甕の中で最大限に復元し得たものである。外面は縦方向に、内面は横方向ないし斜位に、口唇部内面は口縁の弧にほぼ平行に刷毛が施されている。口唇部に肥厚はみられず、薄長の形態をもつ。胴部には膨らみがあまりない。色調は基本的に内外面ともに暗茶褐色であるが、外面には二次的な焼成痕がみられる。10は推定口径26.8㎝、残存高8.4㎝を測る。特徴的には5と類似するが、口唇の末端、器体部との接点のあたりは、ナデによるくぼみが確認できる。24～29、41～43、59、64は底部の破片であるが、いずれも内面は横刷毛、外面は縦刷毛、底面には木葉痕という、甲斐型甕にみられる特徴を示す資料である。59は口縁から器体部にかけての破片である。

○須恵器坏

22・35・60・61が須恵器坏である。22・60・61は底部片である。各資料ともに底面の回転糸切り痕が明瞭に確認できる。35は推定口径11.0㎝の口縁の破片である。

○須恵器蓋

13・55の2点が須恵器蓋で、ともに口唇部の破片である。13は推定最大径19.0㎝で口唇部が突出する形状をもつ。55は推定最大径15.8㎝。

○須恵器瓶

11・44が須恵器瓶の底部と思われる資料である。11はカマド内部から出土した。内外面とも自然釉が確認できるが、外面のものはコバルトブルー、黒、暗緑の3色がある。底部は回転糸切りの後、高台を調整したものと考えられる。44は摩滅が内外面ともに激しく整形および調整の観察は不可能である。

○須恵器壷・甕

11・12・15・16・18～21・52・56はいずれも須恵器の壷もしくは甕である。どの資料も部分的な破片のため、器形の全容の把握は困難である。18以外の資料の外面にタタキの痕跡がみられる。21の内面には雲形のタタキが確認できる。18は横方向にナデが施されている。

◎B地点　1号住居跡出土土器

本住居跡から出土した土器のうち、図示し得たものは22点である。

○土師器坏

1～6が土師器坏である。1は口径11.4㎝、器高4.7㎝、底径4.3㎝の完形に復元し得た資料である。内面暗文、外面にはロクロナデと篦削りが、底部全面に篦削りが施されている。口縁は丸形を呈し外反はしない。底面には「智□」の2文字の墨書があるが、今回の発掘調査で得られた墨書土器の中で2文字が明瞭に残存しているものは本資料のみである。甲斐型土器の第Ⅷ期～Ⅸ期にみられる特徴を備えている。2は底部の破片であり、回転糸切りが明瞭に確認できる。しかし、内面に暗文が確認できず、外面にはロクロナデのみで篦削りの痕跡がない。胎土の色調も黄褐色で当該期の土師器坏にはあまり見られない特徴である。緑釉陶器の表面の釉が剥落したものにみられる現象の可能性もある。3は口縁から底部の一部にかけての破片である。口縁は若干外反する。内面には暗文、外面はロクロナデと篦削りが施されている。底面は篦削りと思われる。4は口縁から器体部にかけての破片で、内面には鋸歯状暗文が、外面にはロクロナデが施されている。5は底部を中心とする破片である。器大部内面と見込み部に暗文、外面はロクロナデと篦削り、底面には回転糸切りと篦削りが施されている。見込み部に暗文があるという特徴から、甲斐型土器の第Ⅶ期以前のものと考えられる。6は器体部中ほどから底部にかけての破片である。内面には鋸歯状暗文、外面はロクロナデ、篦削りがなされている。底面は篦削りと思われる。

○土師器甕

7～14が土師器甕である。7・8・12は底部の破片で、内面には横刷毛、外面に縦刷毛が施され、底面には木葉痕が確認できる。9・10は同一個体と思われる資料で、推定口径18.1㎝、底径6.4㎝。口縁は内外面ともナデが施され、器体部の内面は横方向、外面は斜方向に篦削りがみられる。底面には木葉痕が確認できる。頸部から胴部にかけて丸みを帯びる。甲斐型土器ではない異系統の土師器甕と思われるが、相模型である可能性がある。11は口縁の部分片である。いわゆる「堀之内原 Type」といわれるもので、胎土に古代紫色の粒子を含有する。13は口縁から器体部にかけての破片である。外面に縦方向に、内面は横方向ないし斜位に、口唇部内面は口縁の弧にほぼ平行に刷毛が施されている。口唇部に肥厚はみられず、薄長の形態をもつ。胴部にはやや膨らみをもつ。推定最大径は28.0㎝。14も口縁から器体部にかけての破片である。特徴的には13と類似する。

○須恵器壷・甕

15～17が須恵器壷または甕と思われる破片資料である。15は底部の一部と推定される。断面観察から高台は器体部に貼り付けられたものであると推測される。16・17は器体部の部分的な破片である。外面にはタタキが施された痕が確認できる。

○陶器

21・22は陶器の破片である。住居跡のプランの直上から検出されたものだが、住居跡に伴うものではない可能性が強い。

◎C地点　1号住居跡出土土器

本住居跡から出土した土器のうち、図示し得たものは13点とわずかである。これらを器種別に概観する。

○土師器坏

1～9、12・13が土師器坏である。細片が多く、器形の全容がつかめる資料に乏しい。1・2は口縁の一部で、

丸形の口唇をもち、内面には鋸歯状暗文、外面にはロクロナデが確認できる。3も口縁の部分片である。内外面ともにロクロナデがなされている。5もやはり口縁の部分片。ただし、内面には横方向、外面には縦横の格子状に暗文が施されている。古い段階の甲斐型土器にみられる特徴である。6は口縁の部分片で、内面には暗文、背面にはロクロナデ、篦削りがみられる。7・9は同一個体の可能性も指摘できうる資料である。口縁から底部にかけての破片で、推定口径約14.0㎝、器高3.4㎝、推定底径約8.5㎝。形状、法量が窺い知れる資料である。内面暗文、外面にはロクロナデ、篦削りが施されている。底部は全面的に篦削りであると思われる。8は口縁から器体下部までにかけての破片である。内面には暗文の一部が確認できるが、摩滅が激しく不明瞭である。外面はロクロナデと篦削りが施されている。12・13は口縁の部分片である。

○土師器甕

10・11が土師器甕である。10は底部片で、底径は12.2㎝。外面には縦刷毛が確認できる。底面には木葉痕の一部がみられる。11は口縁から体部にかけての破片で、外面は縦刷毛、内面には横刷毛が施されている。

◎C地点　2号住居跡出土土器

本住居跡から出土した土器は今回の発掘調査では最も多く、図示し得たものだけでも129点にものぼる。これらを器種別に概観する。

○土師器坏

1～19、21～36、38～45、58・59・73・126・127が本住居跡出土の土師器坏である。1は口径11.9㎝、器高3.5㎝、底径3.4㎝を測る。内外面にロクロナデ、底部は回転糸切りの後に手持ち篦削りが施されている。器体部には「イ」もしくは「丁」という文字の墨書が記されている。2は口径13.9㎝、器高5.0㎝、底部径5.0㎝の法量をもつ内黒坏である。器体部の内外面はロクロナデが施されている。3は口径11.1㎝、器高4.1㎝、底径4.1㎝を測り、口縁の一部を欠くがほぼ完形のままで発見された。内外面ともにロクロナデがなされ、器体部外面下部は篦削りで調整がされている。1と同様に器体部に墨書がある。逆位で書かれている。底部は篦削りである。4は破片接合の結果、器体全体の3/4ほど復元し得たもので、口径13.6㎝、器高4.6㎝、底部径5.1㎝を測る。底面は回転糸切りの後、篦削りが施されている。5は内黒坏で、口径の復元径16.3㎝、器高6.8㎝、底部径6.5㎝を測る。器体部の内面と外面はともにロクロナデによる整形を施され、外面の下部は篦削りにより調整を加えられている。底面は回転糸切りを篦削りにより調整したものである。6は口径12.5㎝、器高4.0㎝、底部径5.1㎝、7は口径12.4㎝、器高3.6㎝、底部径5.0㎝を測る。両資料とも器体部の内外面にロクロナデ、外面下部、底面は篦削りが施されている。2点に共通する特徴として胎土に黒色の粒子を含み、直径1～5㎜ほどの斑点状に表面に現れている。8は覆土上層から検出された資料で、復元口径11.6㎝、器高4.4㎝、底部径7.1㎝を測る。口縁の断面形状はやや尖形である。底面は全面的に篦削りによる整形。器体部の内面、見込み部と底面には放射状に、外面は横方向ないし斜方向に暗文およびミガキが施されている。甲斐型土器の編年では第Ⅵ期に相当するものであろう。9は口縁から器体下部にかけての破片である。10は口縁の復元径12.0㎝、器高4.3㎝、底部径4.3㎝を測る。器体下部および底面は篦削りによる調整。11は口縁復元径15.5㎝を測るが、口縁の上端を平坦に調整している点が特徴として挙げられる。12は復元径12.9㎝の口径をもつものであるが、口縁の肥厚部分（隆玉形状）をそぎ落とすが如く扁

平に調整している。13 は復元径で口径 15.2 ㎝、底部径 6.7 ㎝、器高は 3.7 ㎝を測る。口縁の隆玉形状の膨らみは、さほど顕著ではない。器体部の内面、外面はともにロクロナデ、器体部外面下部および底面は篦削りによる調整。14・15・17～19 は口縁から器体部にかけての破片である。復元口径は、14 は 13.0 ㎝、15 は 10.8 ㎝、17 は 12.3 ㎝、18 は 14.4 ㎝、19 は 11.7 ㎝である。各資料のいずれも内面、外面はロクロナデによる整形である。14・15・17・18 は器体部外面の下部に篦削りの調整が確認できる。19 は内面に密度の濃い暗文がみられる。16 は底部から器体下部にかけての破片である。器体部外面には「長」と思われる墨書が逆位に記されている。21・27 は内黒坏の口縁から器体部にかけての破片で復元口径は、21 が 13.7 ㎝で 27 は 16.3 ㎝。22・25・26・28～32、34～36・41・44・45・58・59・127 は口縁から器体部にかけての破片である。復元した口径は、22 は 13.0 ㎝、25 は 10.8 ㎝、26 は 8.7 ㎝、28 は 11.3 ㎝、29 は 14.1 ㎝、30 は 10.0 ㎝、31 は 12.9 ㎝、32 は 9.5 ㎝、34 は 13.3 ㎝、35 は 8.4 ㎝、36 は 11.8 ㎝、41 は 9.6 ㎝、44 は 13.4 ㎝、45 は 13.8 ㎝、58 は 14.4 ㎝、59 は 8.4 ㎝、127 は 12.8 ㎝である。このうち 25・26・35・36・45・59・127 は覆土上層より検出されたもので、7 点とも丸形の口縁をもち、内面には暗文が確認できる。34・36 は、器体部外面に横方向の暗文が認められ古い段階の様相を示している。28・58 の器体部外面には墨書の一部が残存している。23・24・33・39 は底部の破片である。底部径は、23 が 4.4 ㎝、24 が 4.2 ㎝、33 は 4.9 ㎝、39 は 3.0 ㎝である。いずれの資料も内外面はロクロナデで整形、外面と底面は篦削りにより調整されている。39 の底部直上の器体部に「主」という墨書が逆位に記されている。38 は口径 16.7 ㎝、器高 5.4 ㎝、底部径 6.4 ㎝を測る資料である。焼成が若干弱い。40 は口径 13.0 ㎝の口縁から器体部にかけての破片である。内面と外面はロクロナデによる整形がなされ、外面下部は篦削りで調整されている。器体部には部分的で解読が不可能な墨書があるが、おそらく逆位であろう。42 は口径 11.8 ㎝器高 3.9 ㎝、底部径 4.2 ㎝。器体部の内面・外面はロクロナデによる整形、外面下部および底面は篦削りで調整されている。器体部の中ほどには墨書の一部が認められる。43 は復元口径 12.6 ㎝の口縁から器体部にかけての破片である。内面はロクロナデの後、暗文が施され、外面はロクロナデによる整形の後、下半部を回転篦削りにより調整している。73 は底部の破片であるが、底面に「人」もしくは「久」と思われる墨書が確認できる。126 は口径 16.8 ㎝、器高 5.6 ㎝、復元底部径 5.8 ㎝。器体部の内外面ともにロクロナデによる整形。外面下部は篦削りにより調整されている。

○土師器高台坏

本住居跡では 20 と 37 の 2 点の土師器高台坏が出土している。20 は口縁からから底部にかけての破片で、復元口径 17.2 ㎝。内面と外面はロクロナデにより整形されている。さらに内面は暗文、器体部外面下部は回転篦削りの痕跡がが認められる。高台は篦状工具による削り出しと推測される。器高は 5.1 ㎝、底部径は 8.5 ㎝を測る。見込みぶは欠損しており、調整等は不明。37 は底部の部分的な破片である。復元底部径は 7.0 ㎝を測る。高台部の脚高は約 0.6 ㎝で、高台は篦状工具による削り出しであろう。見込み部には求心的な放射状の暗文がみられる。

○土師器皿

土師器皿は 71・72・74・76・77・92 の 6 点が本住居跡より出土し、図示し得たものである。71 は 4 つの破片が接合し石膏等による補修をせず完形に復元することができた資料である。口径 12.2 ㎝、器高 2.7 ㎝、底部径 4.0 ㎝を測る。内面と外面はロクロナデによる整形、器体部外面下部および底面は篦削りによる調整で底面から観察すると花弁状を呈している。器体部には「金」もしくは「全」という文字のくずしかと思われる墨書が正位で記されている。72 は器全体の半分ほどの資料である。整形・調整方法は 71 とほぼ同じである。やはり器体部に墨書が確

認でき、「長」という文字が正位で記されている。74・76・77・92 も基本的に 71 および 72 と整形・調整方法は同様と思われるが 76 は底部を欠損している。74 の資料の特筆すべき点は、器体部と底面に墨書が確認できることである。残念ながら欠損箇所が多く文字の判別・解読は不可能である。器体部の墨書は 71 の墨書に類似する点があり、同一の文字である可能性もある。底部のものは「人」であろうか。

○土師器甕

48～57、60、78～91、93～99、124・125、128・129 が図示し得た本住居跡出土の土師器甕である。48 は口径 15.8 ㎝の小型甕の口縁片である。内面には横刷毛、外面には縦刷毛がみられる。口唇部内面には口縁の弧に平行する刷毛目が確認できる。49～57、99、124・125・128・129 は底部片である。49～55、99、124・128・129 は内面に横ないし斜め刷毛、外面に縦刷毛が施されたもので、底面には木葉痕が確認できる。51 の内面には炭化物が付着し黒くなっている。52・53 は同一個体であり実測が終了した後で接合した。56・125 は同一個体であり、後になってから接合した。胎土に長石を多く含み、内外面ともに刷毛目がみられず、いわゆる「堀之内原 Type」であろう。57 は内外面に削りの痕跡が認められ、底面にはミガキがかけられている。甲斐型ではなく、相模型ないし駿東型である可能性がある。60、78～91、93～98 は口縁片である。復元口径は 60 が 15.4 ㎝、78 が 32.8 ㎝、79 が 27.6 ㎝、80 が 37.0 ㎝、81 が 32.2 ㎝、82 が 30.2 ㎝、83 が 26.0 ㎝、84 が 14.4 ㎝、85 が 18.2 ㎝、86 が 17.6 ㎝、87 が 20.4 ㎝、88 が 25.6 ㎝、89 が 24.4 ㎝、90 が 25.0 ㎝、91 が 22.2 ㎝、93 が 26.4 ㎝、94 が 29.2 ㎝、95 が 24.4 ㎝、96 が 23.6 ㎝、97 が 17.4 ㎝、98 が 19.2 ㎝をそれぞれ測る。85 を除くすべての資料は口縁が肥大し短い形状のもので、口唇部内面には弧にほぼ平行する刷毛目が確認できるが、外面にはみられない。器体部内面は横刷毛、外面は縦刷毛という甲斐型にみられる典型的な方法が用いられている。85 は口唇の内外面にナデがあり、形状も他の資料と異なる。色調は暗茶褐色のものが大半を占めるなか、本資料のみ淡い茶褐色をしている。口縁直下の器体部との接点が外反するため、器形は胴丸のものであると思われる。したがって甲斐型ではなく、駿東型などである可能性がある。

○土師器羽釜

本住居跡からは羽釜が２点（46・47）検出されている。今回の発掘調査で羽釜が検出された住居跡はこのＣ地点２号住居跡のみである。46 は口径 15.8 ㎝、最大径 22.5 ㎝、残存高 5.0 ㎝の資料である。器体部内面には横刷毛が施されているが、外面は欠損しているため不明。羽部は反り上がり、上面には弧と平行に刷毛がかけられている。口唇部分は刷毛で調整が加えられている。47 は口径 26.2 ㎝、最大径 34.5 ㎝、残存高 5.8 ㎝を測り、46 よりもやや大型の羽釜である。器体部内面は横ないし斜めの刷毛目が施されているが、外面は欠損しており不明。口唇部は肥厚しており僅かに外反する。口唇部外面はナデにより調整されている。羽部は平坦で、両面と側面には刷毛目が確認できる。

○須恵器坏

109・110・113・122 が図示し得た本住居跡出土の須恵器坏である。109・122 は口縁片である。109 はやや外反した口縁をもつ。122 は復元口径 12.6 ㎝。両資料ともにロクロナデによる整形がなされている。110 は底部の約半分の破片で底面には回転糸切り痕が明瞭に確認できる。底部径は 5.8 ㎝をはかる。113 は器体下部の破片である。

○須恵器高台坏

本住居跡からは須恵器高台坏が１点のみ出土している。111 は底部の復元径 9.4 ㎝の資料である。高台部分は成

形時に別粘土を貼り付けたものであろう。底部は静止糸切りと思われる。

○須恵器蓋

102～107、121 が須恵器蓋である。102・103、105～107、121 は蓋の口縁部分の破片である。このうち 103 以外の側面はほぼ平坦である。103 は側面がやや括れる。104 は器体部の破片である。

○須恵器壷・甕

本住居跡出土の須恵器壷・甕は 61～70、100・101、112、114～120、123 である。このうち 112、116 は壷の口縁の破片である。復元口径は、112 が 20.8 ㎝、116 が 20.0 ㎝。両資料とも外面はロクロ成形時に指をあてた部分の軌跡がくびれとなっている。61～70、100・101、114・115、117～120、123 は器体部（胴部）の破片である。このうち 63～70、100・101、114・115、117～120 は外面にタタキ目が確認できる。さらに 63・69・100 の内面には雲形ないし連弧状のタタキ目がみられる。115 の外面には緑色の自然釉が付着している。これらの破片資料は部分的なものであるため、器形や法量の全容を知る手掛かりとなるものは皆無である。

◎ C地点　3号住居跡出土土器

本住居跡から出土した土器のうち、図示し得たものは 27 点である。これらを器種別に概観する。

○土師器坏

1～15、21、27 が土師器坏である。1～4、7～10、13・14、27 は口縁の一部である。口径の復元値は次の通りである。1 は 12.8 ㎝、2 は 8.8 ㎝、3 は 12.8 ㎝、4 は 9.6 ㎝、7 は 11.4 ㎝、8 は 7.2 ㎝、9 は 6.8 ㎝、10 は 8.8 ㎝、13 は 14.0 ㎝、14 は 9.6 ㎝、27 は 13.4 ㎝を測る。各資料とも、内外面はロクロナデによる整形で、丸形の口縁の断面形状をもつ。この中で、1～3、7、27 には内面に鋸歯状または放射状の暗文が施されている。さらに 27 は外面に横方向の磨き（暗文）が確認できる。5、15 は口縁から器体下部までにかけての破片である。5 は内面にロクロナデと暗文、外面はロクロナデの後、下部には篦削りによる調整が加えられている。15 は外面が剥離しているため整形および調整方法は不明であるが、内面はロクロナデの後、横方向の篦磨き（暗文）を施してあることが確認できる。6・11・12 は底部の破片である。6 は器体部内面および見込み部、底面に放射状の暗文がみられる。11 は底部径 6.0 ㎝を測り、器体部内面には暗文が施されている。底面は回転糸切りの後、篦削りにより調整したと思われる。12 は底面の約 1/4 ほどの破片である。器体部外面、底面は摩耗が著しいが、底面には回転糸切りの痕跡がわずかに確認できる。推定底部径は 7.4 ㎝。21 は本住居跡出土の土師器坏の中で唯一、口縁から底部にいたる資料である。口径 11.2 ㎝、器高 4.1 ㎝、底部径 6.6 ㎝を測る。器体部の内外面はロクロナデ。内面には見込み部の一部まで暗文が施されている。外面下部は篦削りにより調整されている。底面は回転糸切りを篦削りで一部調整したと思われる。また墨書の一部が残存している。本資料を住居跡の時期判断の手掛かりとするが、見込み部に暗文が確認できるものの全体ではなく、およそ半分に施されていることから、見込み部の暗文がなくなる過渡期のものと推定できよう。よって甲斐型土器編年の第Ⅶ期とⅧ期の中間的な時期の所産と思われる。

○土師器甕

本住居跡より出土した土師器甕のうち図示し得たものは 5 点である。22～26 がそれに相当する。22、24、25 は口縁の一部である。22 は推定口径 24.6 ㎝の資料で、器体部内面は横刷毛、外面は縦刷毛である。口唇部の内面に

は口縁周の弧にほぼ平行な刷毛目が確認できるが、外面にはみられない。器形は、やや胴丸なものであろう。24は胎土に古代紫色の粒子を含むもので、いわゆる「堀之内原 Type」である。推定口径は22.2㎝。口縁・器体部は厚手の資料である。推定口径24.4㎝の資料で、器体部内面、口唇部両面には横方向の刷毛、器体部外面には縦刷毛が施されている。23、26は底部の破片である。23は24と同様な胎土をもち、これもいわゆる「堀之内原 Type」のものと思われる。底面には木葉痕が明瞭に確認できる。推定底部径は6.3㎝。26は内面横刷毛、外面縦刷毛という甲斐型土器に多くみられる特徴をもつ資料である。底面には木葉痕の一部がみられる。

○須恵器坏

16、18～20が須恵器坏である。16は今回の発掘調査で唯一確認できた口縁から底部までの全容が把握できる須恵器坏である。19も同一個体であることが後から判明した。復元口径は11.6㎝、器高3.9㎝、底部径7.0㎝を測る。内外面ともにロクロナデによる整形がなされている。底部は明瞭に回転糸切りの痕跡が残っている。18、20は口縁の部分片である。18は白色に近い淡い灰褐色、20は濃い灰褐色をしている。

○須恵器高台坏

本住居跡からは須恵器高台坏が1点のみ出土しており、17は底部の破片である。ロクロ整形によるものとみられ、内外面には自然釉の付着が確認できる。胎土には長石を含む。高台は器体部とは別胎土であり、器体部整形後に加えられたものであると推測される。

◎D地点　1号住居跡出土土器

本住居跡から出土した土器のうち、図示し得たものは44点である。器種別に概略を示すこととする。

○土師器坏

1～6、12、21～23、30が土師器坏である。1は口径の復元径10.6㎝、器高3.7㎝、底部径4.8㎝を測る。内外面ともにロクロナデによる整形。器体部外面下部および底面は回転篦削りにより調整されている。色調はやや黄色みがかかった茶褐色である。2はカマドの正面部分の床面直上から逆位の状態で検出された完形の資料である。口径12.2㎝、器高4.2㎝、底部径3.9㎝を測る。内面、外面はいずれもロクロナデによる整形。器体部外面と底面は手持ち篦削りにより調整されている。3は口縁の一部を欠くが、ほぼ完形に復元し得た資料である。整形および調整方法は2と同様である。器体部に「人」という文字と思われる墨書が確認できる。4～6、21、23は内黒坏である。4、6は口縁から器体部にかけての破片で、それ以外は底部および器体下部片である。4の内面には鋸歯状、5、21の器体部内面には放射状の暗文がみられる。いずれの資料も内外面はロクロナデによる整形と思われる。5と21は同一個体であるが、器体部外面下部と底面は手持ち篦削りによる調整が施されている。12は口縁の破片である。推定口径は16.4㎝。内外面はロクロナデによる整形で、内面には放射状、外面には横方向に暗文が施されている。22はいわゆる「堀之内原 type」の坏である。復元口径は12.8㎝で、内外面ともにロクロナデにより整形されている。内面には斜め方向に暗文が施されている。盤形に近い形状をもつ。30は底部の破片である。内外面をロクロナデで整形した後、底面と器体下部は篦削りにより調整したものと思われる。底部径は3.4㎝を測る。

○土師器皿

本住居跡出土の土師器皿は7～9、11、24である。このうち7、11、24は同一個体であるため、図示し得た資料は3点ということになる。7、11、24は残存率が一番高い7の復元口径から12.6㎝のものであろうと推測できる。底部径は5.5㎝。内面および外面はロクロナデによる整形で、器体下部外面ならびに底面は回転篦削りによる調整が加えられている。8が全体の1/4ほどを欠く資料である。口径13.2㎝、器高2.9㎝、底部径4.1㎝を測る。口縁の断面形状は隆玉形である。内外面をロクロナデにより整形した後、器体部外面の下部と底面を手持ち篦削りにより調整されている。器体下部から底面にかけて「人」という文字と思われる墨書が確認できる。9は口径12.4㎝、器高2.3㎝、底部径5.0㎝をはかり、8と同様に器全体の1/4程が欠損している。色調は内面は黒色を帯びており、外面は黄褐色。口縁が鋭く外反している点が特徴的である。内外面ともにロクロナデによる整形と思われるが、器体部外面および底面は回転篦削りにより調整されている。本住居跡は床面直上出土の土器の検討から甲斐型土器編年の第XI期～XII期の所産と推測されるが、当該期の甲斐型の皿形土器にはこのような特徴をもつものは見られない。よって、本資料は甲斐型以外の土器を製作していた地域より搬入されたものの可能性も示唆し得よう。

○土師器甕

10、13～20、25～29、31、36～40、42が本住居跡より出土した土師器甕である。10、19、28・29、37・38は口縁の破片である。10は推定口縁径21.4㎝で、口縁内面には弧にほぼ平行する刷毛目が確認でき、外面は横ナデがなされている。口縁断面はやや肥厚する。器体部内面には横ナデ、外面は縦刷毛が施されている。19は推定口径18.6㎝の資料で口縁両面および器体部内面は横ナデが、器体部外面には縦刷毛がみられる。28は特殊な資料である。先ず特筆すべき点は胎土が坏や皿と類似するものである点である。胎土の密度も濃く、焼成も一般的な甲斐型甕よりも頑固である。そして内面の色調が黒色であることも挙げられる。調整は内外面とも丹念に磨かれたものである。口縁の形状は薄手で外反し、器体部は頸部から下部が膨らみをもつ。器形、胎土などから甲斐型以外の土器であることが指摘できよう。武蔵型をはじめ、他地域で生産された土器である可能性が強い。土師器皿の9と同じく搬入品である可能性のある資料として注目できる。口径の推定径は10.8㎝。29は推定口縁径26.4㎝。口縁の断面形状は厚く短いタイプである。器体部内面は横刷毛、外面は縦刷毛が施されている。37は推定口縁径24.0㎝の資料である。口縁の断面形状はやや肥厚し、口縁の内面のみに弧とほぼ平行する刷毛目がみられる。器体部内面は横ナデ、外面には縦刷毛が施されている。38は推定最大径21.2㎝。胎土は28と同様に一般的な甲斐型甕にみられるものとは異なり坏や皿と類似する。口縁の断面形状は厚く長い。口縁の内外両面はナデが施されている。器体部はやや胴張りな形状を呈すると推測でき、内外面ともに刷毛目が確認できる。本資料も甲斐型とは異系統のものと思われる。13～18、20、25、27、31、36、39・40はいずれも底部の破片である。いずれの資料とも底面には木葉痕が確認できる。このうち、13・14、17・18、20、27、40は甲斐型土器と思われる。これらの資料の器体部内面は横刷毛、外面は縦刷毛が施されている。15・16、25、31、39はいわゆる「堀之内原type」である。胎土には淡褐色や古代紫色の粒子が含まれている。36は相模ないし駿東型などの甲斐型とは異系統の資料であると思われる。

○須恵器皿

35は本住居跡から出土し、唯一図示し得た資料である。13.2㎝の復元口径をもつ。口縁断面形状は丸形で外反する。器体部の整形は内外面ともにロクロナデである。

○須恵器壷・甕

本住居跡出土の須恵器壷もしくは甕は、32～34、41、43・44 である。いずれの資料とも器体部の部分的な破片である。このうち 33 は長頸壷や瓶である可能性もある。32、41 の外面にはタタキの痕跡が確認できる。34、41 の外面には自然釉の付着がみられ、光沢を帯びている。

第2節　土坑出土土器

◎A地点　土坑出土土器

A地点の土坑から出土した土器のうち図示し得た資料は 10 点である。器種別に概略を示すこととする。

○土師器皿

76 号土坑より 1 点土師器皿が出土している。器全体の 1/3 程の残存率である。復元口径は 11.4 ㎝、残存器高は 2.8 ㎝である。口縁の断面形状は隆玉形を呈する。内外面はロクロナデによる整形後、器体部外面下部は箆削りによる調整が加えられている。外面には墨書の一部が確認できる。部分的であるため全容は不明だが、「東」という文字である可能性がある。今回の発掘調査で土坑から出土した墨書土器は本資料のみである。どのような意図が込められていたかは不明であるが、祭祀的な面も踏まえ検討するに値するだろう。

○土師器甕

10 の土師器甕は 15 号土坑から出土した底部の破片である。復元底部径はおよそ 10.0 ㎝。内面には横刷毛が確認できる。底面には木葉痕がみられる。

○須恵器壷・甕

2～9はA地点の土坑から出土した須恵器の壷もしくは甕である。これらの資料の多くはA地点北東の調査区拡張範囲の土坑群からの出土である。2～6、9は 84 号土坑から出土した。2は底部の破片で復元底部径は 8.2 ㎝。底面は箆削りにより調整され、別胎土の高台をもつ。見込み部には自然釉と思われる緑色の付着がみられる。3～5は口縁の破片である。復元口径は推定でそれぞれ、3は 38.8 ㎝、4は 33.2 ㎝、5は 25.6 ㎝である。4の外面には波形の模様が付加されている。6～8は器体部の部分的な破片である。6と8は同一個体と思われる。外面には自然釉による光沢がみられる。7は 48 号土坑から出土した頸部屈曲部の破片であり、外面は焼成時に白色に変色したと思われ、緑色の自然釉が薄く付着している。9は 84 号土坑から出土した。やはり頸部の屈曲している部分の破片である。

◎C地点　土坑出土土器

15 点のC地点の土坑から出土した土器が図示し得た。器種別に概略を示すこととする。

○土師器坏

C地点の土坑から出土した土器のうち、1～8が土師器坏である。1～5、8は 28 号土坑から出土した。6は 8号土坑、7は 50 号土坑からの出土である。1～3、6は口縁の一部である。全資料に共通して言えることは、

口縁の断面形状が隆玉形であり、内外面ともにロクロナデによる整形後、器体部外面下部は手持ち箆削りで調整されていることである。4の内面は黒色である。5～8は底部の破片である。どの資料も底面および器体下部は手持ち箆削りにより調整されている。5は内面が黒色である。4と5は同一個体である可能性がある。

○土師器皿

9は19号土坑から出土した土師器皿の口縁の破片である。口縁の復元径は12.0㎝で、断面形状は隆玉形。器体部両面はロクロナデによる整形で、外面下部は箆削りで調整されている。

○土師器甕

10～14はC点の土坑出土の甕である。10～13は28号土坑からの出土で、14のみ16号土坑出土である。10・12・13は口縁の破片である。口縁の断面形状はいずれの資料とも厚く短いもので、10の内面は横方向の刷毛目が確認できる。12・13の口唇内外面はナデにより調整されている。11、14は底部の破片である。14の底面には木葉痕が確認できる。

○須恵器蓋

15は19号土坑より出土した復元径16.2㎝の須恵器蓋の破片である。内外面はロクロナデによる整形である。胎土の色調は白色に近い灰褐色である。C地点2号住居跡103と同一個体で接合することが判明している。

第3節　溝状遺構出土土器

溝状遺構はA・C地点において確認されているが、遺物を図示し得たのはA地点のみである。

◎A地点　溝状遺構出土土器

A地点の溝状遺構から出土した土器を器種別に概観する。1・2号溝状遺構からは図示し得る土器の出土はみられなかった。ここで取り上げる資料は3・4号溝状遺構より出土した5点である。

○土師器坏

1の資料は、3号溝状遺構から出土した土師器坏底部の破片である。器体部内面には暗文がみられ、外面および底面は箆削りにより調整されている。

○土師器甕

5は3号溝の覆土中より検出されて土師器甕の口縁片である。両面もナデによる整形がなされている。復元口径は20.0㎝ほどであると思われる。甲斐型以外の相模型、駿東型である可能性が高い。

○須恵器高台坏

3号溝から須恵器高台坏の底部片である4が出土している。推定底部径は6.2㎝。表裏ともロクロ整形である。高台部は別胎土であると思われる。高台部の断面形状は三角形に近い形を呈する。

○須恵器壷・甕

2・3はいずれも4号溝状遺構から出土した須恵器壷もしくは甕である。2は器体部の破片で、長頸壷や瓶であ

る可能性もある。内外両面ともナデによる整形である。３は高台を伴う底部の破片である。底部の復元径は 19.0 ㎝。表裏に箆状工具によるナデの痕跡が確認できる。また外面には自然釉が垂れて付着している。

第４節　竪穴状遺構出土土器

◎C地点　竪穴状遺構出土土器

Ｃ地点の竪穴状遺構から出土し、図示し得た資料は１号・２号で１点ずつの計２点と僅少である。住居跡と推測できない理由のひとつにこのことも挙げられるだろう。これらを器種別に概観する。

○土師器甕

１は２号竪穴状遺構から出土した土師器甕で、口縁の破片である。胎土は坏や皿と類似する。内外面ともにナデによる整形がなされている。甲斐型とは異系統のもので、相模地域や駿東地域からの搬入品の可能性もある。

○土師器蓋

土師器蓋である２は１号竪穴状遺構から出土した。器体部の一部の破片であるため全容は明らかではない。内外面はいずれもロクロナデによる整形である。外面は黒色を帯びている。

第５節　住居跡出土鉄製品

今回の発掘調査ではＡ地点１号住居跡とＣ地点３号住居跡に伴って４点の鉄製品が出土している。それらを概観する。

◎A地点　1号住居跡出土鉄製品

○刀子

１は先端がやや欠損するものの、ほぼ完全な形で出土した刀子である。残存長は 13.0 ㎝、最大幅 1.1 ㎝、厚さ 0.4 ㎝を測る資料である。刃部は 7.1 ㎝で、着柄部は肥厚している。

○紡錘車

２は軸が曲がった状態で検出された鉄製の紡錘車である。復元全長は 21.3 ㎝、車部の直径は 4.2 ㎝、厚さ 0.4 ㎝を測る。

◎C地点　3号住居跡出土鉄製品

○鑿

３は全長 14.5 ㎝、最大幅 1.6 ㎝、厚さ 0.5～1.0 ㎝の鉄製鑿である。刃部の長さは 1.8 ㎝。基部には着柄用と思われる突起が確認できる。

○鏃

４は鉄製の鏃（鉄鏃）で全長 15.2 ㎝、残存最大幅 3.5 ㎝、厚さ 0.4 ㎝を測る。羽部の片方は欠損している。基部の断面は方形を呈する。基部末端（尾部）は幅が減少しており、ここを矢の本体に装着していたと思われる。

第Ⅴ章　おわりに

今回発掘調査を実施した、三ノ側遺跡について若干の考察を述べてみる。

第１節　平安時代の竪穴住居跡について

本遺跡から検出された竪穴住居跡は全地点で合計６軒であり、８世紀後半～10 世紀前半に位置づけられる。各竪穴住居跡の構築時期は伴出した土器からおおよそ以下のように分けられる。

Ａ地点	１号住居跡	甲斐型土器編年　第Ⅹ期	（９世紀後半代）
Ｂ地点	１号住居跡	甲斐型土器編年　第Ⅷ期～第Ⅸ期	（９世紀中頃）
Ｃ地点	１号住居跡	不明（甲斐型土器編年　第Ⅹ期	（９世紀後半代）以前か）
Ｃ地点	２号住居跡ａ	甲斐型土器編年　第 XI 期～第 XII 期	（10 世紀前半代）？（以前か）
Ｃ地点	２号住居跡ｂ	甲斐型土器編年　第 XI 期～第 XII 期	（10 世紀前半代）
Ｃ地点	３号住居跡	甲斐型土器編年　第Ⅵ期～第Ⅶ期	（８世紀後半代～９世紀初頭）
Ｄ地点	１号住居跡	甲斐型土器編年　第 XI 期～第 XII	（10 世紀前半代）

以上のような時期判断を下した。Ｃ地点２号住居跡に関しては、覆土に主体となる土器群よりも古式のものも混在しており、２号カマドが構築された時期はやや遡る可能性もある。Ｃ地点１号住居跡は良好な資料が得られず、具体的な構築時期の想定は不可能である。Ｃ地点２号住居跡とＤ地点１号住居跡は、ほぼ同時期に営まれていたものと推測できる。部分的な発掘調査ではあるが、広い範囲で長時期に渡り集落が形成されていたのだろう。

Ａ地点１号住居跡は壁高が最も良好な部分で 60 ㎝も残存しており、土器以外に作業台と思われる石、鉄製品、そして良好な残存状況のカマドという、当該期の人々の生活を紐解く上で有効な資料が一括して確認できたことは大きな成果である。住居内で衣食に関わる作業が行われていたことになろう。

第２節　墨書土器について

Ｃ地点１号住居跡を除く５軒の竪穴住居跡から墨書土器が検出された。Ａ地点１号住居跡からは「公」という同一の文字が記された坏と皿が検出され、土器の組み合わせを示す何らかの糸口となるであろう。同住居跡からは、この他に坏に「入」、皿に「男」という文字がみられる墨書土器も確認されている。いずれの資料も底部に墨書が記されている。Ｂ地点１号住居跡からは底部に「智□」という墨書の記された坏が見付かっている。Ｃ地点２号住居跡からは昭和 56 年度の第１次調査と同様に「長」という墨書土器が検出された。他にも「人」、「主」等もみられるが、器体部側面に記されたものが多い。Ｄ地点１号住居跡からは「人」という文字が記された坏と皿が検出され、Ａ地点１号住居跡と同様、土器のセット関係を表す可能性がある。

第３節　甲斐型土器とその他の土器について

今回の発掘調査で出土した土師器の多くは甲斐型土器であった。しかし、Ｂ地点１号住居跡やＤ地点１号住居跡では明確に甲斐型土器とは系統の異なるものも伴出している。

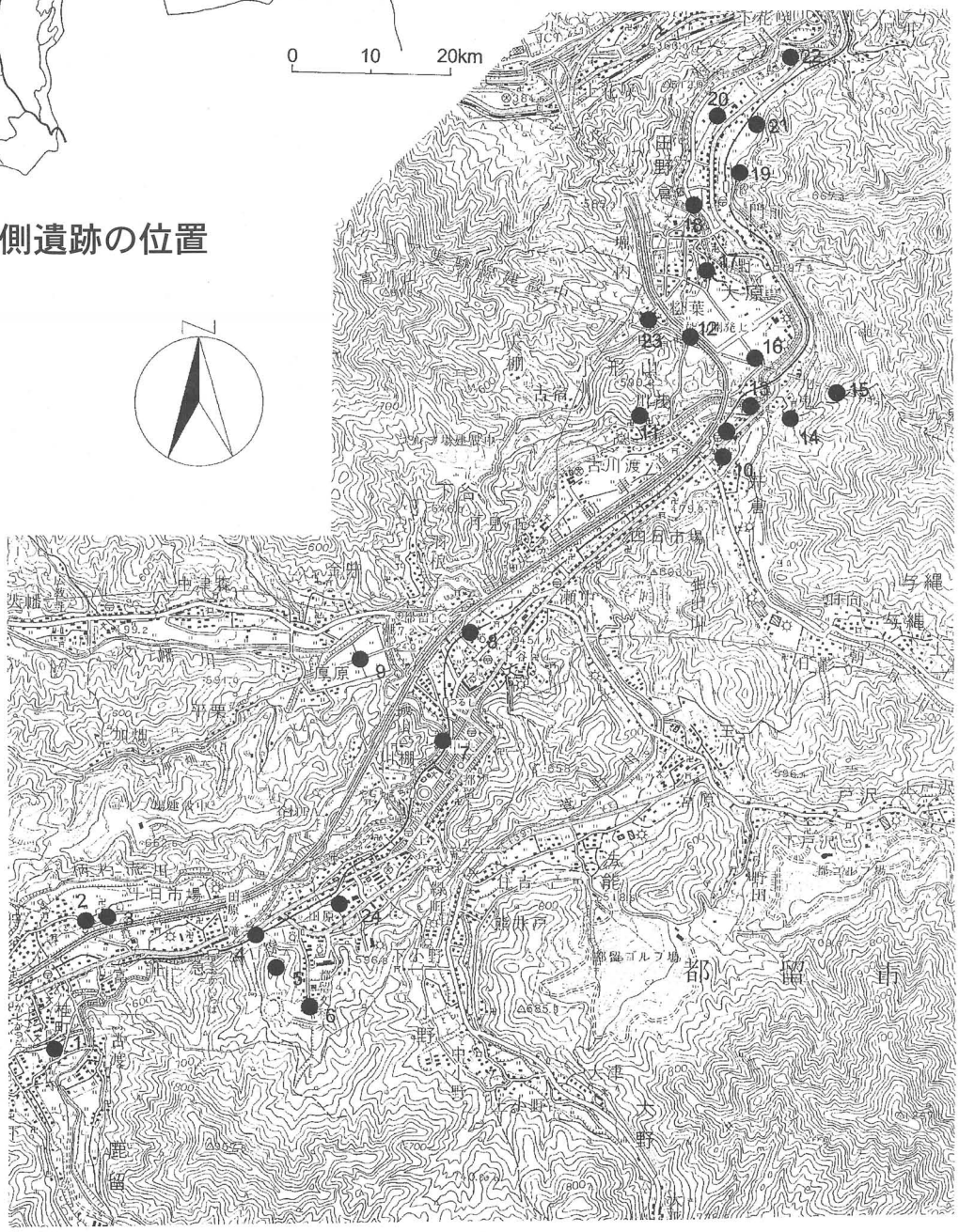
Ｂ地点１号住居跡……　甲斐型土器編年　　第　Ⅷ期～第　Ⅸ期……相模型甕が伴出
Ｄ地点１号住居跡……　甲斐型土器編年代　第 XI 期～第 XII 期……非甲斐型皿・武蔵型甕が伴出

これらの資料だけでは十分な検討資料にはならず、必ずしも同時期に並行するものとは断言できないが、今後の発掘調査によってデータの蓄積がされ、古代都留郡下（山梨県東部域）における甲斐型以外の土器の伴出例として研究材料になることを期待したい。

第１図　三ノ側遺跡の位置

表

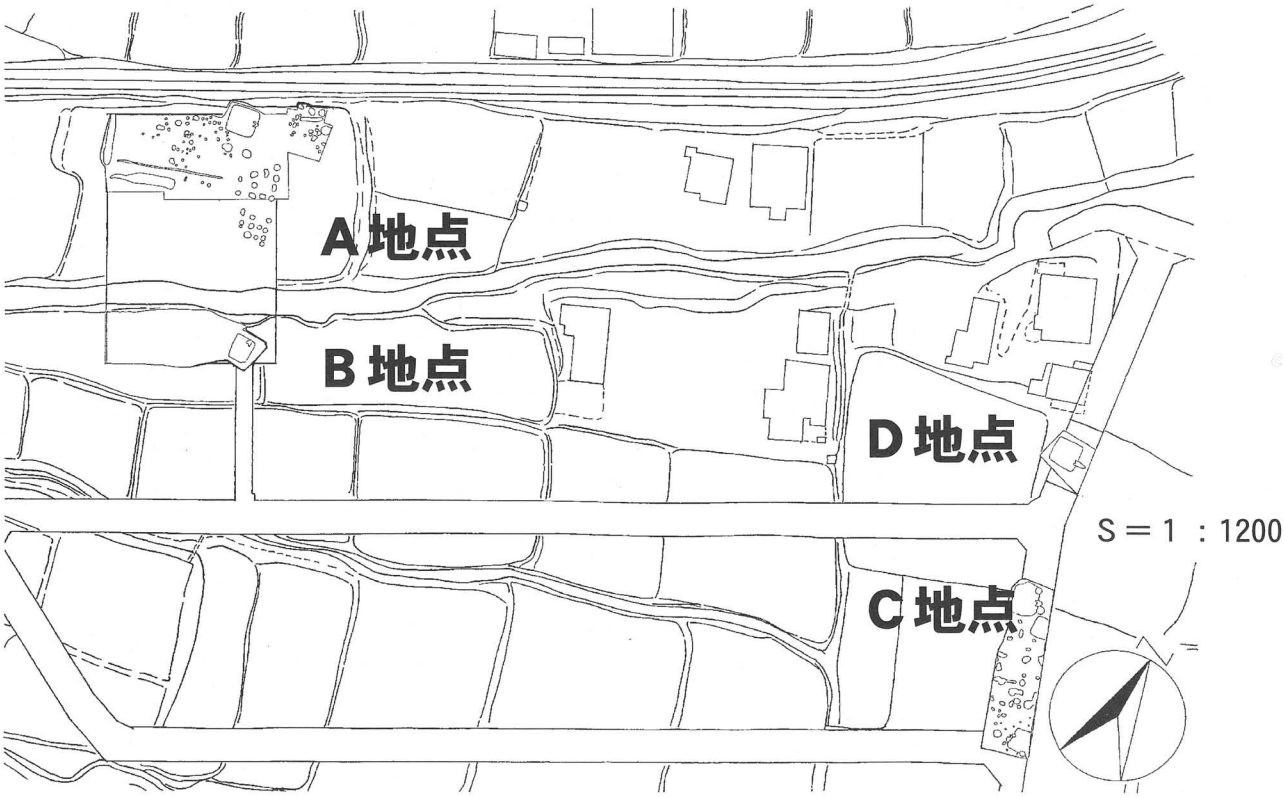
No.	遺跡名	時代
1	下溝遺跡	不明
2	山梨原遺跡	縄文・平安・中世
3	下原遺跡	縄文
4	大堰遺跡	縄文
5	ハッ沢遺跡	縄文
6	山ノ神遺跡	縄文
7	城の腰遺跡	弥生以降
8	鷹の巣遺跡	平安
9	牛石遺跡	縄文・奈良・平安
10	前ケ久保遺跡	奈良・平安
11	亀石遺跡	平安
12	湯久保遺跡	縄文・平安以降
13	下久保遺跡	縄文・平安
14	九鬼Ⅰ遺跡	縄文・奈良・平安
15	九鬼Ⅱ遺跡	縄文・平安
16	中溝遺跡	縄文
17	原遺跡	縄文・平安
18	中野原遺跡	縄文・奈良・平安
19	山梨遺跡	縄文
20	桃園遺跡	縄文・平安
21	神出遺跡	奈良・平安
22	先の宮遺跡	縄文・奈良・平安
23	中谷遺跡	縄文・奈良・平安
24	三ノ側遺跡	奈良・平安



第２図
三ノ側遺跡周辺の
遺跡分布（桂川流域）

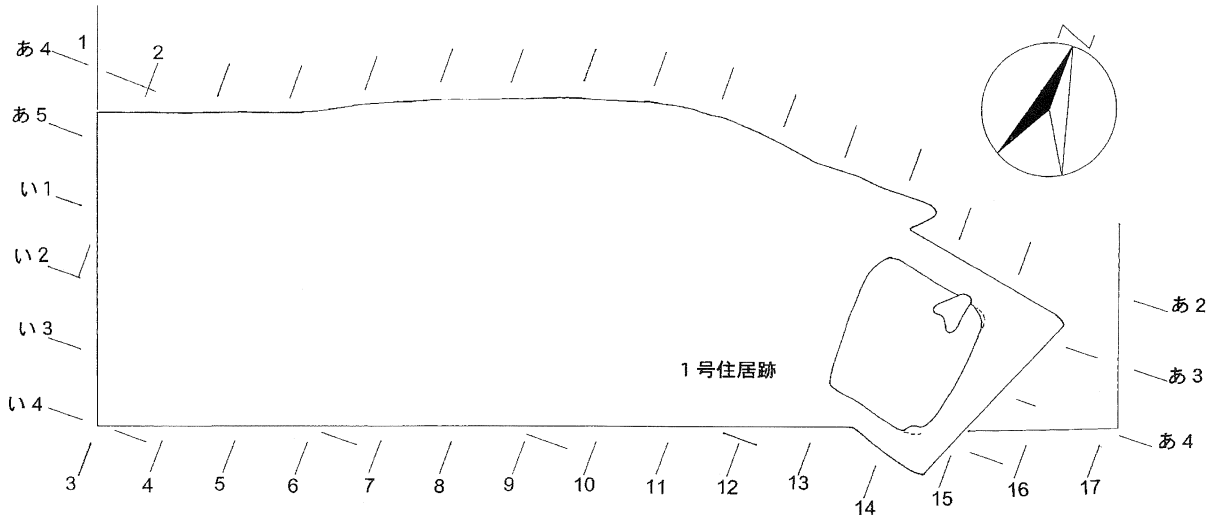
S＝１：25000

第３図　地点配置図　　S＝1：1200

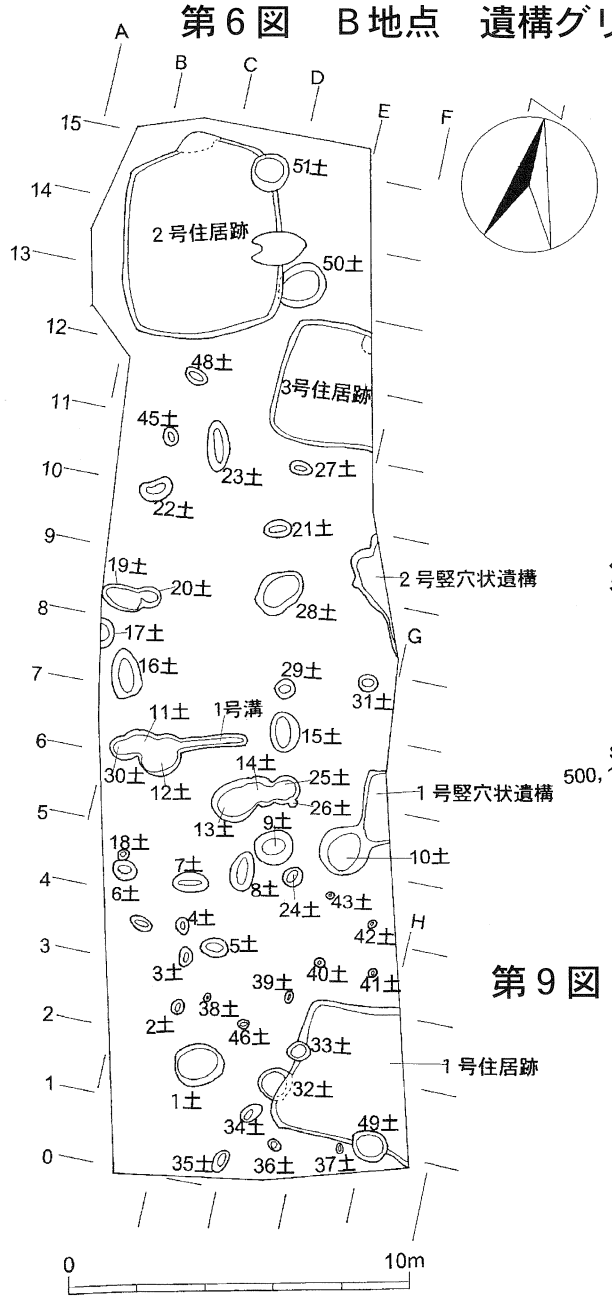


第４図　遺構位置図

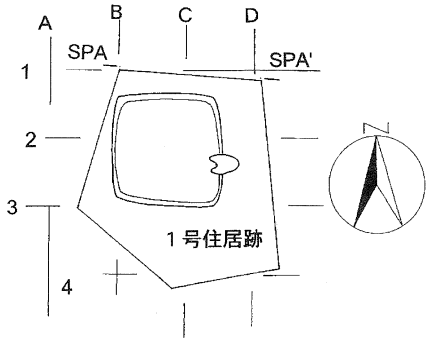
第５図　Ａ地点　遺構グリッド配置図



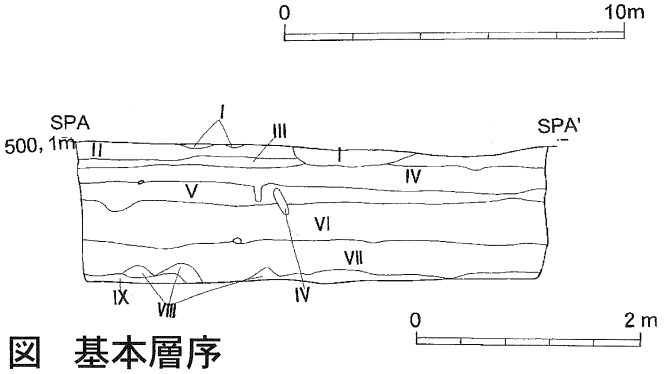
第6図　B地点　遺構グリッド配置図



第7図　C地点　遺構グリッド配置図

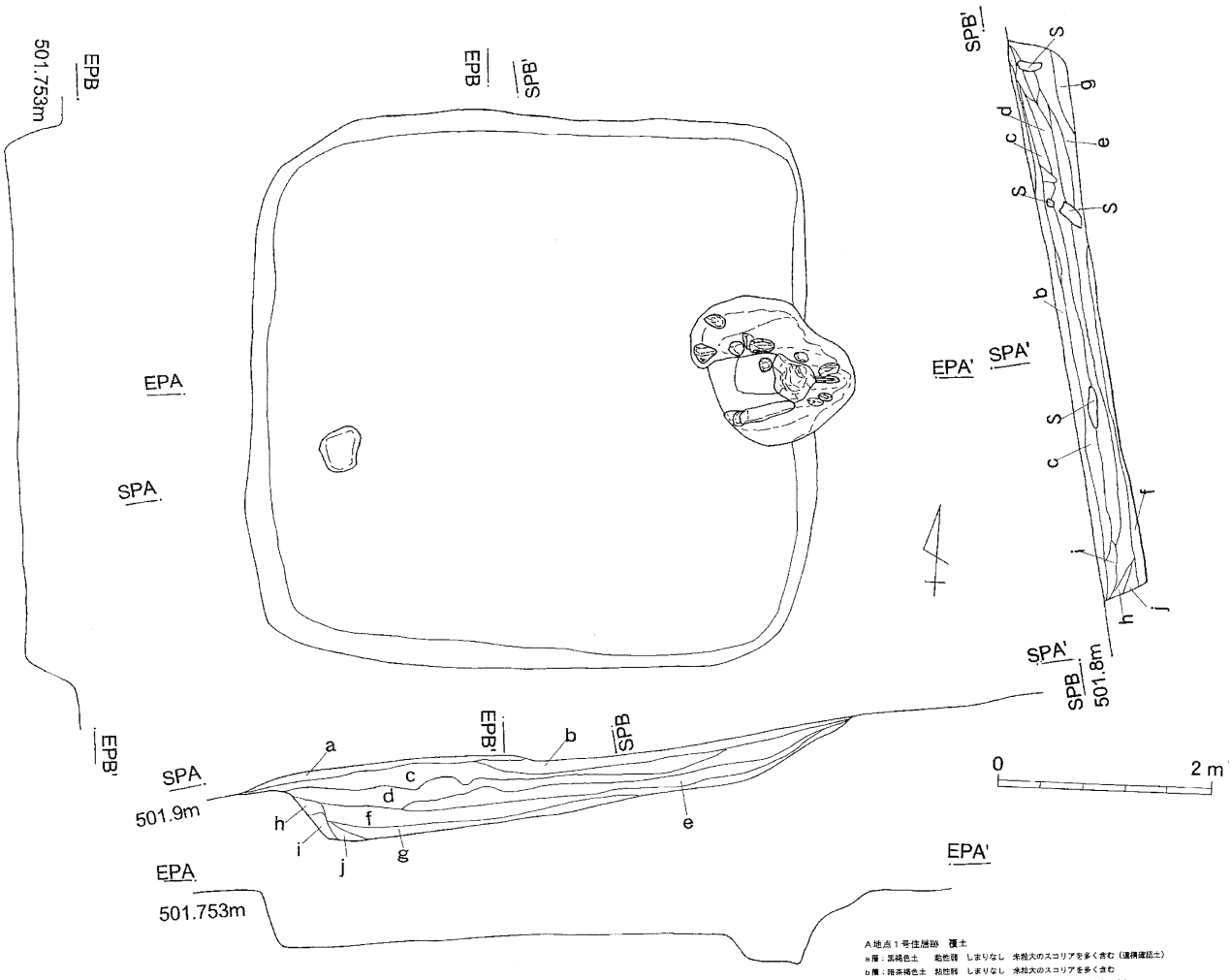


第8図　D地点　遺構グリッド配置図



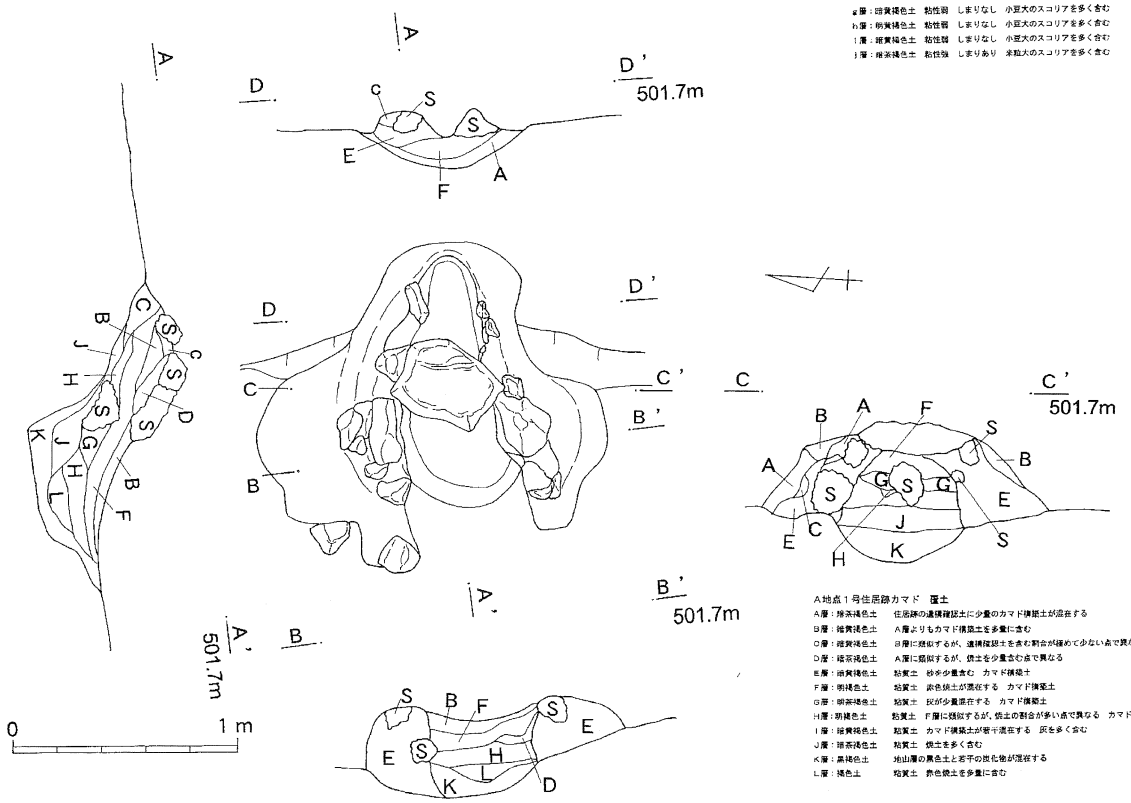
第9図　基本層序

Ⅰ層：暗茶褐色土	粘性弱	しまりなし	耕作土a（腐植土）
Ⅱ層：暗茶褐色土	粘性やや強	しまりなし	耕作土b
Ⅲ層：暗茶褐色土	粘性やや強	しまりなし	米粒大のスコリアを若干含む
Ⅳ層：暗茶褐色土	粘性弱	しまりなし	
Ⅴ層：明茶褐色土	粘性やや強	しまりなし	小豆大のスコリアを多量に含む
Ⅵ層：淡茶褐色土	粘性弱	しまりなし	小豆大のスコリアを多量に含む
Ⅶ層：暗茶褐色土	粘性弱	しまりなし	小豆大のスコリアを多量に含む
Ⅷ層：明茶褐色土	粘性やや強	しまりなし	ブロック状のスコリア塊が混在する
Ⅸ層：明茶褐色土	粘性弱	しまりなし	ブロック状のスコリア塊が混在（遺構確認層）



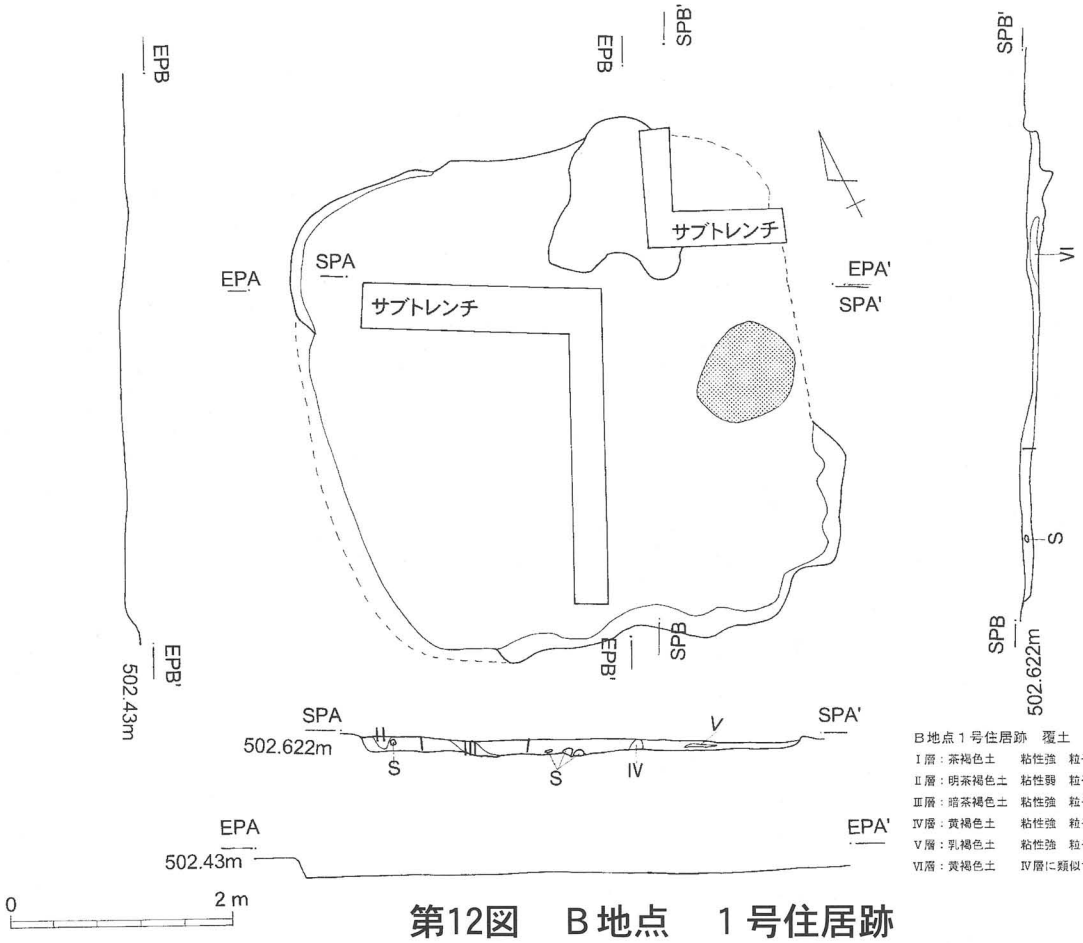
A地点1号住居跡　覆土
a層：黒褐色土　粘性弱　しまりなし　米粒大のスコリアを多く含む（遺構確認土）
b層：暗茶褐色土　粘性弱　しまりなし　米粒大のスコリアを多く含む
c層：暗茶褐色土　粘性やや強　しまりなし　米粒大のスコリアを多く含む
d層：暗茶褐色土　粘性強　しまりあり　米粒大と小豆大のスコリアを多く含む
e層：暗茶褐色土　d層に類似するが、スコリアの粒子がやや大きい点が異なる
f層：暗茶褐色土　e層に類似するが、スコリアをより多く含む点で異なる
g層：暗黄褐色土　粘性弱　しまりなし　小豆大のスコリアを多く含む
h層：明黄褐色土　粘性弱　しまりなし　小豆大のスコリアを多く含む
i層：暗黄褐色土　粘性弱　しまりなし　小豆大のスコリアを多く含む
j層：暗茶褐色土　粘性強　しまりあり　米粒大のスコリアを多く含む

第10図　A地点　1号住居跡



A地点1号住居跡カマド　覆土
A層：暗茶褐色土　住居跡の遺構確認土に少量のカマド構築土が混在する
B層：暗黄褐色土　A層よりもカマド構築土を多量に含む
C層：暗黄褐色土　B層に類似するが、遺構確認土を含む割合が極めて少ない点で異なる
D層：暗茶褐色土　A層に類似するが、焼土を少量含む点で異なる
E層：暗黄褐色土　粘質土　砂を少量含む　カマド構築土
F層：明褐色土　粘質土　赤色焼土が混在する　カマド構築土
G層：明茶褐色土　粘質土　灰が少量混在する　カマド構築土
H層：明褐色土　粘質土　F層に類似するが、焼土の割合が多い点で異なる　カマド構築土
I層：暗黄褐色土　粘質土　カマド構築土が若干混在する　灰を多く含む
J層：暗茶褐色土　粘質土　焼土を多く含む
K層：黒褐色土　地山層の黒色土と若干の焼化物が混在する
L層：褐色土　粘質土　赤色焼土を多量に含む

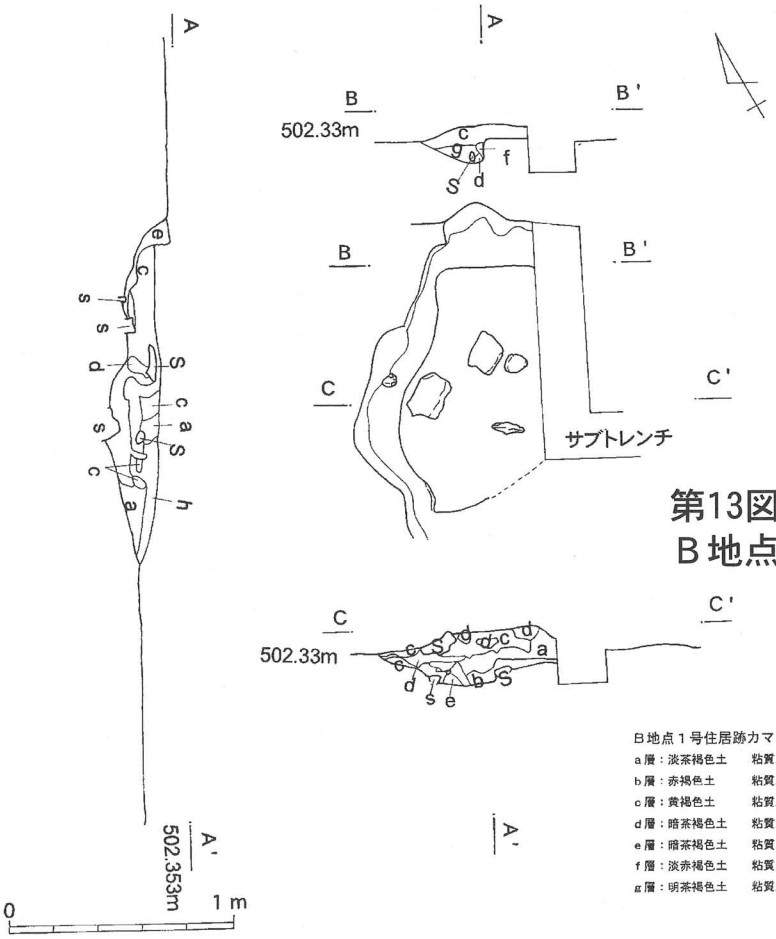
第11図　A地点　1号住居跡　カマド



B地点１号住居跡　覆土

Ⅰ層：茶褐色土	粘性強	粒子細	米粒大のスコリアを含む（遺構確認土）
Ⅱ層：明茶褐色土	粘性弱	粒子細	スコリアを含む
Ⅲ層：暗茶褐色土	粘性強	粒子細	スコリアを含む
Ⅳ層：黄褐色土	粘性強	粒子細	赤色粒子を含む
Ⅴ層：乳褐色土	粘性強	粒子細	
Ⅵ層：黄褐色土	Ⅳ層に類似するが粘性が弱い点で異なる		

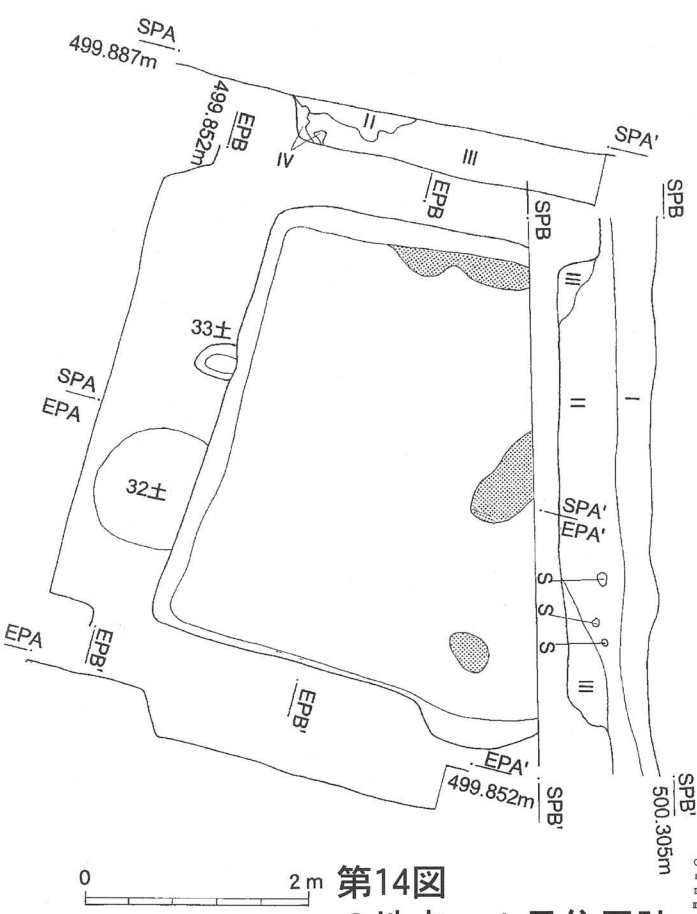
第12図　B地点　１号住居跡



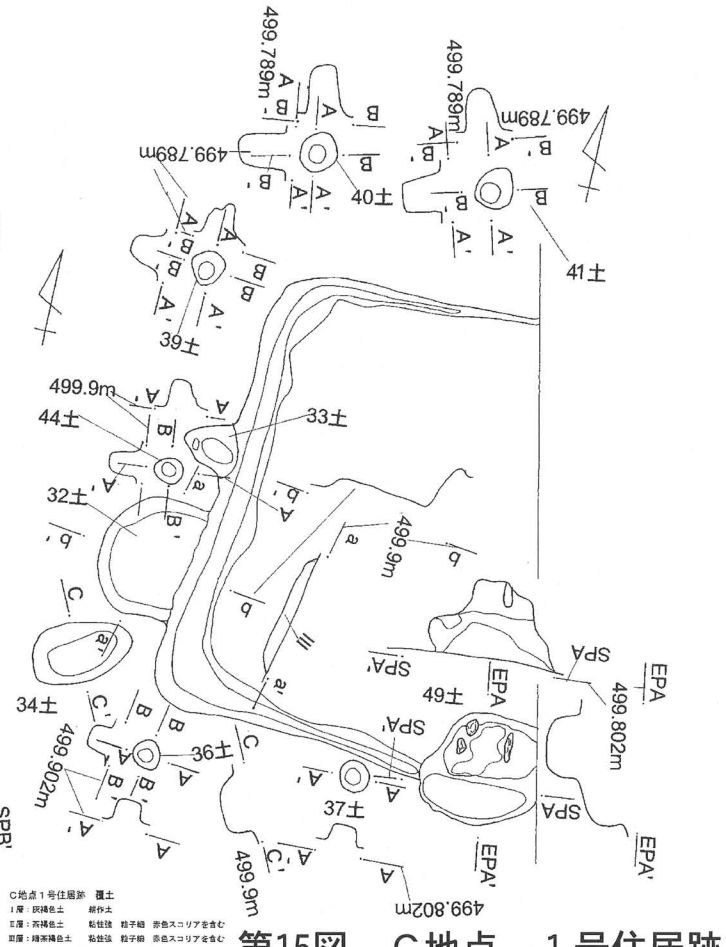
第13図
B地点　１号住居跡　カマド

B地点１号住居跡カマド　覆土

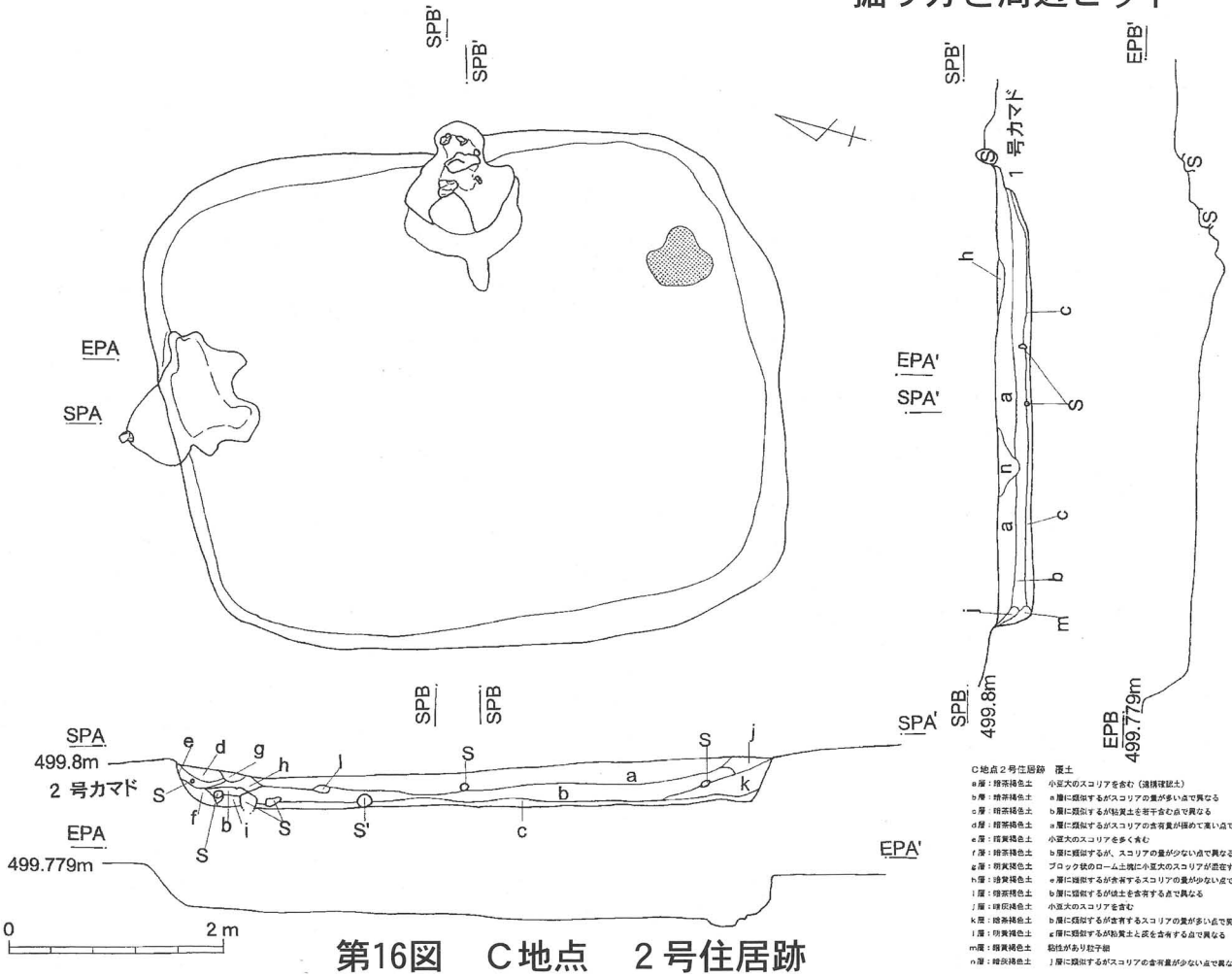
a層：淡茶褐色土	粘質土	カマド構築土に遺構確認土が混在する	
b層：赤褐色土	粘質土	焼土が若干混在する	
c層：黄褐色土	粘質土	カマド構築土	
d層：暗茶褐色土	粘質土	カマド構築土に地山の土が混在	
e層：暗茶褐色土	粘質土	d層に類似するが粘性が弱く地山の土の割合が多い点で異なる	
f層：淡赤褐色土	粘質土	b層に類似するが、焼土の割合が少ない	
g層：明茶褐色土	粘質土	赤色の焼土を含有する	



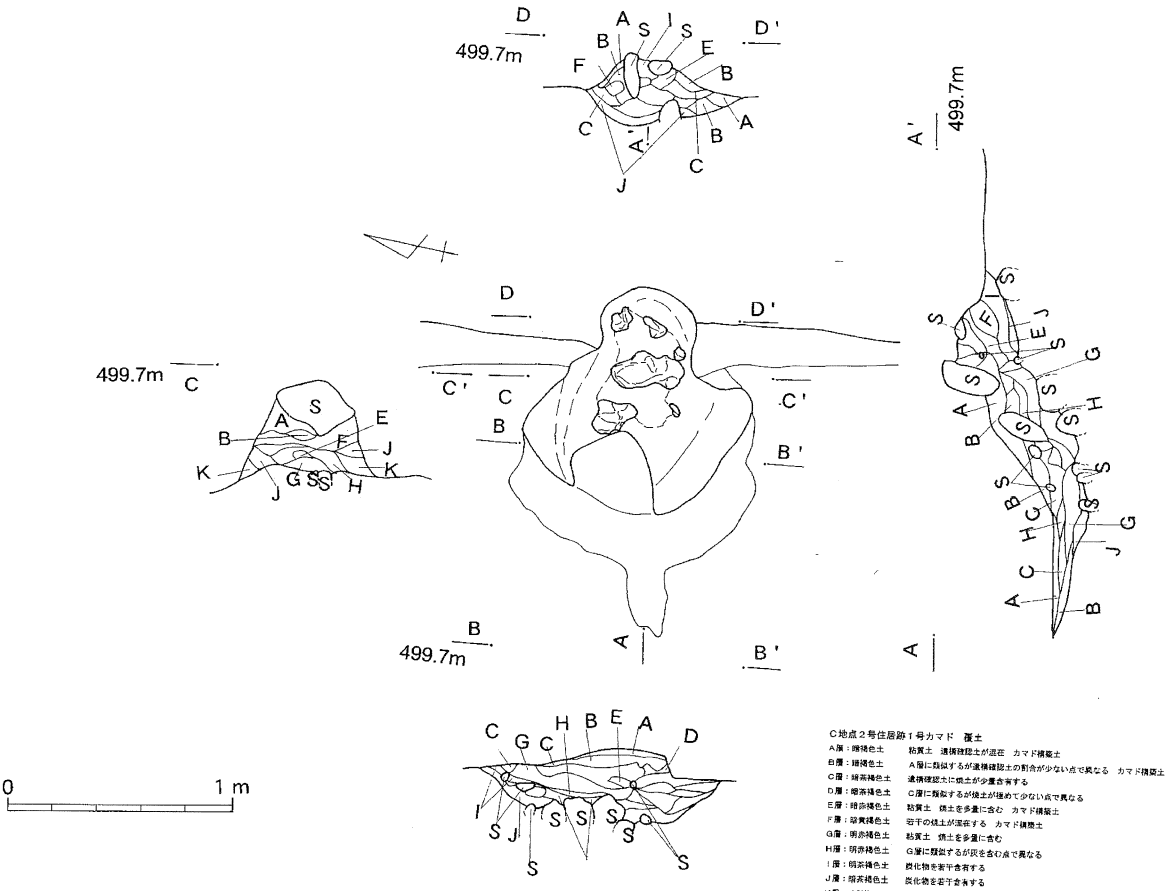
第14図
C地点　1号住居跡



第15図　C地点　1号住居跡
掘り方と周辺ピット



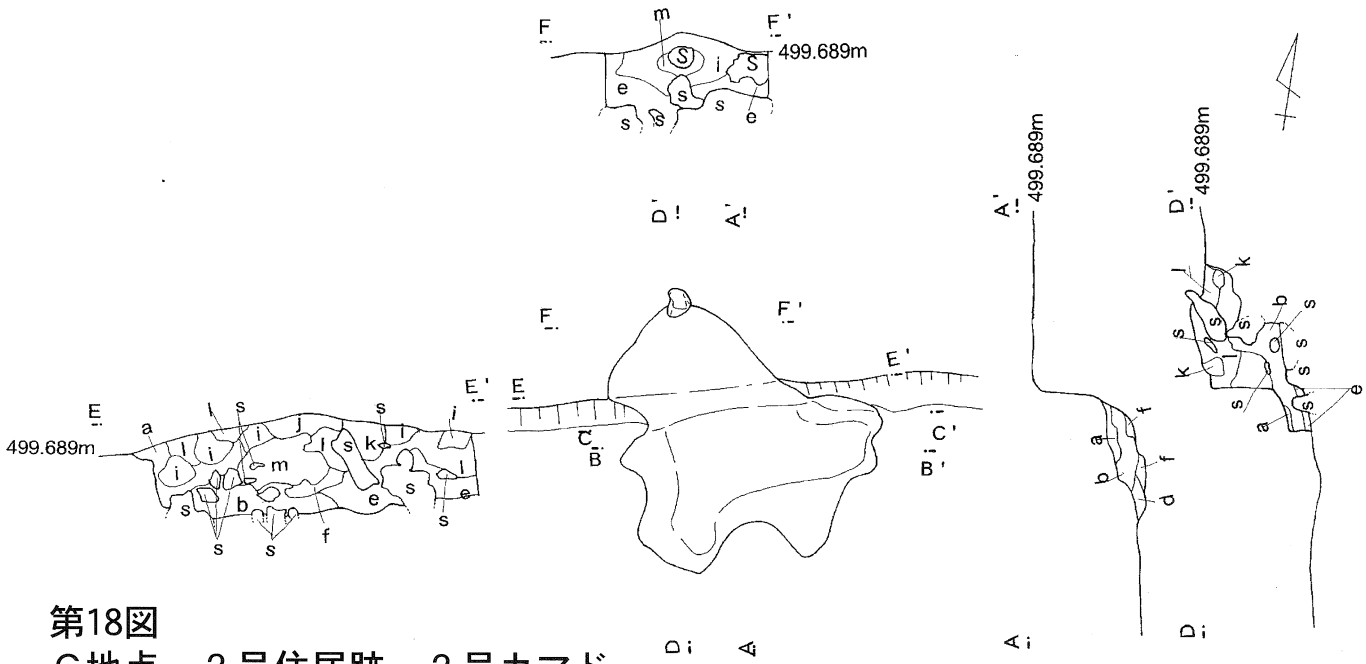
第16図　C地点　2号住居跡



C地点２号住居跡１号カマド　覆土

A層：暗褐色土　粘質土　遺構確認土が混在　カマド構築土
B層：暗褐色土　A層に類似するが遺構確認土の割合が少ない点で異なる　カマド構築土
C層：暗赤褐色土　遺構確認土に焼土が少量含有する
D層：暗赤褐色土　C層に類似するが焼土が極めて少ない点で異なる
E層：暗赤褐色土　粘質土　焼土を多量に含む　カマド構築土
F層：暗黄褐色土　若干の焼土が混在する　カマド構築土
G層：明赤褐色土　粘質土　焼土を多量に含む
H層：明赤褐色土　G層に類似するが灰を含む点で異なる
I層：明茶褐色土　炭化物を若干含有する
J層：明茶褐色土　炭化物を若干含有する
K層：暗灰褐色土　地山層の黒褐色土と若干含有する

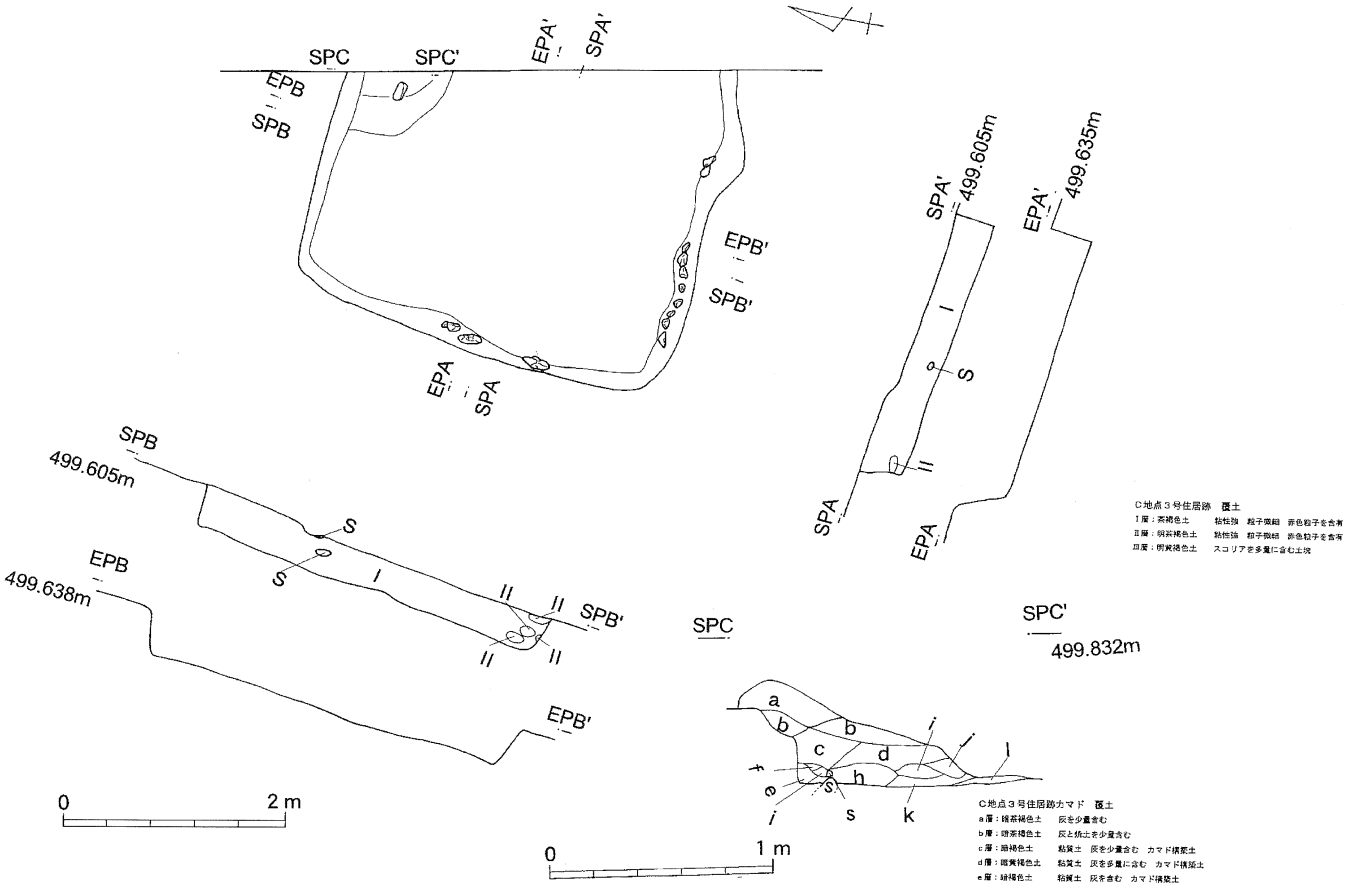
第17図　C地点　２号住居跡　１号カマド



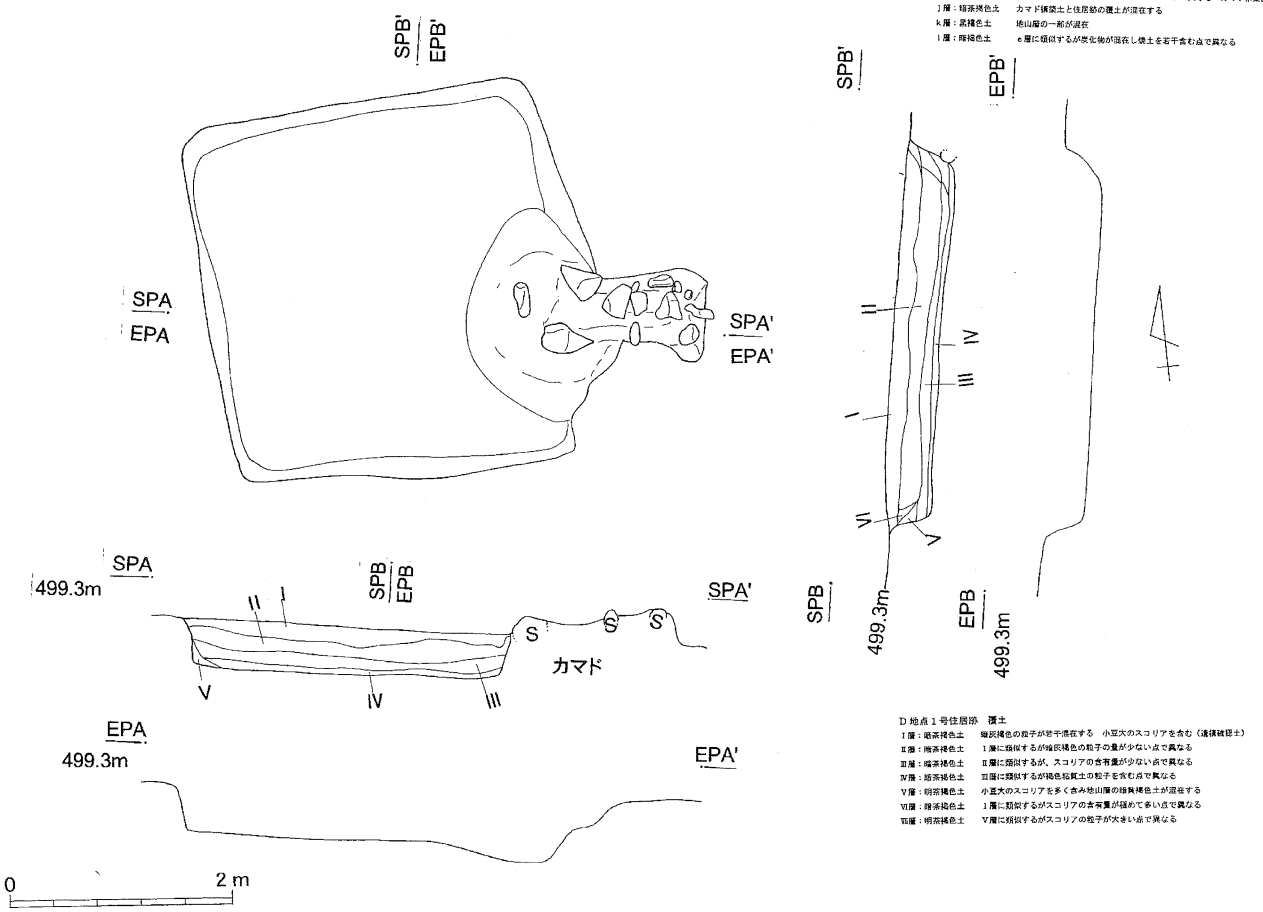
第18図
C地点　２号住居跡　２号カマド

C地点２号住居跡２号カマド　覆土

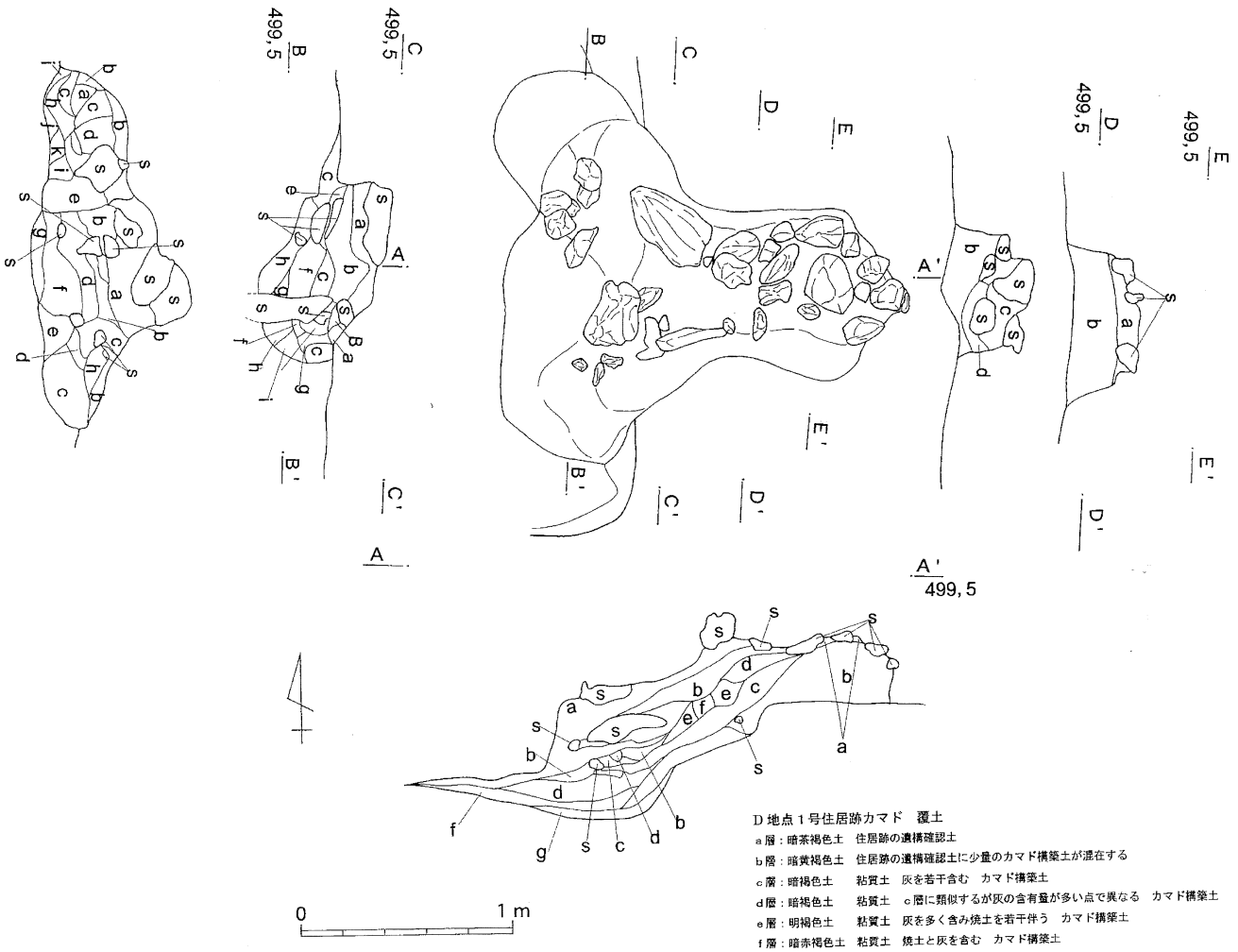
a層：黒褐色土　粘性弱　赤色粒子を多く含む
b層：赤褐色土　粘質土　赤色粒子、炭を多く含む　カマド構築土
c層：黄褐色土　粘質土　赤色粒子、炭を含む　カマド構築土
d層：黄褐色土　粘質土　c層に類似するが粘性がよ強く粒子が粗い点で異なる
e層：暗茶褐色土　粘性弱　住居床面の土
f層：明茶色土　粒子微細　焼土層
g層：淡赤色土　粘質土　粘性弱めで強　スコリアを僅かに含む
h層：赤褐色土　f層とg層が混在
i層：黄褐色土　f層に類似するが粒子が粗く炭化物を含んでいる点で異なる　カマド構築土
j層：暗褐色土　粘質土　カマド構築土
k層：暗褐色土　粘性やや強　スコリアを含有する
l層：暗褐色土　k層に類似するがスコリアが多い点で異なる
m層：暗褐色土　粘性弱　焼土が散在



第19図　Ｃ地点　３号住居跡



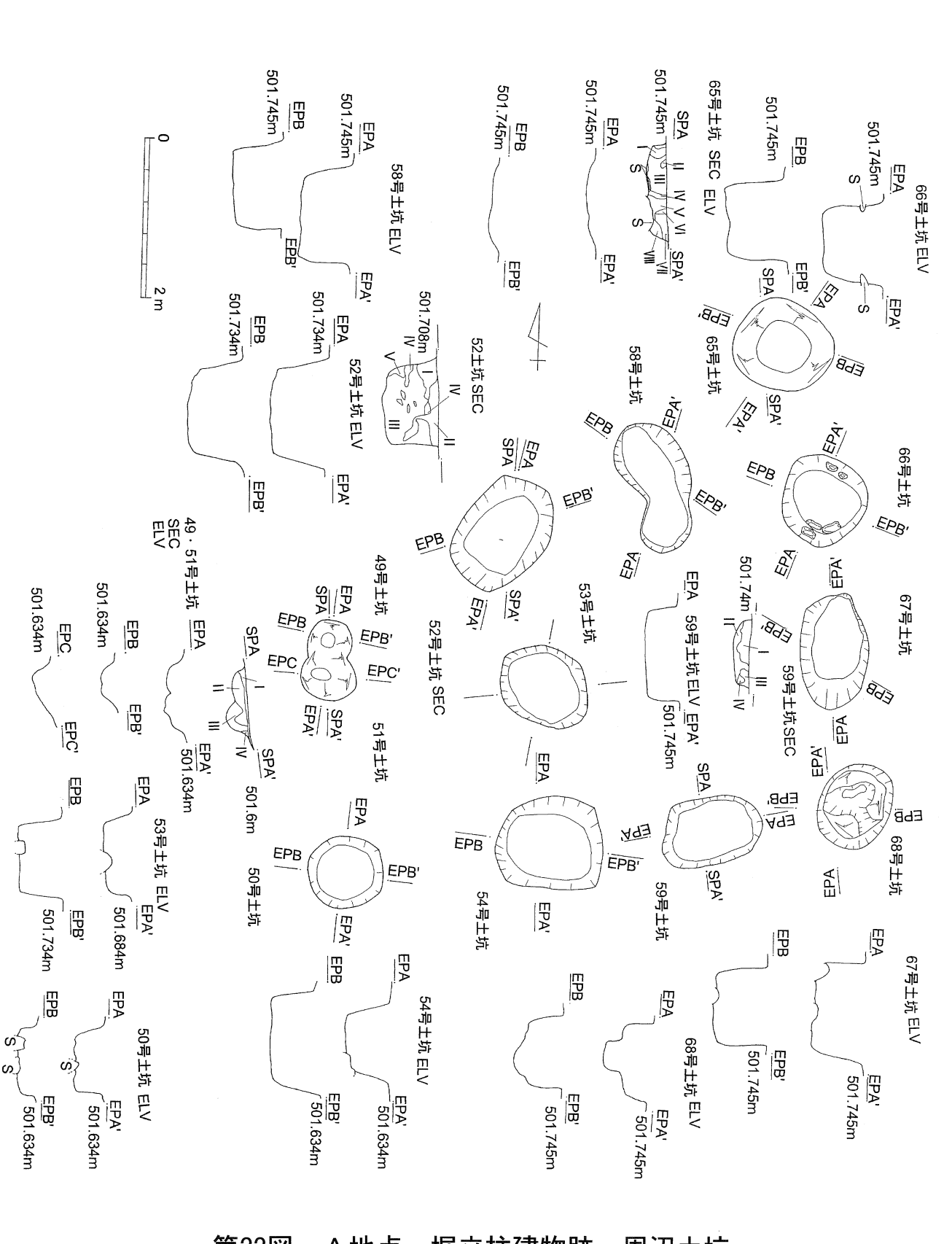
第20図　Ｄ地点　１号住居跡



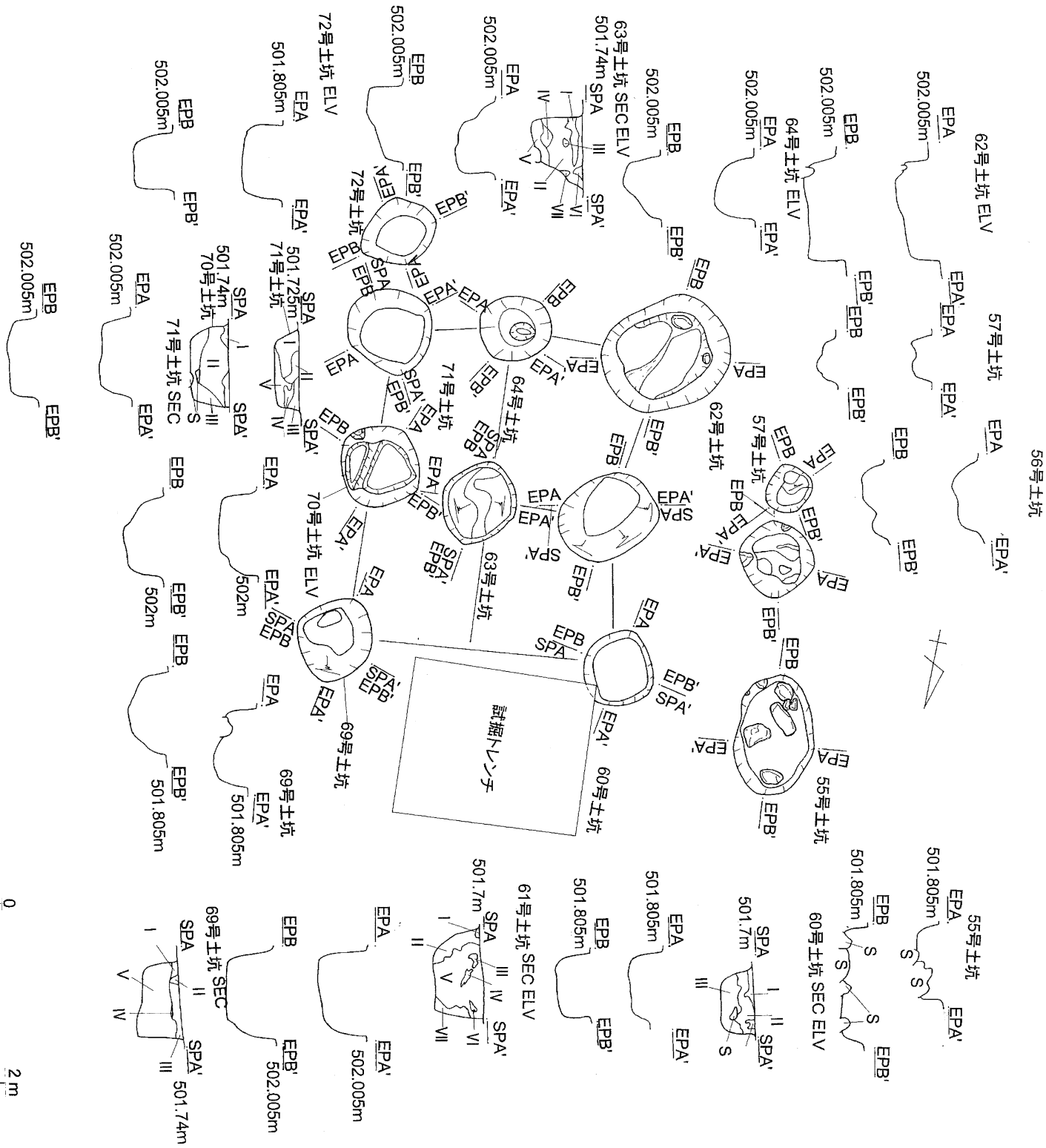
D地点1号住居跡カマド　覆土

a層：暗茶褐色土　住居跡の遺構確認土
b層：暗黄褐色土　住居跡の遺構確認土に少量のカマド構築土が混在する
c層：暗褐色土　粘質土　灰を若干含む　カマド構築土
d層：暗褐色土　粘質土　c層に類似するが灰の含有量が多い点で異なる　カマド構築土
e層：明褐色土　粘質土　灰を多く含み焼土を若干伴う　カマド構築土
f層：暗赤褐色土　粘質土　焼土と灰を含む　カマド構築土
g層：明赤褐色土　粘質土　焼灰を多量に含む　カマド構築土
h層：淡灰褐色土　カマド構築土と地山層の黒色土が混在
i層：暗茶褐色土　地山層の黒色土に若干の焼土が混在
j層：淡灰褐色土　h層に類似するが黒色土の割合が多い点で異なる
k層：暗灰褐色土　カマド構築土と焼土が混在する

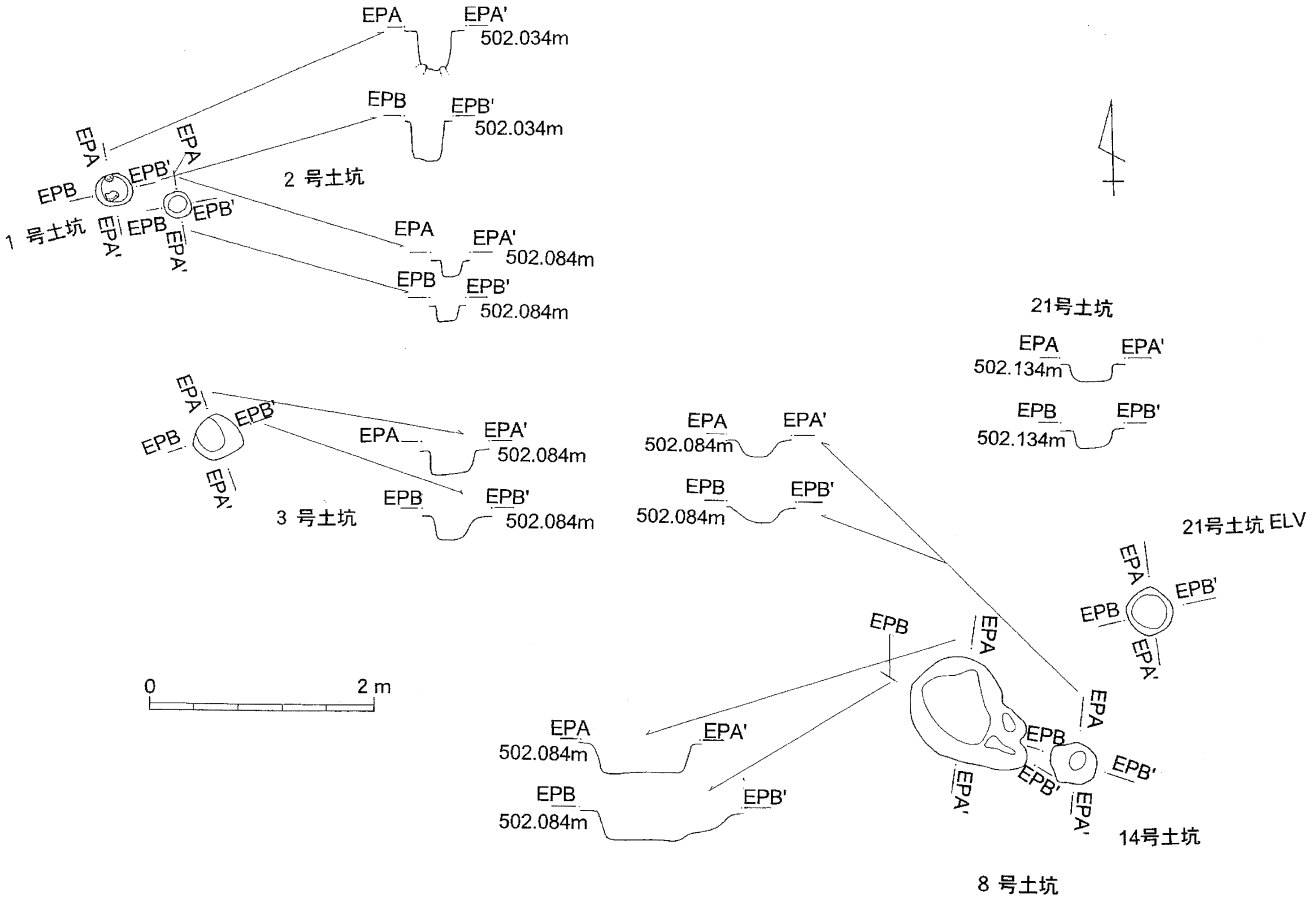
第21図　D地点　1号住居跡　カマド



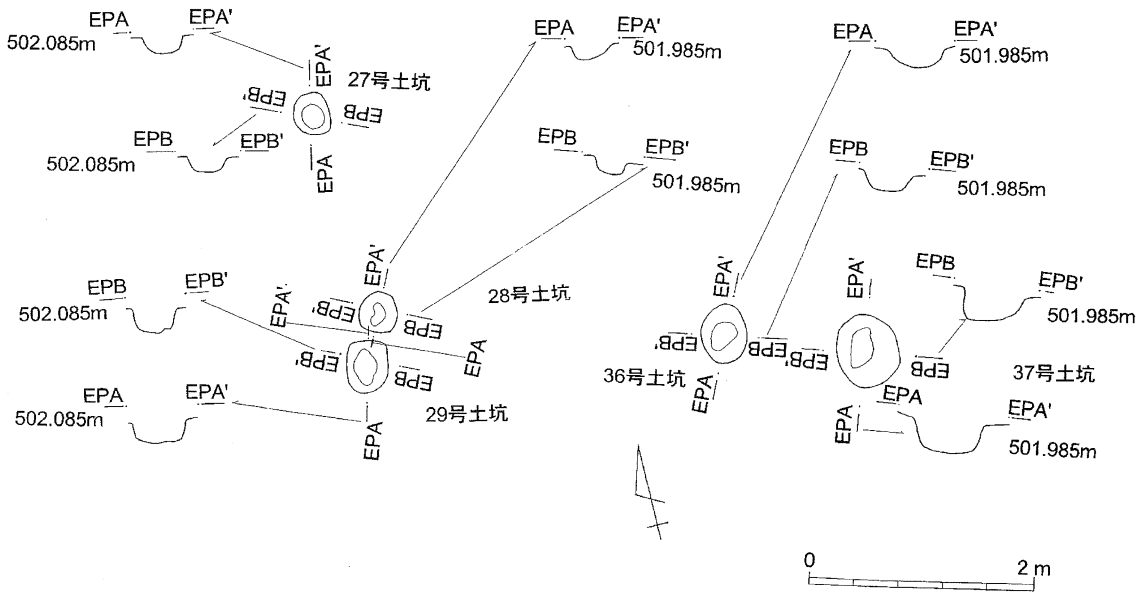
第22図　A地点　堀立柱建物跡・周辺土坑



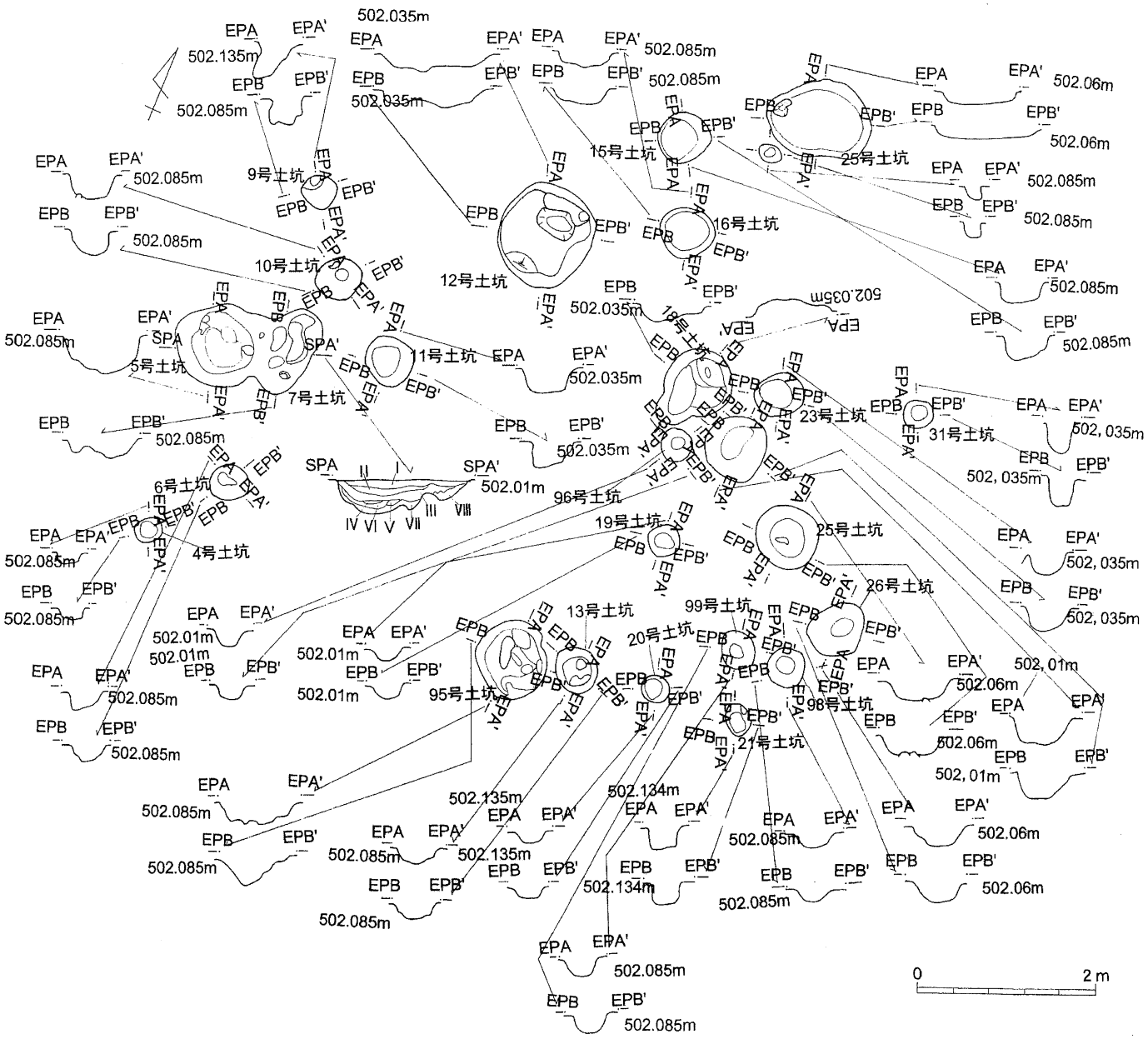
第23図　Ａ地点　２号堀立柱建物跡・周辺土坑



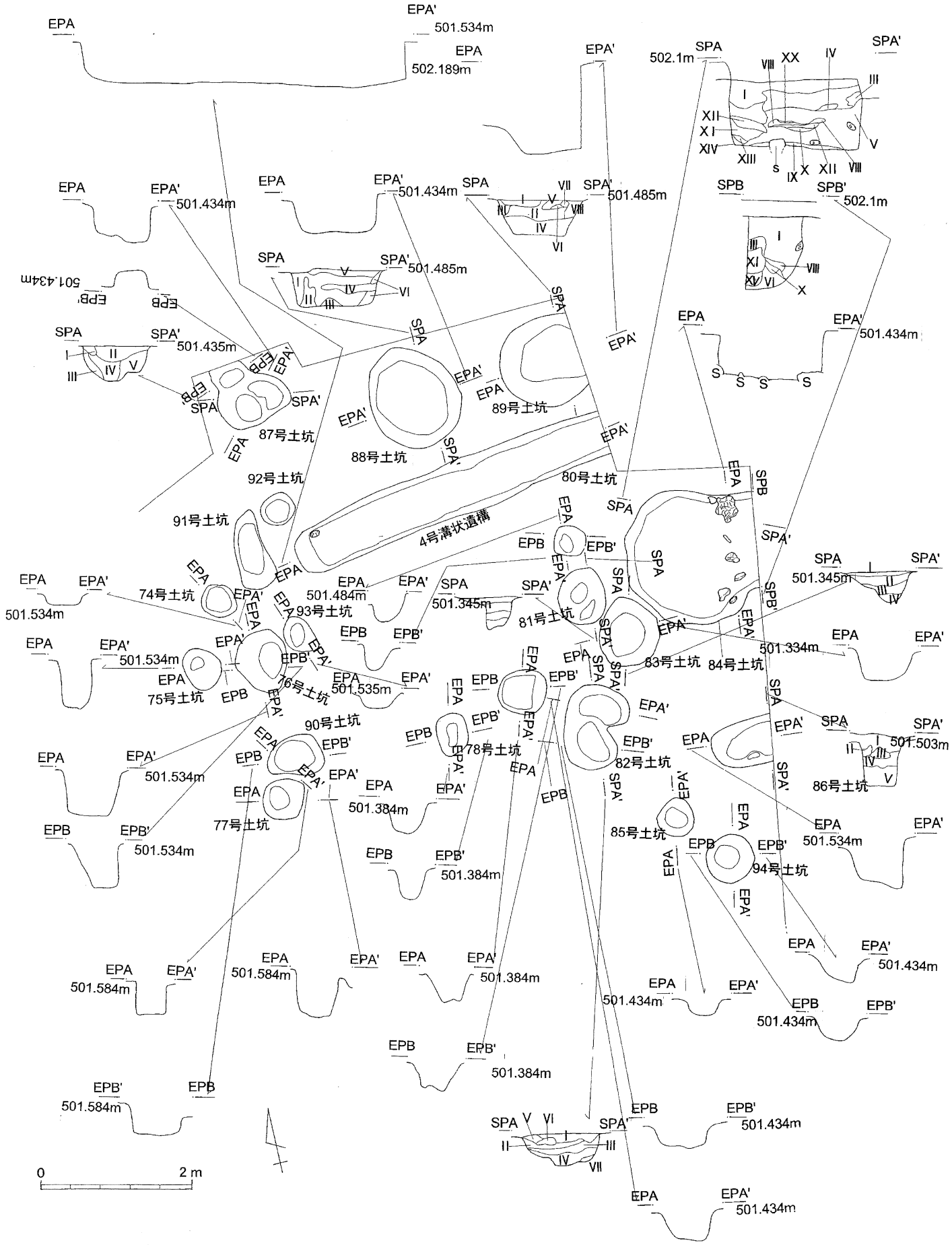
第24図　A地点　土坑（3）



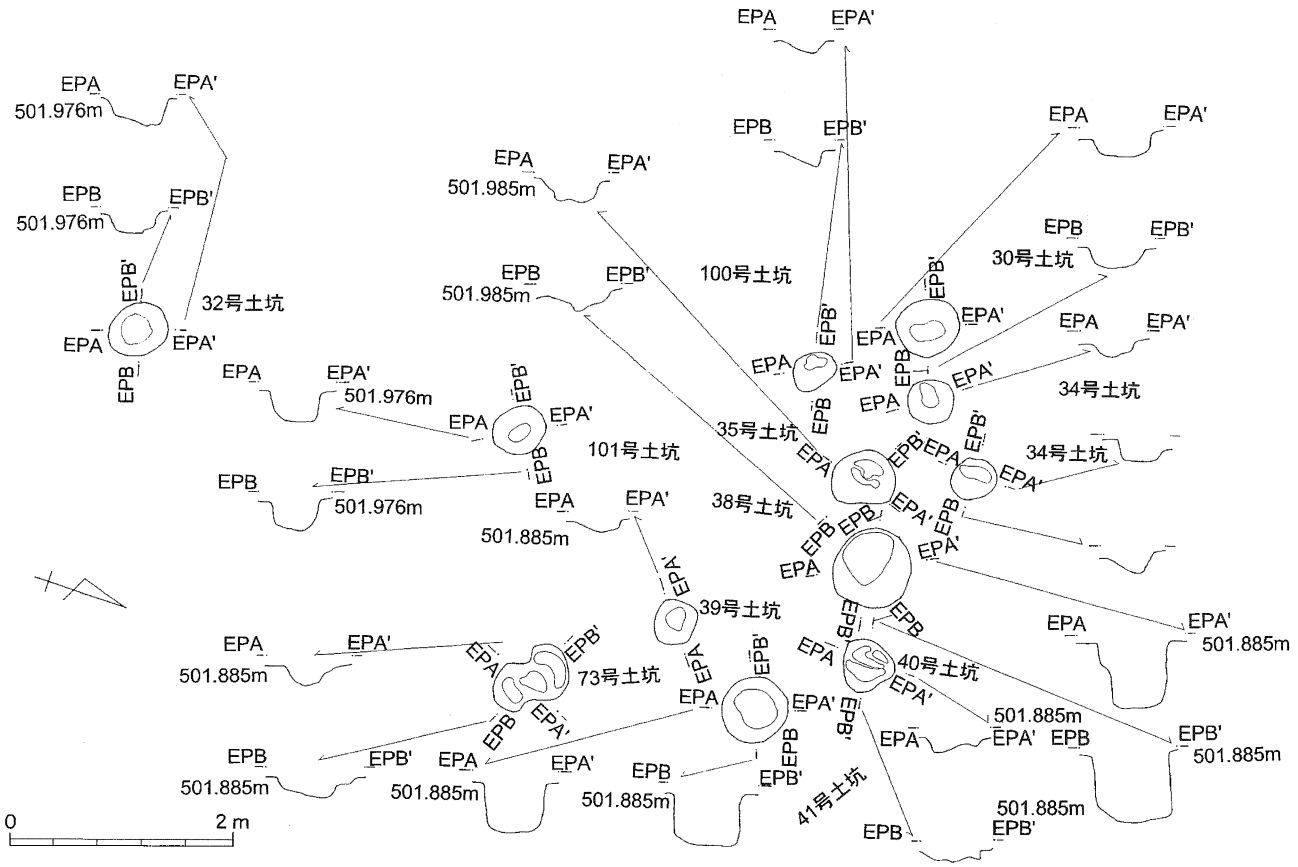
第25図　A地点　土坑（4）


9号土坑
10号土坑
12号土坑
15号土坑
16号土坑
25号土坑
5号土坑
7号土坑
11号土坑
18号土坑
23号土坑
31号土坑
6号土坑
4号土坑
96号土坑
19号土坑
25号土坑
26号土坑
13号土坑
99号土坑
20号土坑
95号土坑
98号土坑
21号土坑
SPA
SPA'
EPA
EPA'
EPB
EPB'
0
2 m

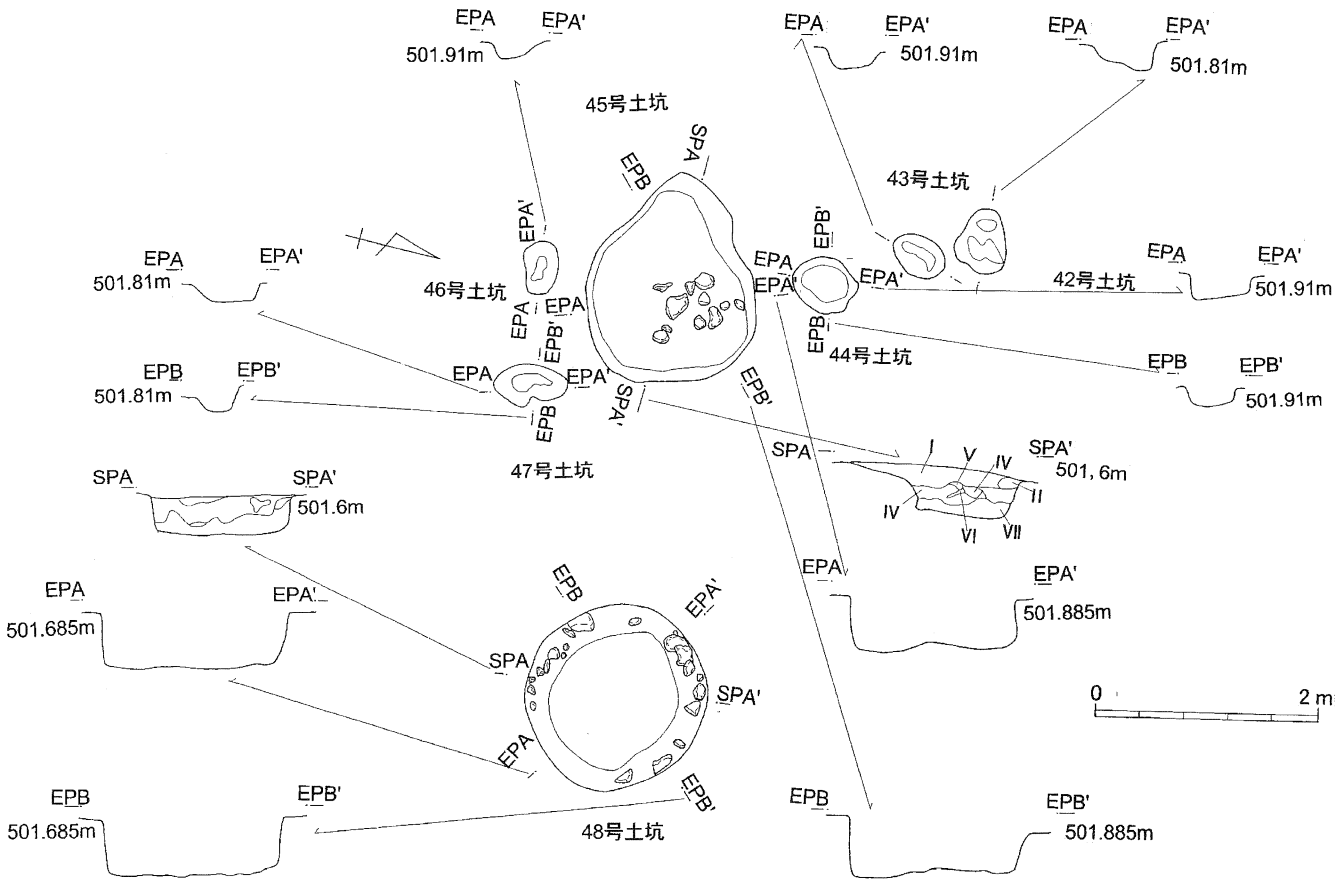
第26図　A地点　土坑（5）



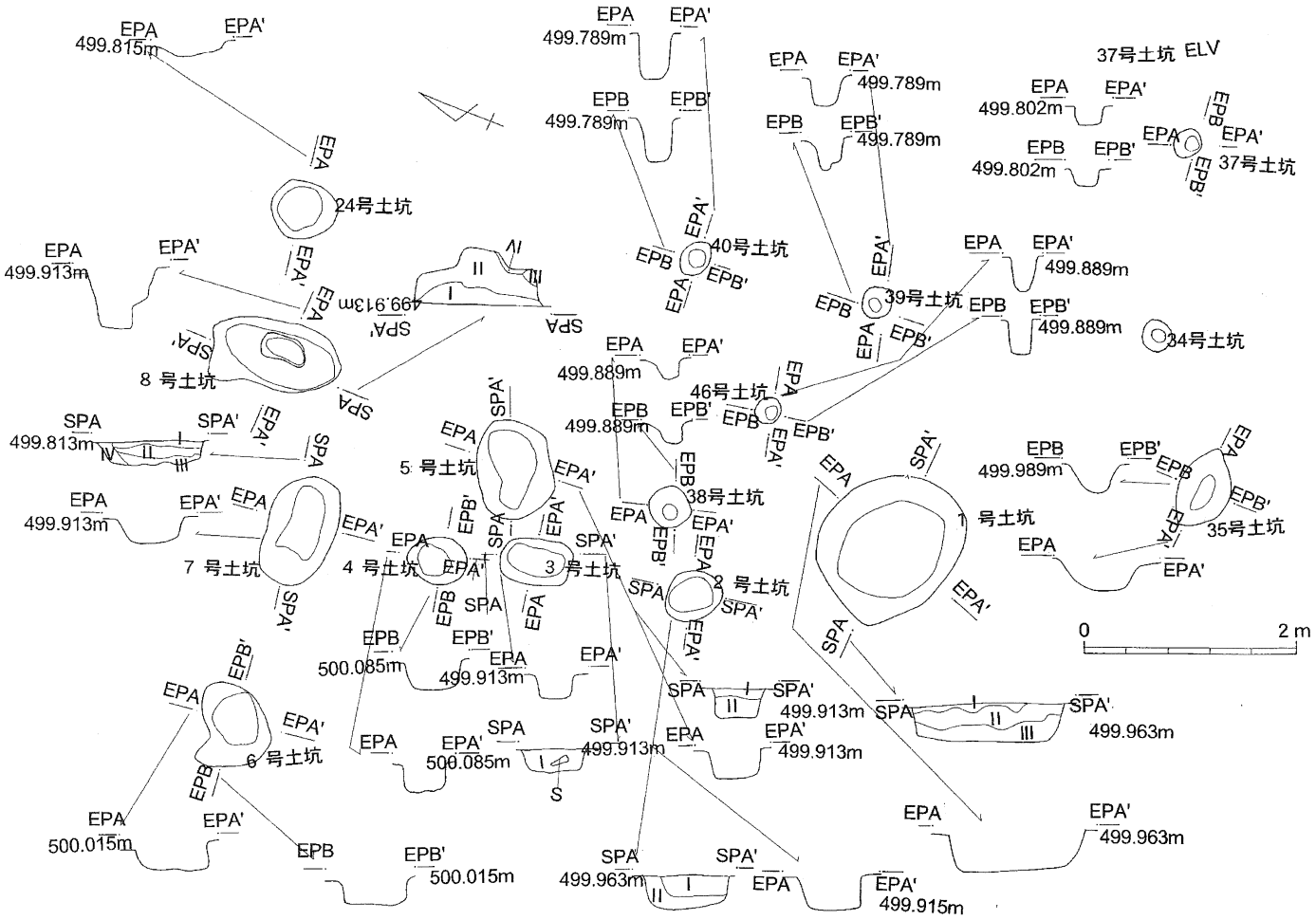
第27図　A地点　土坑（6）・溝

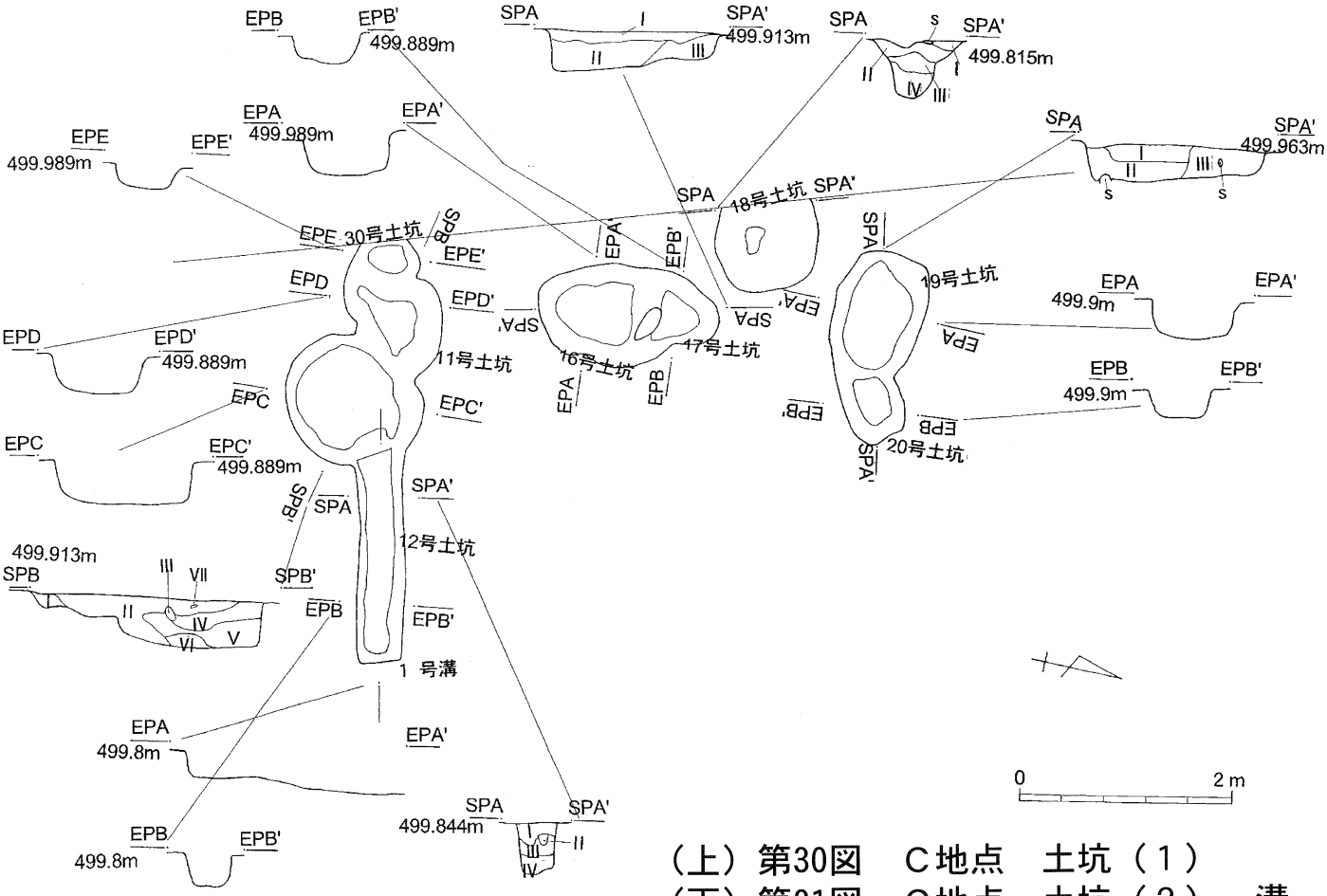


第28図　A地点　土坑（7）

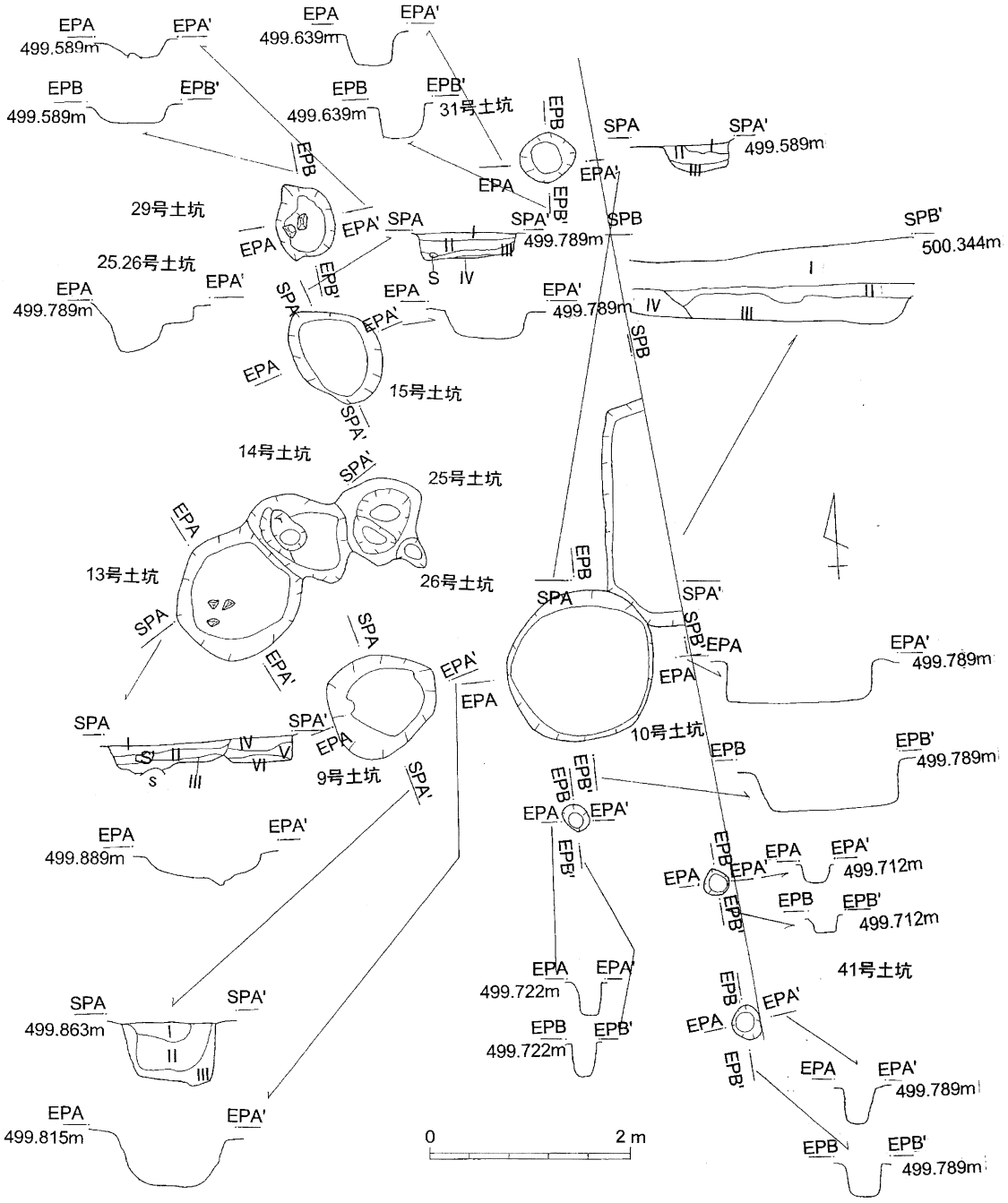


第29図　A地点　土坑（8）

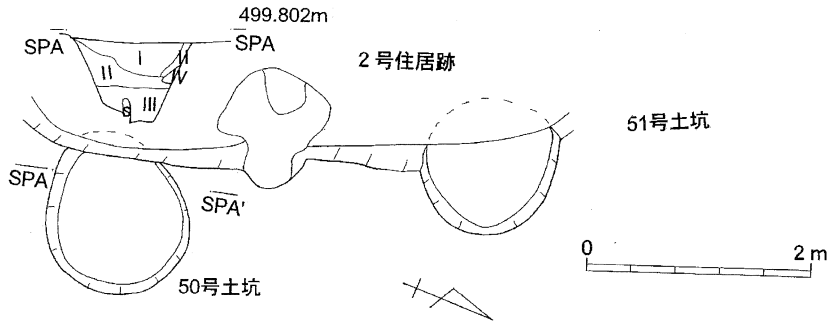




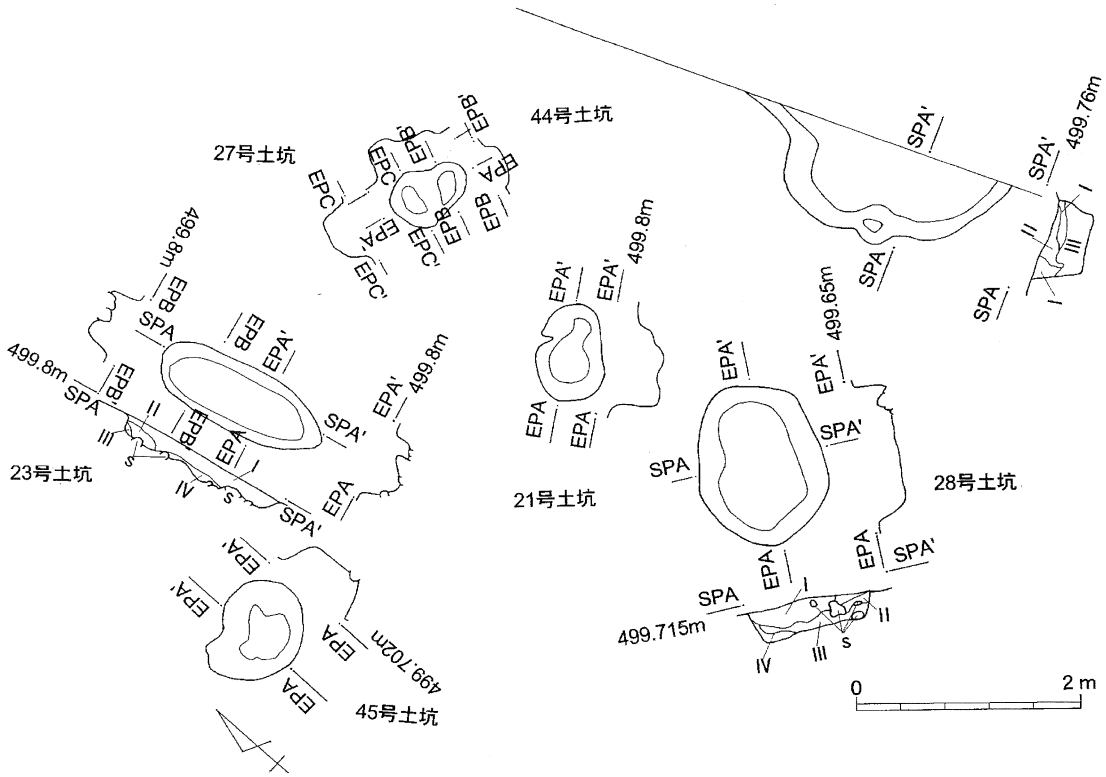
（上）第30図　C地点　土坑（1）
（下）第31図　C地点　土坑（2）・溝



第32図　C地点　土坑（3）竪穴状遺構



第33図　C地点　土坑（4）



第34図　C地点　土坑（5）竪穴状遺構

土坑・溝状遺構・竪穴状遺構　覆土一覧

◎第22図（A地点　1号掘立柱建物跡・周辺土坑）

A地点　49号土坑・51号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅱ層：黒褐色土　粘性強　赤色粒子を含む
Ⅲ層：暗茶褐色土　粘性ややあり　赤色粒子・礫含
Ⅳ層：暗灰褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む

A地点　52号土坑
Ⅰ層：黒褐色土　粘性強　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：茶褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅲ層：灰褐色土　粘性なし
Ⅳ層：茶褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅴ層：赤褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅵ層：暗灰褐色土　粘性ややあり
Ⅶ層：黄褐色土　粘性ややあり
Ⅷ層：黄褐色土　粘性ややあり
Ⅸ層：灰褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅹ層：灰褐色土　粘性なし
XI 層：灰褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む

A地点　59号土坑
Ⅰ層：灰褐色土　粘性なし　礫を含む
Ⅱ層：黒褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅲ層：黄褐色土　粘性強
Ⅳ層：茶褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅴ層：灰褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅵ層：赤灰褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む

A地点　65号土坑
Ⅰ層：暗褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅱ層：茶褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅲ層：暗茶褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅳ層：茶褐色土　粘性なし　礫・赤色粒子を含む
Ⅴ層：黒褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅵ層：赤褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅶ層：暗褐色土　粘性なし
Ⅷ層：明茶褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅸ層：灰褐色土　粘性なし
Ⅹ層：黄褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む

◎第23図（A地点　2号掘立柱建物跡・周辺土坑）

A地点　60号土坑
Ⅰ層：暗灰褐色土　粘性ややあり
Ⅱ層：黒褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅲ層：茶褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅳ層：灰褐色土　粘性あり

A地点　61号土坑
Ⅰ層：灰褐色土　粘性なし
Ⅱ層：暗灰褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅲ層：茶褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅳ層：茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅴ層：黒褐色土　粘性強　赤色粒子・礫を含む
Ⅵ層：赤茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅶ層：暗灰褐色土　粘性ややあり　礫を含む

A地点　63号土坑
Ⅰ層：灰褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅱ層：黒褐色土　粘性なし　赤色粒子・礫を含む
Ⅲ層：茶褐色土　粘性なし　赤色粒子・礫を含む
Ⅳ層：灰褐色土　粘性あり

A地点　69号土坑
Ⅰ層：暗灰褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅱ層：黄褐色土　粘性なし　赤色粒子を若干含む
Ⅲ層：灰褐色土　粘性なし　赤色粒子・礫を含む
Ⅳ層：黒褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅴ層：灰褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む

A地点　70号土坑
Ⅰ層：暗灰褐色土　粘性なし　赤色粒子を若干含む
Ⅱ層：黒褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅲ層：茶褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅳ層：赤茶褐色土　粘性なし

◎第23図（A地点　2号掘立柱建物跡・周辺土坑）

A地点　71号土坑
Ⅰ層：黄褐色土　粘性あり
Ⅱ層：黄褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅲ層：灰褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅳ層：暗褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む

◎第26図（A地点　土坑ー5）

A地点　5号土坑・7号土坑
Ⅰ層：灰褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅱ層：灰褐色土　粘性なし
Ⅲ層：灰褐色土　粘性ややあり
Ⅳ層：暗褐色土　粘性なし　礫・赤色粒子を含む
Ⅴ層：暗茶褐色土　粘性なし　粒子粗
Ⅵ層：灰褐色土　粘性なし　粒子微細
Ⅶ層：暗茶褐色土　粘性なし　粒子粗　赤色粒子含
Ⅷ層：暗茶褐色土　粘性なし　粒子粗
Ⅸ層：灰茶褐色土　粘性なし　粒子微細

◎第27図（A地点　土坑ー6）

A地点　81号土坑
Ⅰ層：明茶褐色土　粘性なし　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：暗茶褐色土　粘性なし　礫を含む
Ⅲ層：茶褐色土　粘性なし　礫を含む
Ⅳ層：暗褐色土　粘性なし

A地点　82号土坑
Ⅰ層：暗茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅱ層：暗茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅲ層：黒褐色土　粘性強　微細赤色粒子を含む
Ⅳ層：黒褐色土　粘性強　赤色粒子を含む
Ⅴ層：明茶褐色土　粘性弱　赤色粒子を含む
Ⅵ層：明茶褐色土　粘性弱　赤色粒子を含む
Ⅶ層：黒褐色土　粘性強　粒子粗　赤色粒子を含む

◎第27図（A地点　土坑ー6）

A地点　84号土坑
Ⅰ層：黒褐色土　粘性・しまり無　赤色粒子を含む
Ⅱ層：黒褐色土　粘性弱　しまり無　赤色粒子含
Ⅲ層：暗黄褐色土　粘性弱　しまり無　赤色粒子含
Ⅳ層：暗茶褐色土　粘性・しまり無　赤色粒子含
Ⅴ層：暗赤褐色土　粘性強　しまり弱　赤色粒子含
Ⅵ層：Ⅲ層と類似するが、赤色粒子の密度が異なる
Ⅶ層：明茶褐色土　粘性・しまり無　赤色粒子含
Ⅷ層：Ⅲ層に類似するが粘性が強い点で異なる
Ⅸ層：明黄褐色土　粘性・しまり無　赤色粒子含
Ⅹ層：暗茶褐色土　粘性強　しまり無　赤色粒子含
XI 層：明灰褐色土　粘性強　しまり有　赤色粒子含
XⅡ層：暗灰褐色土　粘性弱　しまり無　赤色粒子含
XⅢ層：暗茶褐色土　粘性強　しまり有　赤色粒子含
XⅣ層：明茶褐色土　粘性強　しまり有　赤色粒子含

A地点　86号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性弱　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：黒褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅲ層：黒褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅳ層：暗茶褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅴ層：暗茶褐色土　粘性あり　礫を含む

A地点　87号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性弱　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：暗灰褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅲ層：茶褐色土　粘性あり　礫を含む
Ⅳ層：黒褐色土　粘性あり　礫を含む
Ⅴ層：暗茶褐色土　粘性弱　礫・赤色粒子を含む

A地点　88号土坑
Ⅰ層：暗茶褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：黒褐色土　粘性なし　赤色粒子を少量含む
Ⅲ層：黄褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅳ層：茶褐色土　粘性なし　礫・赤色粒子を含む
Ⅴ層：暗灰褐色土　粘性あり　赤色粒子を少量含む
Ⅵ層：灰褐色土　粘性あり
Ⅶ層：灰褐色土　粘性なし　礫を含む

◎第27図（A地点　土坑ー6）

A地点　８９号土坑
Ⅰ層：暗灰褐色土　粘性ややあり　礫・赤色粒子含
Ⅱ層：暗茶褐色土　粘性ややあり　礫・赤色粒子含
Ⅲ層：茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅳ層：暗褐色土　粘性なし　礫・赤色粒子を含む
Ⅴ層：暗灰褐色土　粘性なし
Ⅵ層：暗茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅶ層：灰褐色土　粘性なし
Ⅷ層：黄褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む

A地点　９０号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅱ層：茶褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅲ層：暗茶褐色土　粘性あり　礫を含む
Ⅳ層：黒褐色土　粘性あり
Ⅴ層：茶褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅵ層：黒褐色土　粘性あり

◎第29図（A地点　土坑ー8）

A地点　４５号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性ややあり　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：灰褐色土　粘性なし
Ⅲ層：暗灰褐色土　粘性なし
Ⅳ層：暗褐色土　粘性なし　赤色粒子を含む
Ⅴ層：黒褐色土　粘性ややあり　赤色粒子を含む
Ⅵ層：灰褐色土　粘性あり　赤色粒子を含む
Ⅶ層：暗褐色土　粘性ややあり

A地点　４８号土坑
Ⅰ層：黒褐色土　粘性あり　礫を含む
Ⅱ層：茶褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅲ層：暗褐色土　粘性なし　礫・赤色粒子を含む
Ⅳ層：黒褐色土　粘性あり　礫を含む
Ⅴ層：灰褐色土　粘性なし

◎第30図（C地点　土坑ー1）

C地点　１号土坑
Ⅰ層：明茶褐色土　粘性あり　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：茶褐色土　粘性ややあり　微細赤色粒子を含む
Ⅲ層：暗茶褐色土　粘性あり　礫を含む

◎第30図（C地点　土坑ー1）

C地点　２号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性あり　微細な赤色粒子を含む
Ⅱ層：暗茶褐色土　粘性なし　微細粒子・礫を含む

C地点　３号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性ややあり　微細粒子・礫を含む

C地点　５号土坑
Ⅰ層：暗褐色土　粘性ややあり　小礫・スコリア含む
Ⅱ層：黒褐色土　粘性あり　スコリアを含む

C地点　７号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粒子やや細かい　赤色粒子を含む
Ⅱ層：暗茶褐色土　粒子やや細かい　赤色粒子を含む
Ⅲ層：暗茶褐色土　粒子やや細かい　茶褐色粒子含む
Ⅳ層：暗赤褐色土　粒子粗い　スコリアを含む

C地点　８号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性あり　粒子細　赤色粒子を含む
Ⅱ層：暗茶褐色土　粘性あり　粒子粗　礫を含む
Ⅲ層：黄褐色土　粘性あり　粒子粗　赤色粒子を含む
Ⅳ層：灰褐色土　粘性なし　粒子細

◎第31図（C地点　土坑ー1・溝状遺構）

C地点　１１号土坑・１２号土坑・３０号土坑
Ⅰ層：明茶褐色土　粘性有　赤色粒子・礫を含む
Ⅱ層：茶褐色土　粘性あり　赤色粒子・礫を含む
Ⅲ層：灰褐色土　粘性弱　粒子細　耕作土
Ⅳ層：茶褐色土　Ⅱ層に類似するが粒子が少ない
Ⅴ層：暗茶褐色土　粘性弱　粒子細　礫を含む
Ⅵ層：黄褐色土　粘性弱　粒子細
Ⅶ層：スコリアブロック

C地点　１６号土坑・１７号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性あり　粒子細
Ⅱ層：暗茶褐色土　粘性あり　粒子細　赤色粒子含
Ⅲ層：暗茶褐色土　粘性あり　粒子細　礫を含む

◎第31図（C地点　土坑ー1・溝状遺構）

C地点　１８号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性有　赤色粒子・礫を含む
Ⅱ層：茶褐色土　Ⅰ層と類似するが赤色粒子が多い
Ⅲ層：茶褐色土　Ⅰ層と類似するが赤色粒子が少ない
Ⅳ層：茶褐色土　粘性ややあり　粒子粗　赤色粒子含
Ⅴ層：赤褐色土　粘性ややあり　粒子粗　赤色粒子含

C地点　１９号土坑・２０号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性なし　粒子細　礫・ｽｺﾘｱを含む
Ⅱ層：暗褐色土　粘性なし　礫を多量に含む
Ⅲ層：灰褐色土　粘性なし　礫を多量に含む

C地点　１号溝状遺構
Ⅰ層：茶褐色土　粘性あり　粒子細
Ⅱ層：スコリアブロック
Ⅲ層：茶褐色土　Ⅰ層に類似する礫・スコリアを含む
Ⅳ層：黄褐色土　粘性なし　粒子粗　礫を多量に含む

◎第32図（C地点　土坑ー3・竪穴状遺構ー1）

C地点　１号竪穴状遺構
Ⅰ層：灰褐色土　粘性なし　粒子細　耕作土
Ⅱ層：淡茶褐色土　粘性なし　赤色粒子を微量含む
Ⅲ層：茶褐色土　粘性あり　粒子細　礫・赤色粒子含
Ⅳ層：明茶褐色土　粘性あり　粒子粗　赤色粒子含

C地点　９号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性ややあり　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：暗褐色土　粒子細　スコリア・炭を少量含む
Ⅲ層：黒褐色土　粒子細　スコリアを微量に含む

C地点　１３号土坑・１４号土坑・２５号土坑
Ⅰ層：明茶褐色土　粒子細　赤色粒子・礫を含む
Ⅱ層：茶褐色土　粒子やや細　赤色粒子を少量含む
Ⅲ層：茶褐色土　粒子細　赤色粒子を含む
Ⅳ層：明茶褐色土　粒子粗　赤色粒子を含む
Ⅴ層：茶褐色土　粒子細　赤色粒子を少量含む
Ⅵ層：茶褐色土　粒子やや細　赤色粒子を少量含む

◎第33図（C地点　土坑ー4）

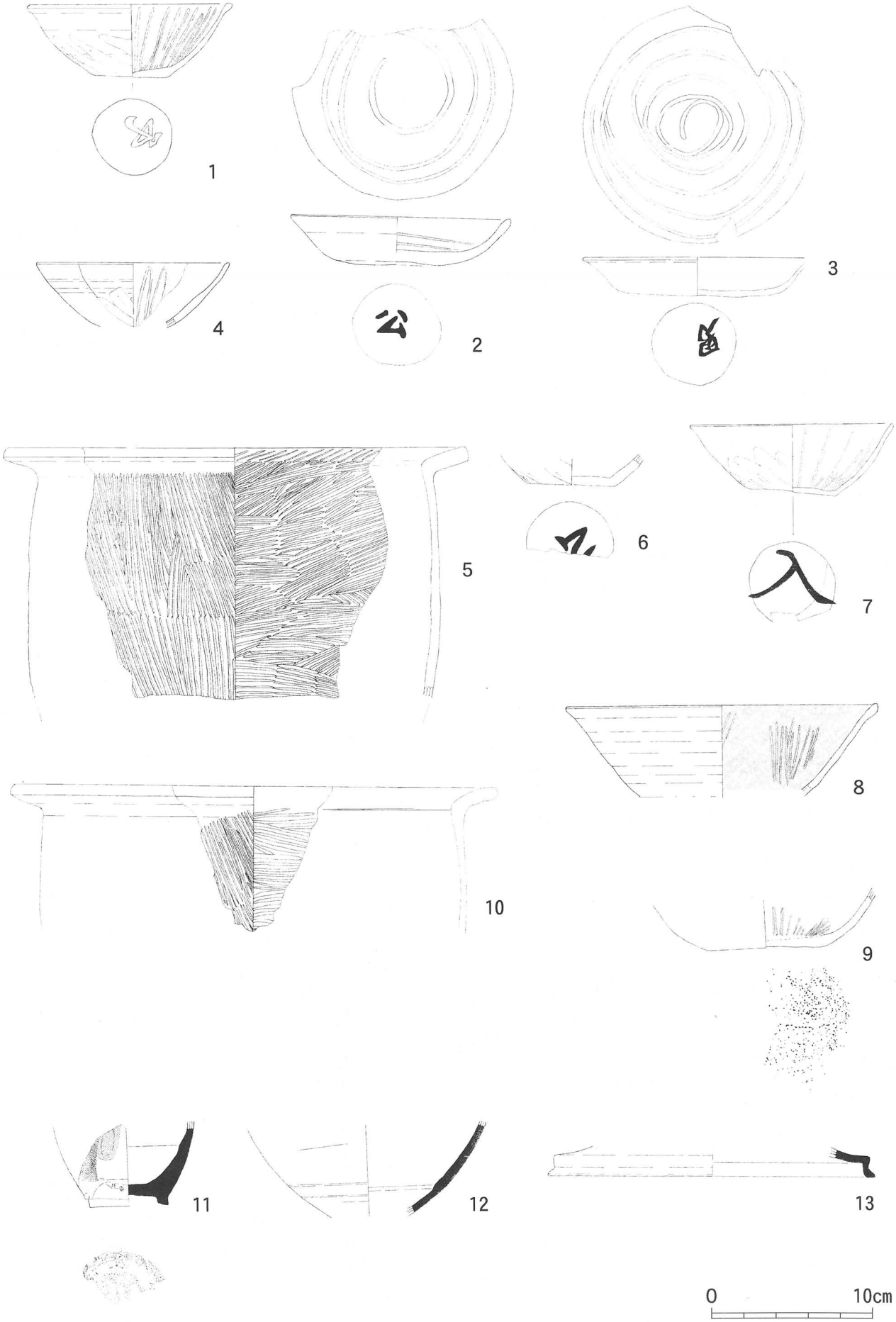
C地点　５０号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性ややあり　礫・赤色粒子を含む
Ⅱ層：暗褐色土　粒子細　スコリア・炭を少量含む
Ⅲ層：黒褐色土　粒子細　スコリアを微量に含

◎第34図（C地点　土坑ー5・竪穴状遺構ー2）

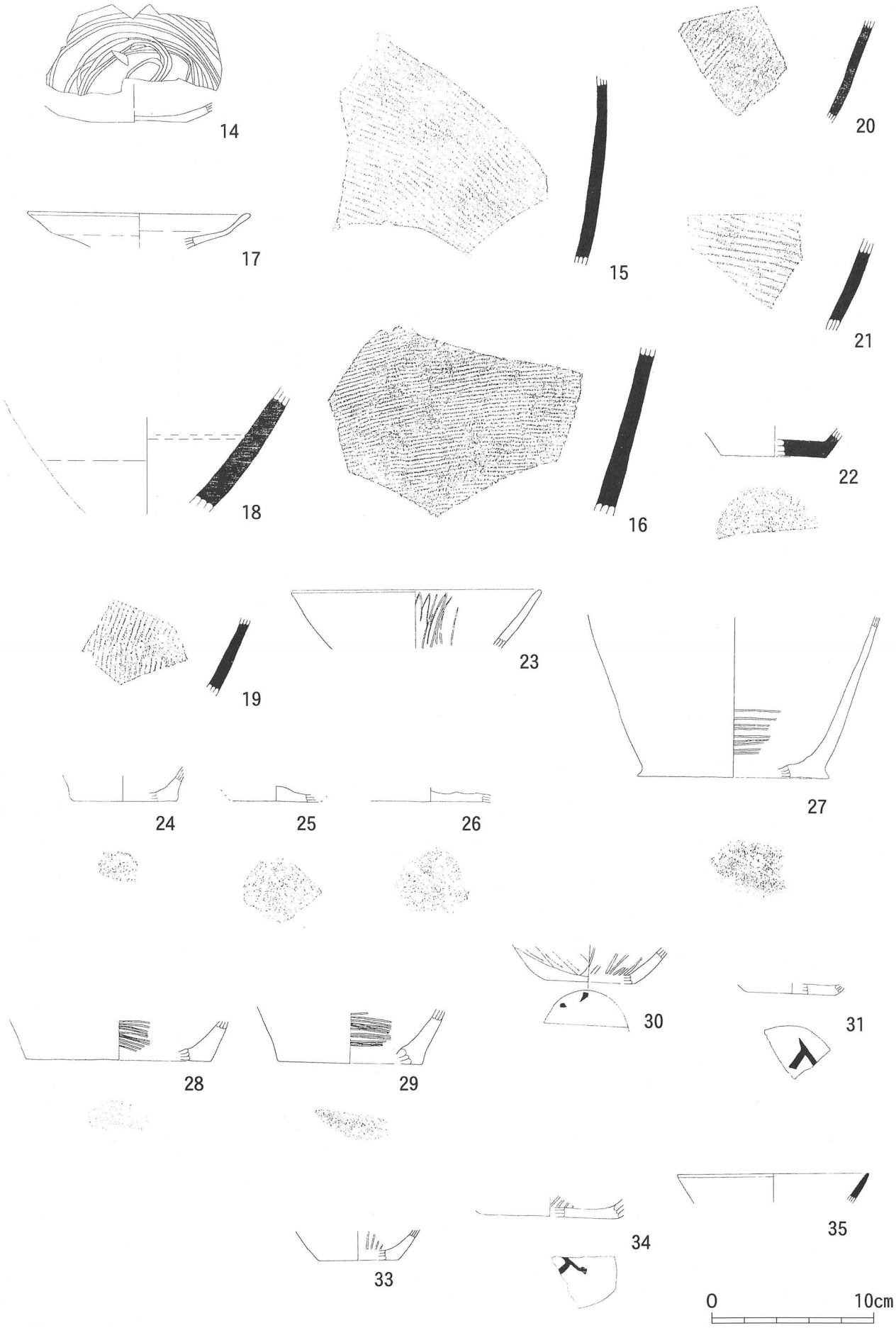
C地点　２号竪穴状遺構
Ⅰ層：茶褐色土　粘性あり　粒子やや粗　赤色粒子含
Ⅱ層：明茶褐色土　粘性あり　粒子細　赤色粒子含
Ⅲ層：暗茶褐色土　粘性弱　粒子やや粗　礫を含む

C地点　２３号土坑
Ⅰ層：茶褐色土　粘性ややあり　粒子細　赤色粒子含
Ⅱ層：明褐色土　粘性ややあり　粒子細　赤色粒子含
Ⅲ層：茶褐色土　粘性やや有　粒子細　赤色粒子含
Ⅳ層：暗茶褐色土　粘性ややあり　粒子やや細

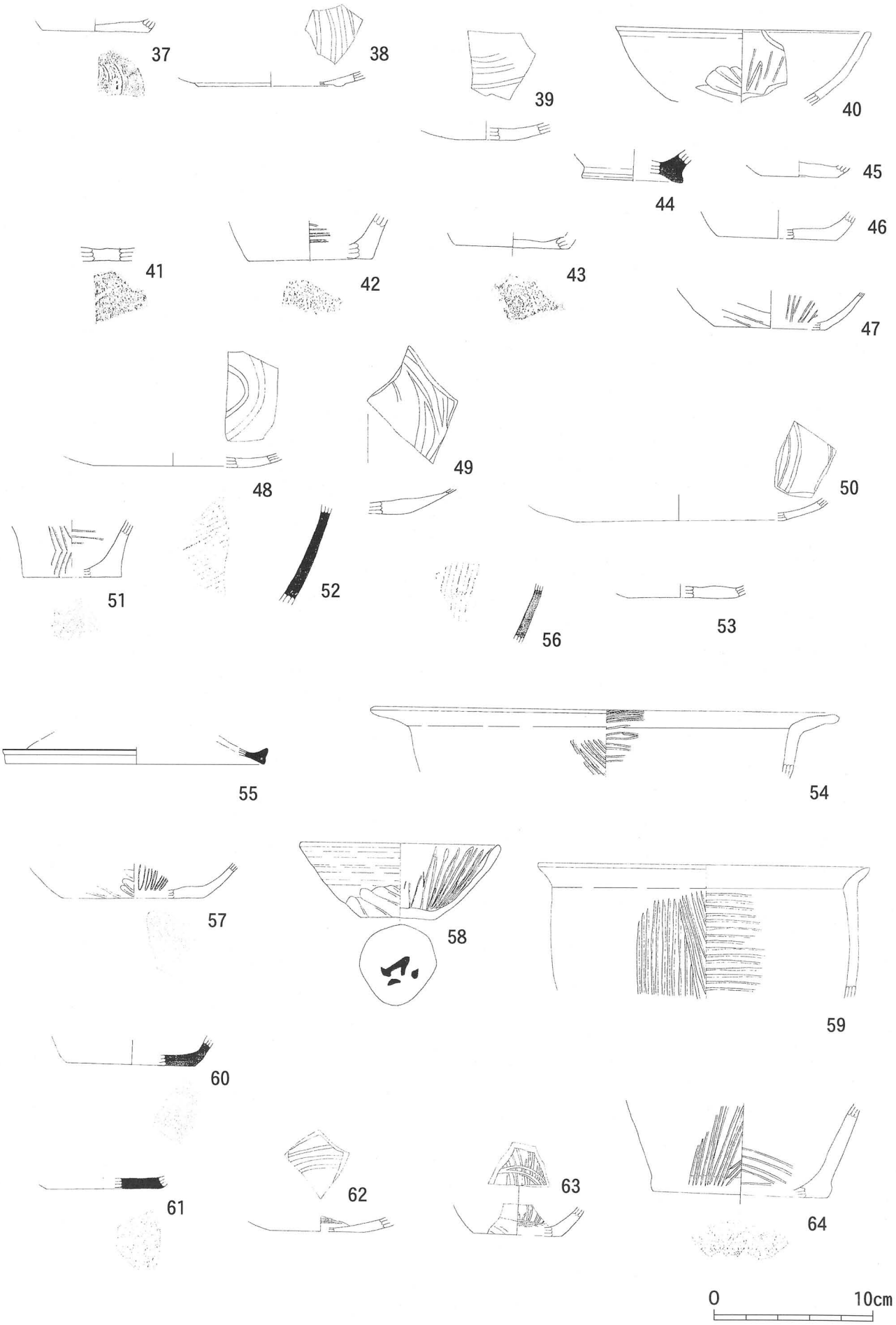
C地点　２８号土坑
Ⅰ層：黒褐色土　粘性なし　粒子粗　赤色粒子を含む
Ⅱ層：茶褐色土　粘性なし　粒子細　赤・黄色粒子含
Ⅲ層：黒褐色土　粘性あり　Ⅰ層と類似
Ⅳ層：黄褐色土　粘性あり　粒子細　赤色粒子を含む



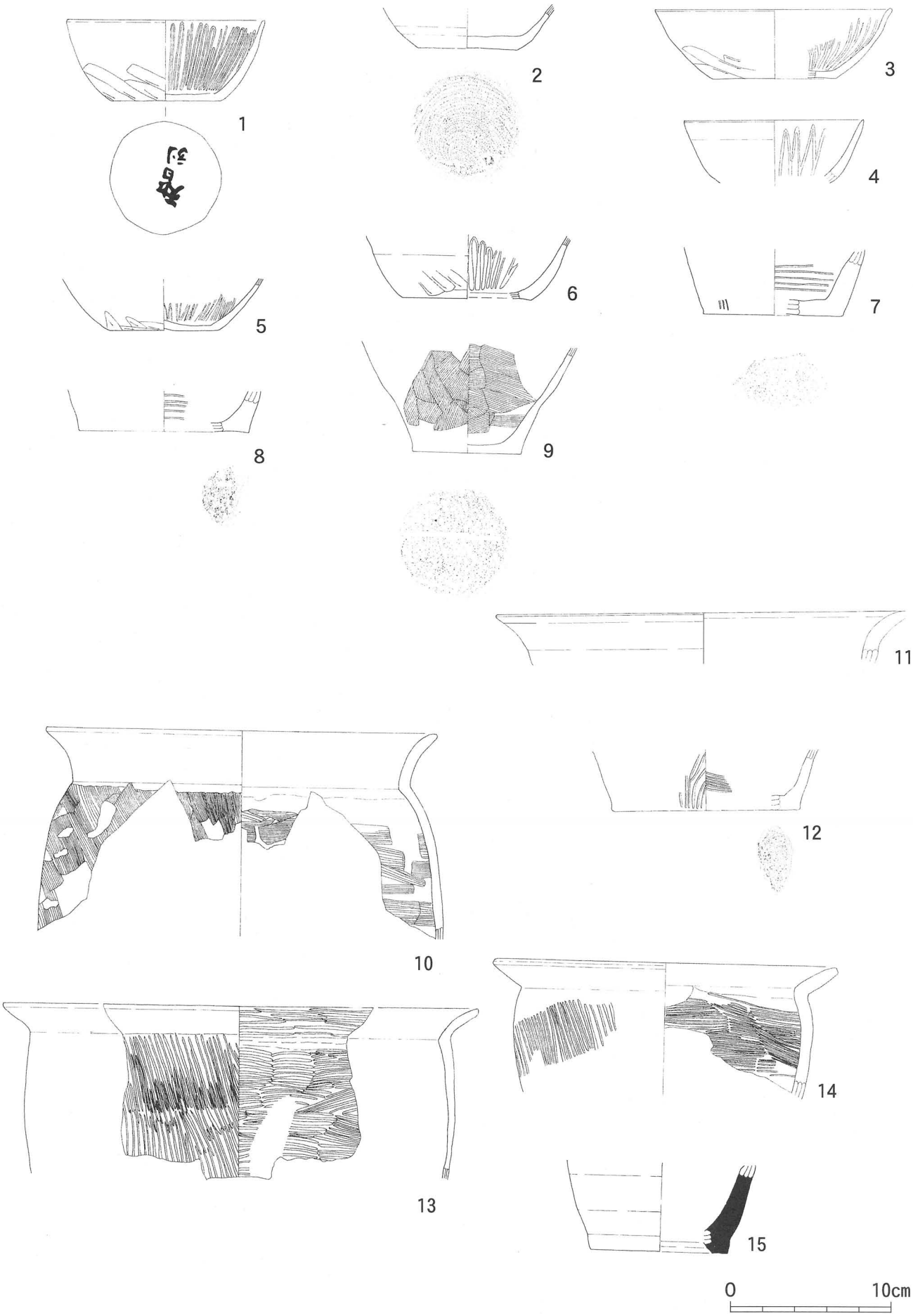
出土遺物１　Ａ地点　１号住居跡　出土土器（１）



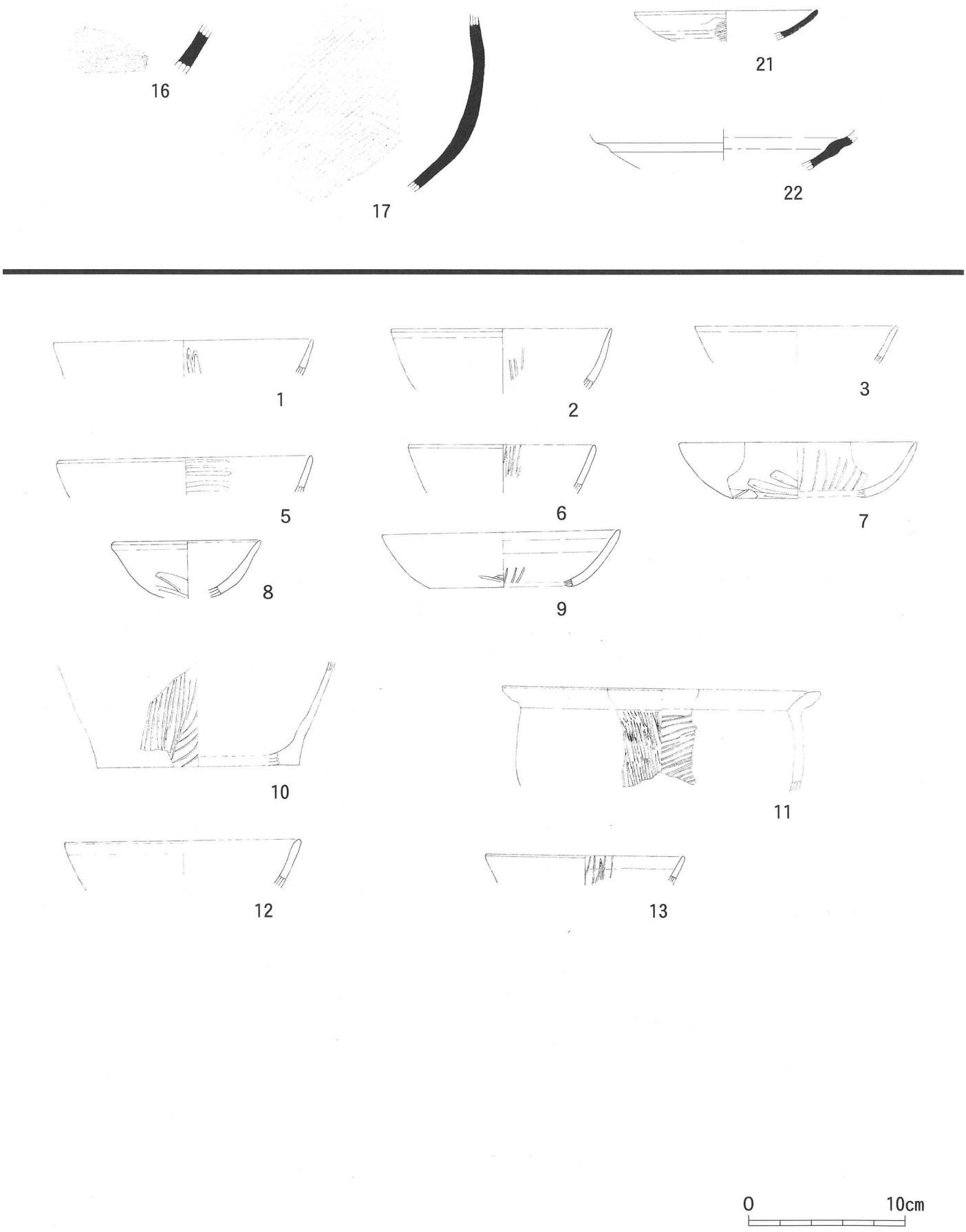
出土遺物２　Ａ地点　１号住居跡　出土土器（２）



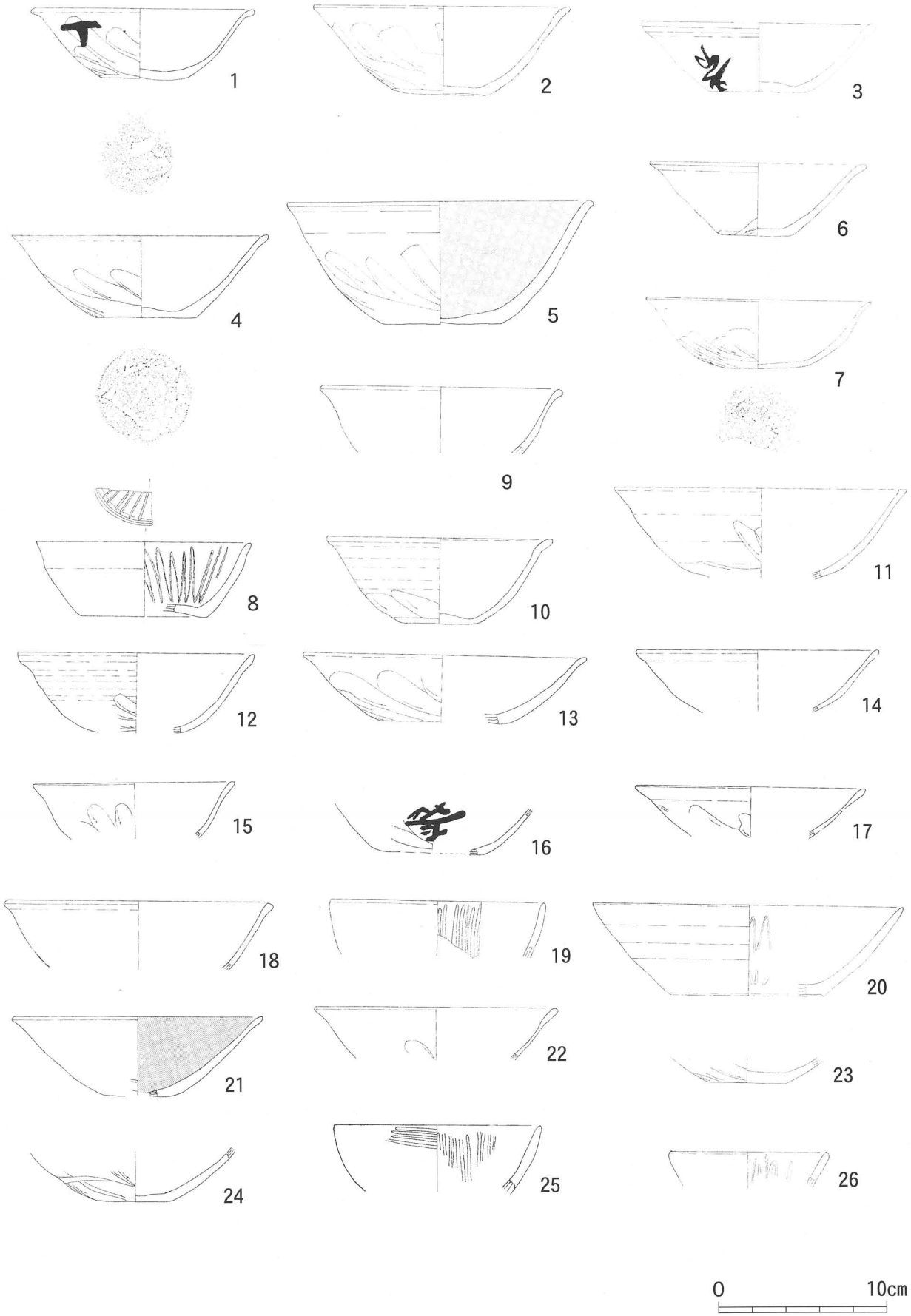
出土遺物３　Ａ地点　１号住居跡　出土土器（３）



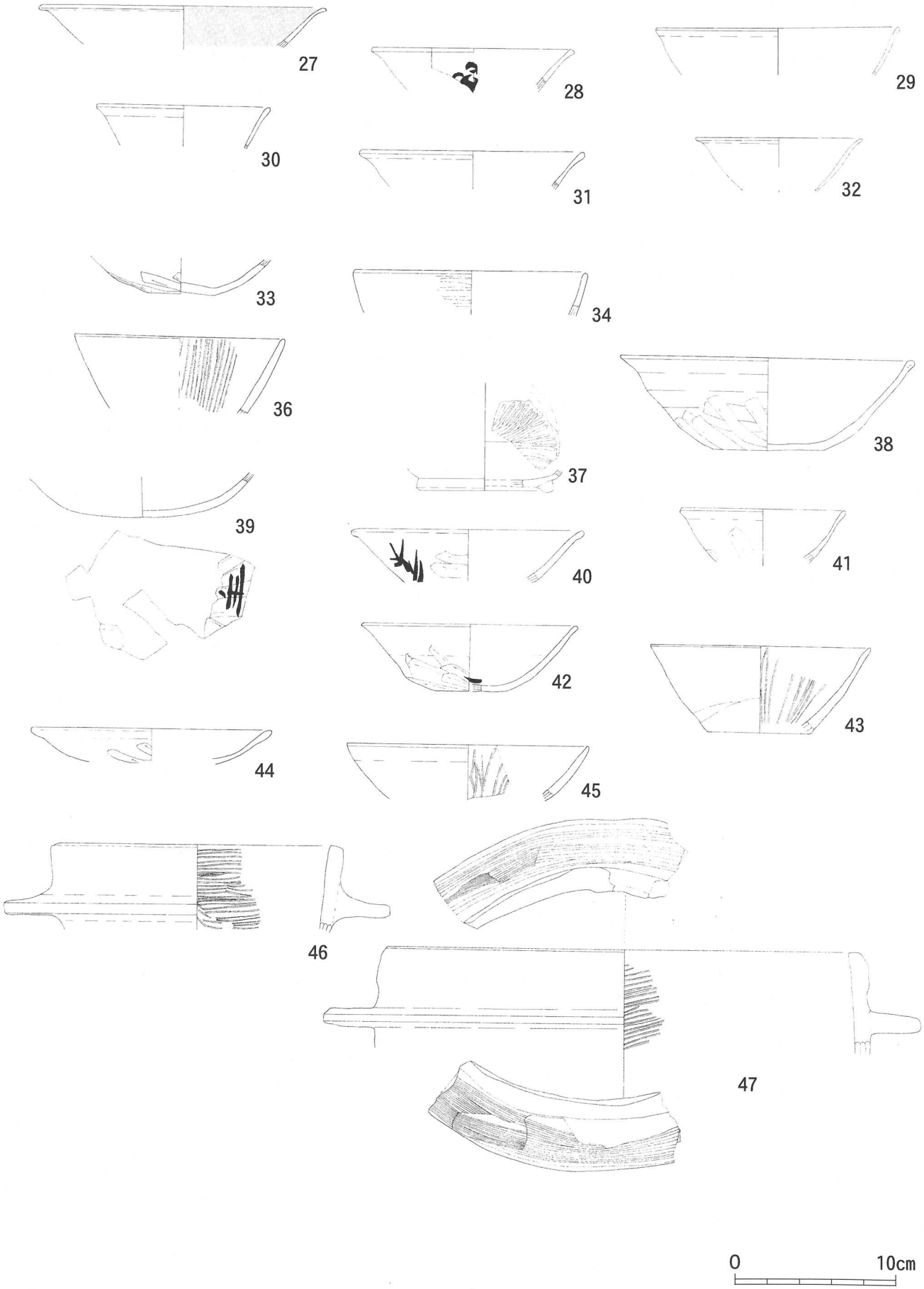
出土遺物４　Ｂ地点　１号住居跡　出土土器（１）



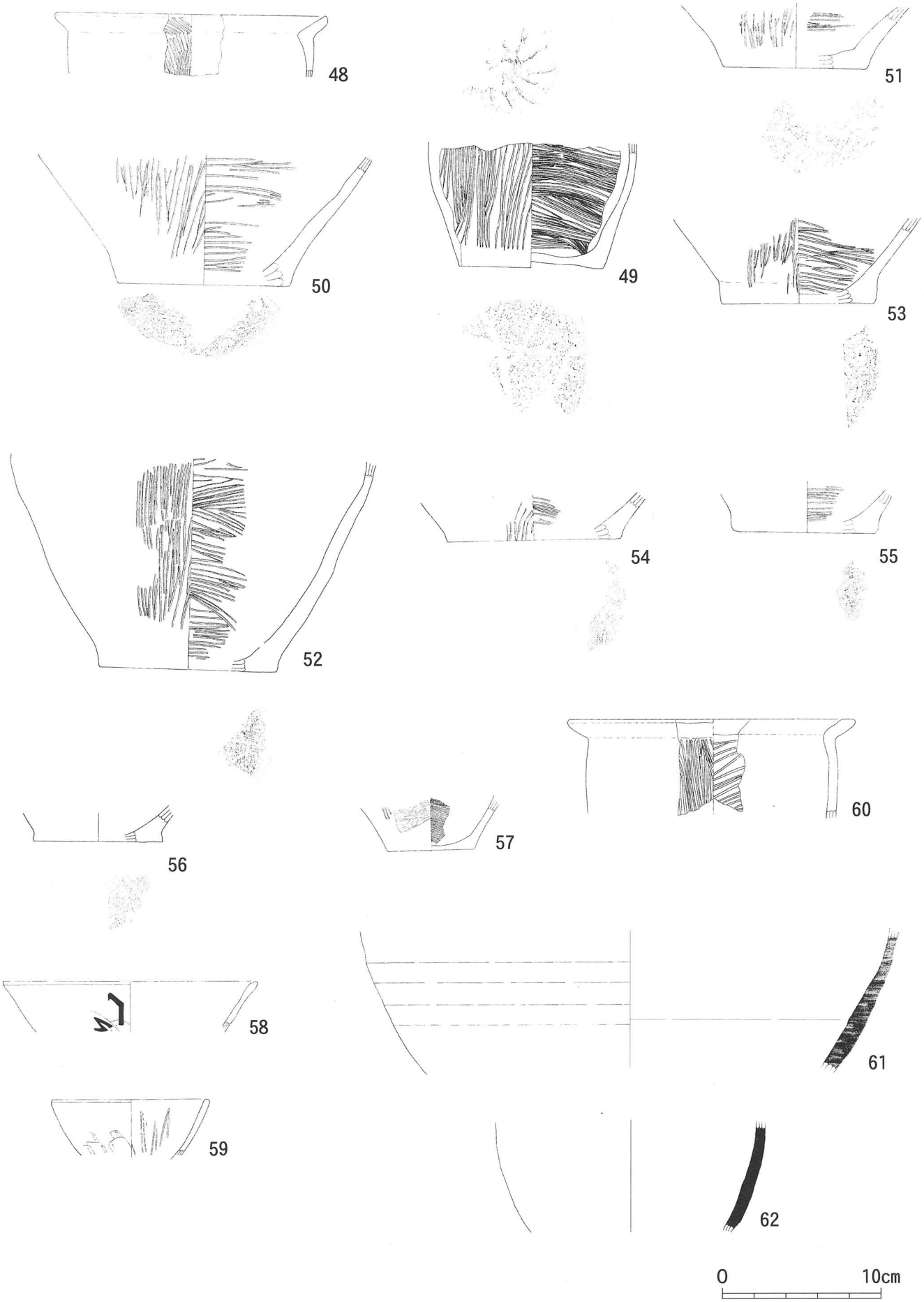
出土遺物５　Ｂ地点　１号住居跡　出土土器（２）
　　Ｃ地点　１号住居跡　出土土器



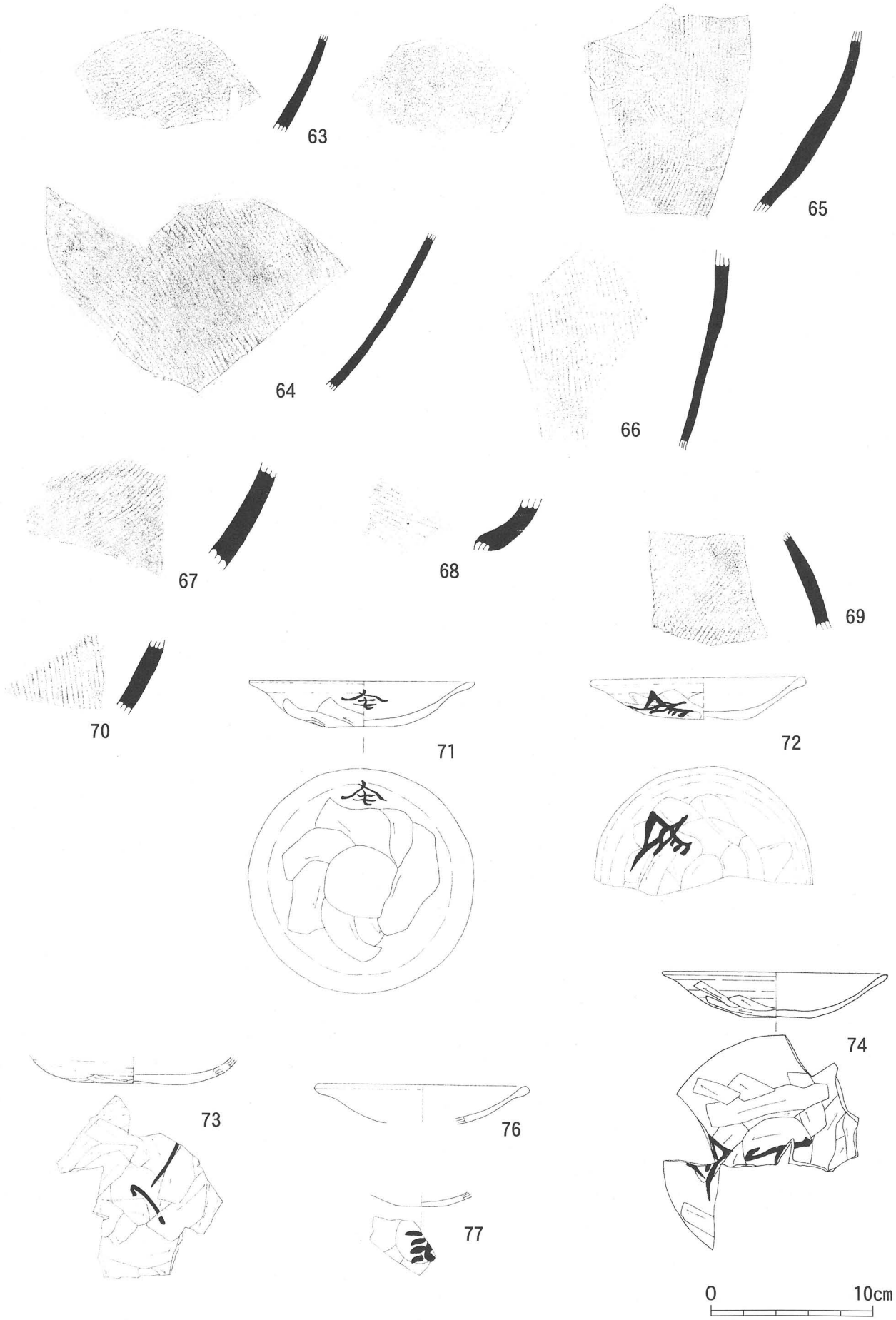
出土遺物６　Ｃ地点　２号住居跡　出土土器（１）



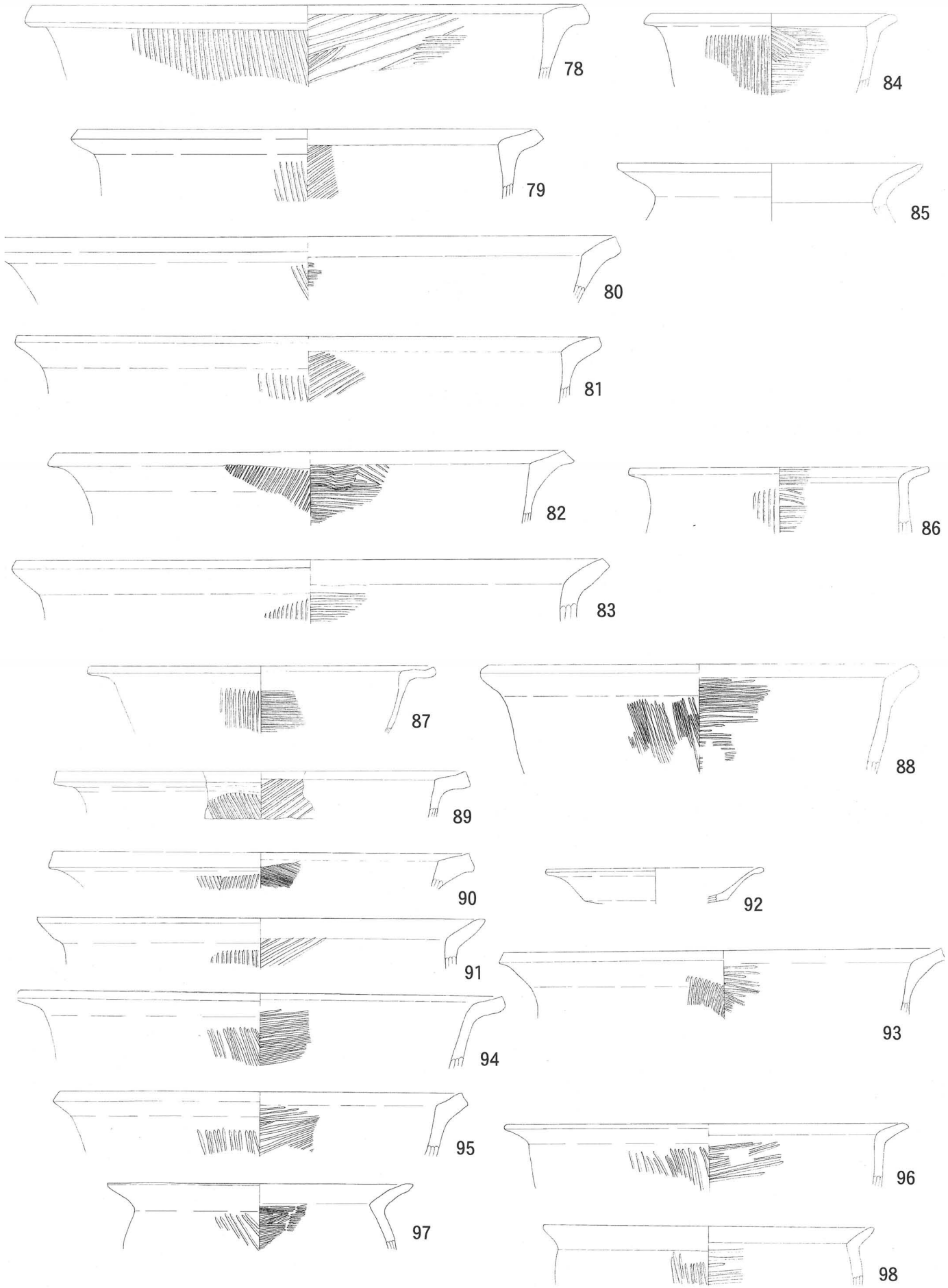
出土遺物７　Ｃ地点　２号住居跡　出土土器（２）



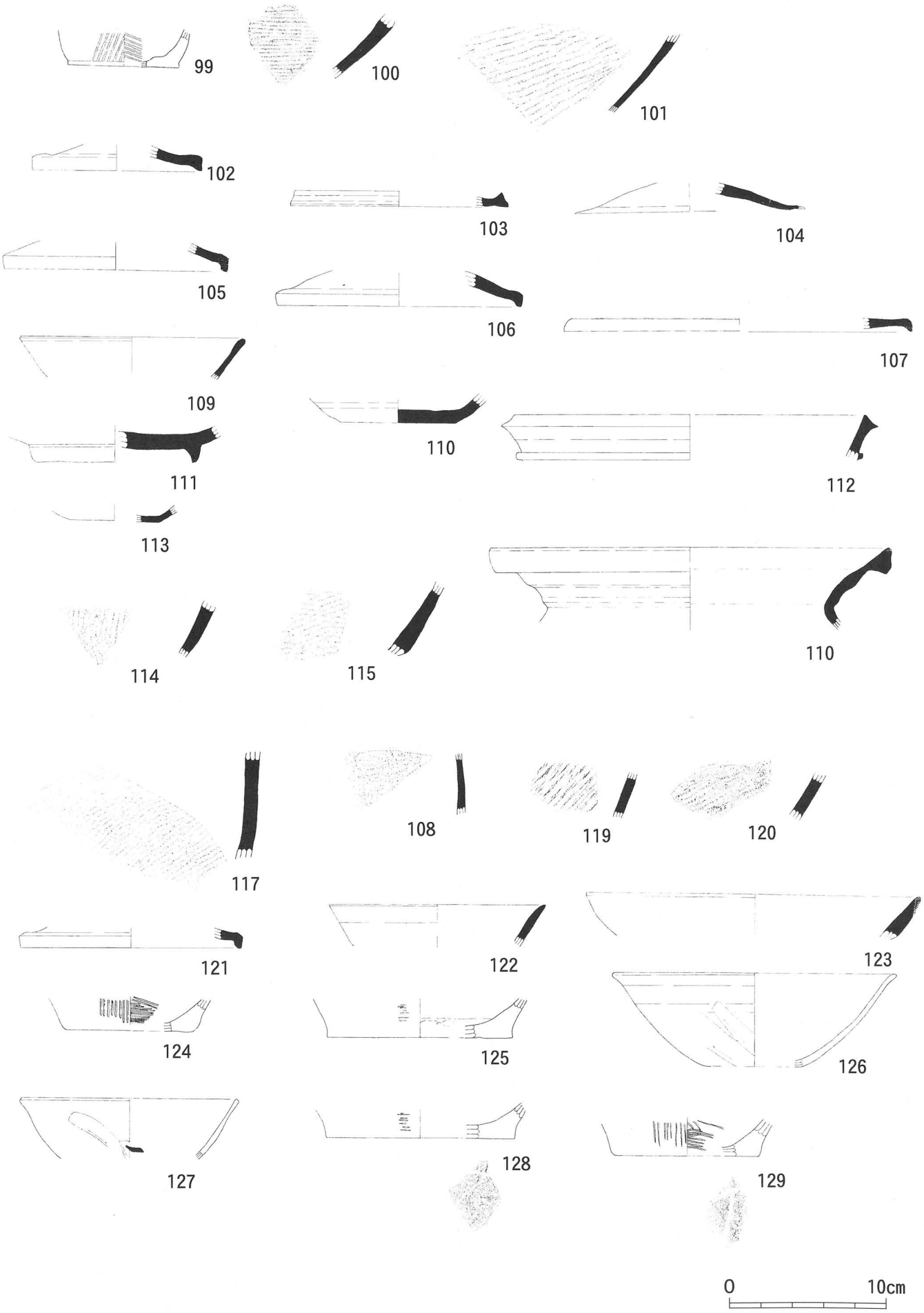
出土遺物８　Ｃ地点　２号住居跡　出土土器（３）



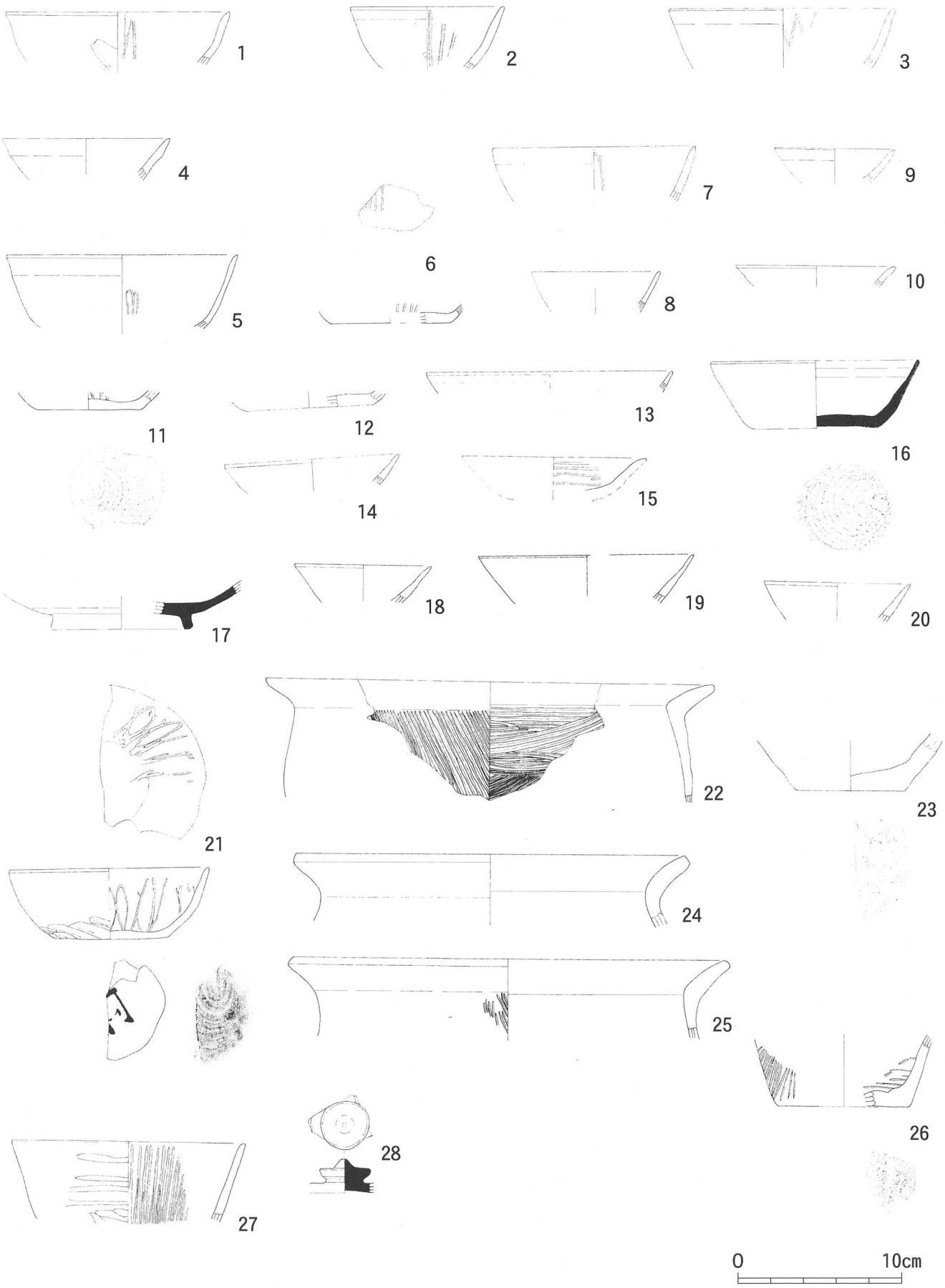
出土遺物９　Ｃ地点　２号住居跡　出土土器（４）



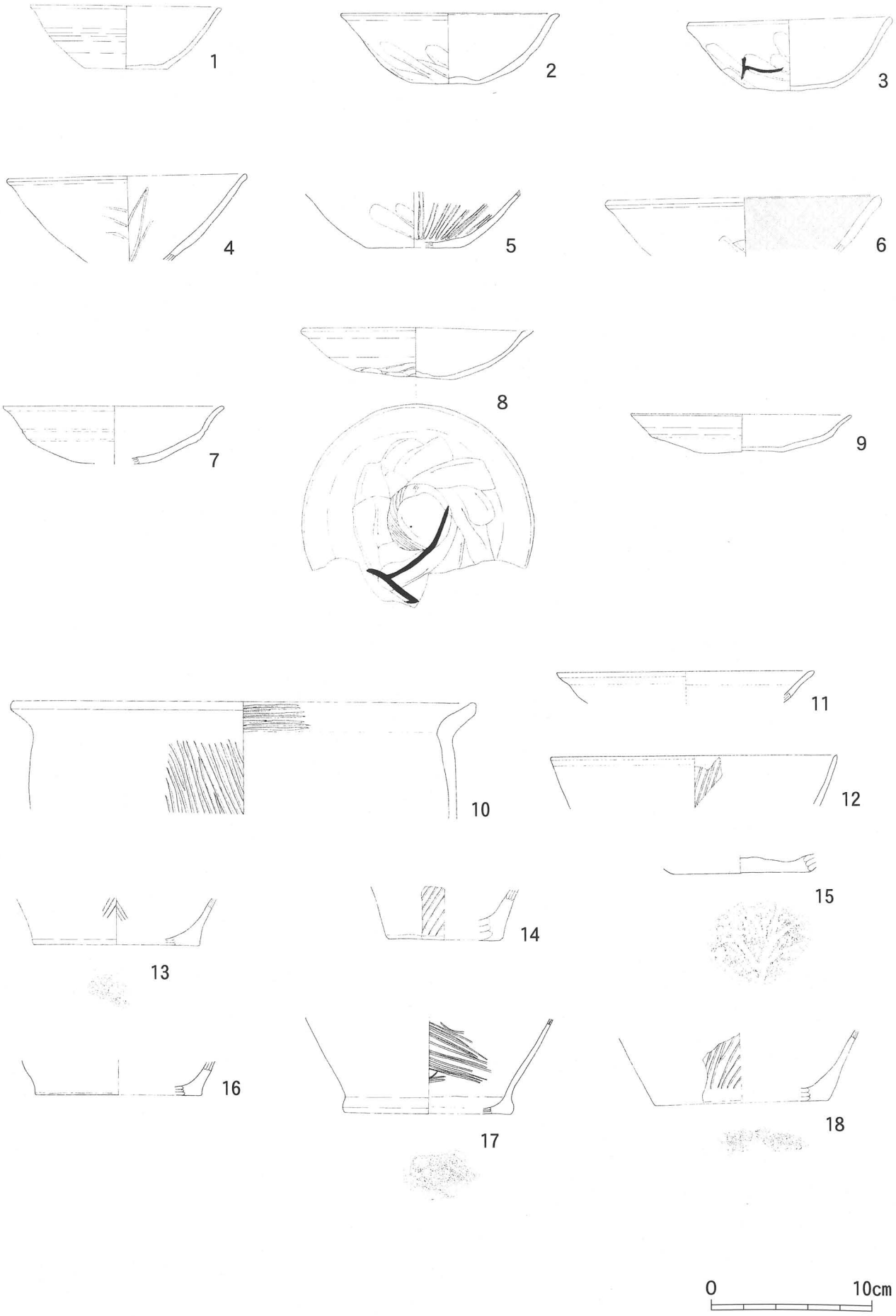
出土遺物10　C地点　2号住居跡　出土土器（5）



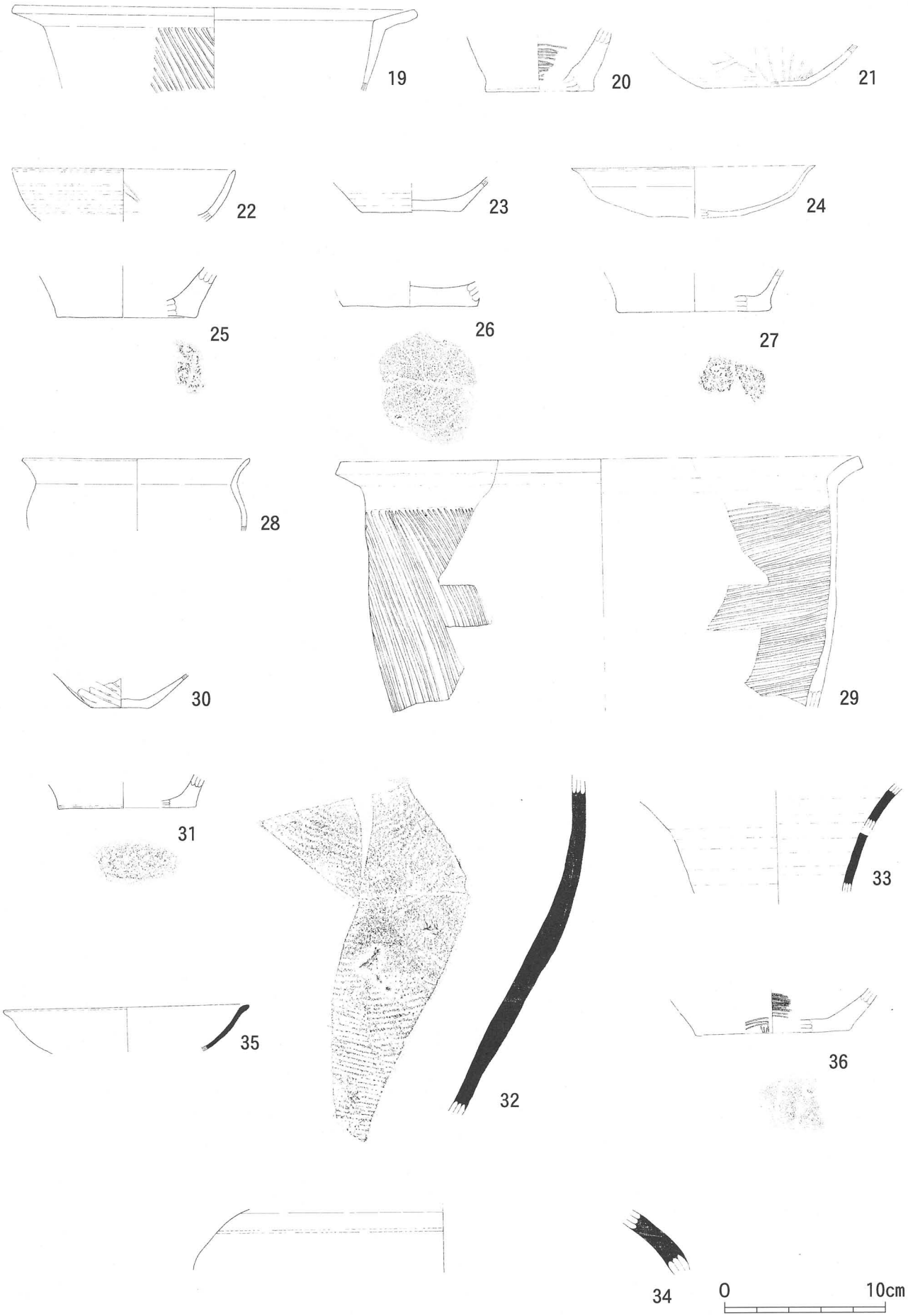
出土遺物11　C地点　2号住居跡　出土土器（6）



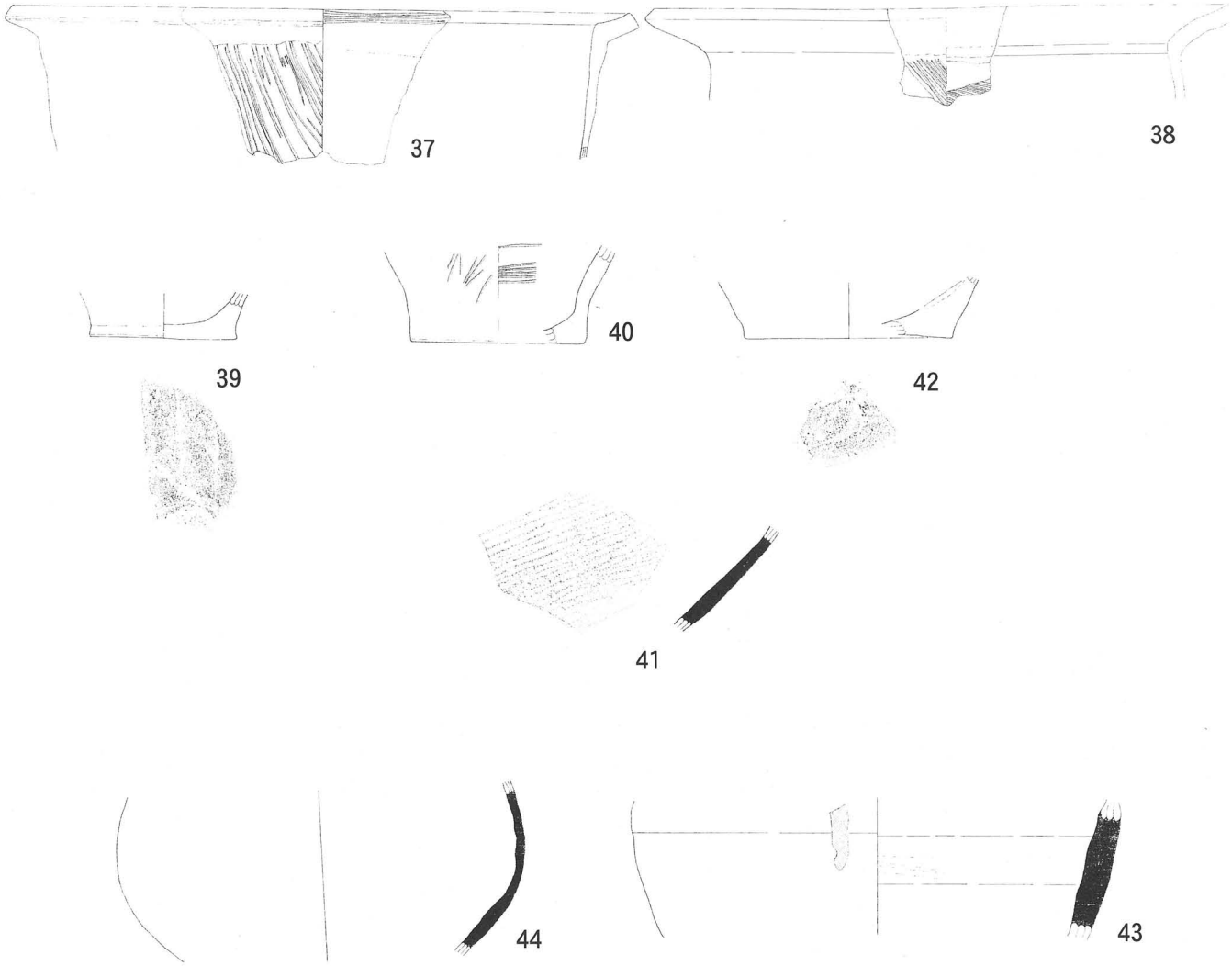
出土遺物12　C地点　3号住居跡　出土土器



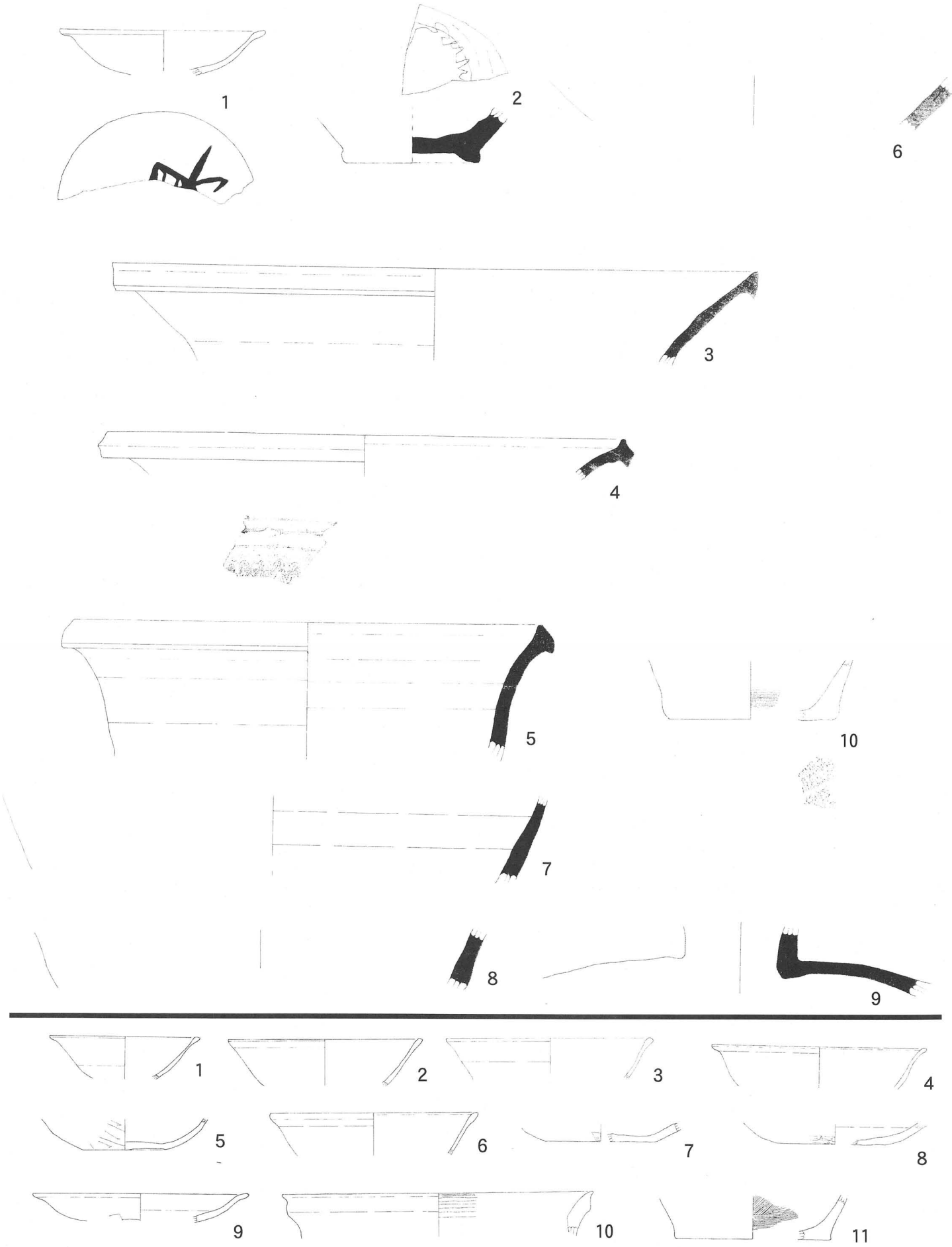
出土遺物13　D地点　1号住居跡　出土土器（1）



出土遺物14　D地点　1号住居跡　出土土器（2）

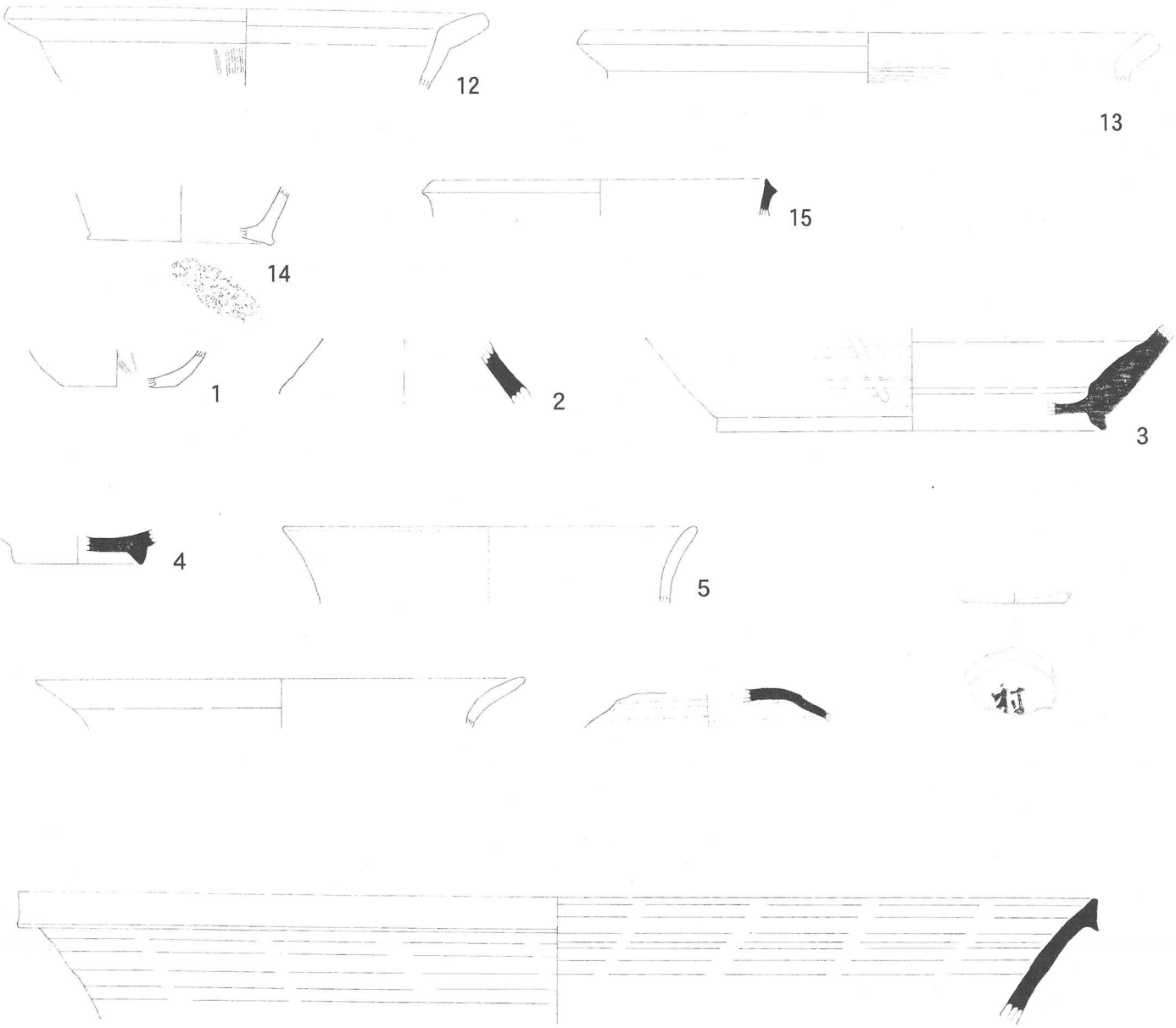


出土遺物15　Ｄ地点　１号住居跡　出土土器（３）

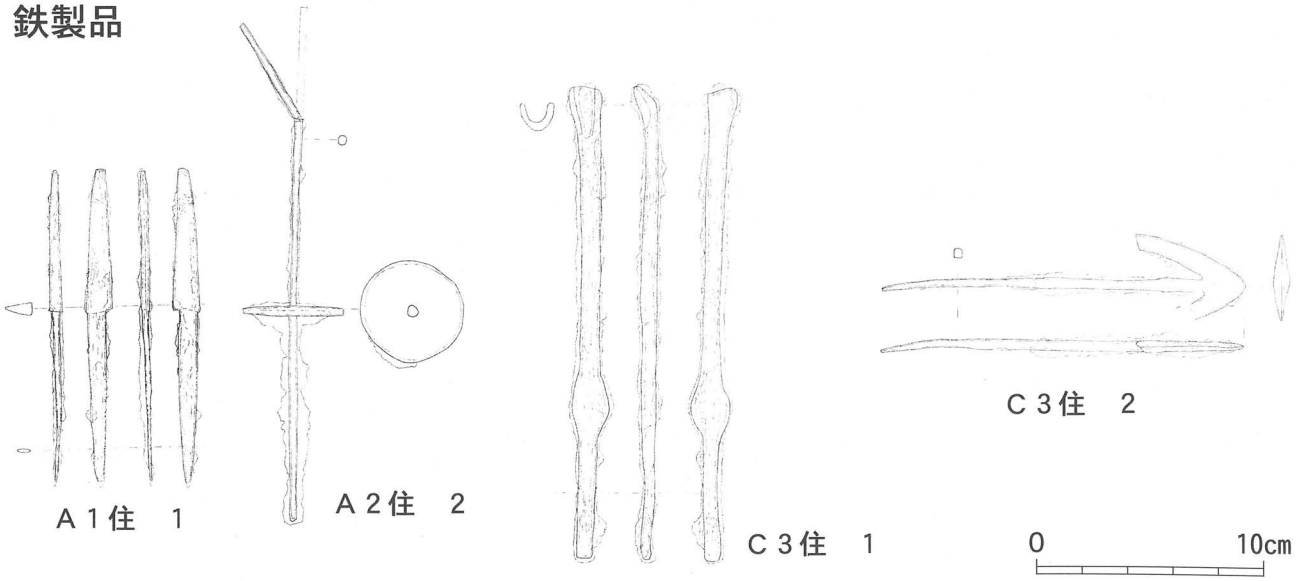


出土遺物16　A・C地点　土坑出土土器

0　10cm



鉄製品



出土遺物17　土坑・溝状遺構・堅穴状遺構　出土土器・鉄製品

A地点　1号住居跡

番号	器種	法量(cm) 口径	最大径	器高	底部径	内深	調整 器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	坏	11.2	11.9	4.3	4.3	4	ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	ﾍﾗ削り	密	良好	赤褐色	ほぼ完全	墨書
2	皿	12.6	12.8	2.8	5	1.9	回転篦	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	静止糸切り	密	良好	淡褐色	ほぼ完全	墨書 公
3	皿	13.8	13.6	2.2	4.9	1.8	回転篦	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	静止糸切り	密	良好	赤褐色	ほぼ完全	墨書 男
4	坏	10.8	11.2	(3.7)		(3.7)	ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	赤褐色	1/8程度	
5	甕	26.2	27	(14.6)		(14.6)	縦刷毛	横刷毛		密	良	暗茶褐色	1/5程度	
6	坏			(1.6)	5	(1.1)	ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾍﾗ削り	密	良好	赤褐色	底部の一部	墨書
7	坏	11.8	12	4.2	5	3.9	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	ﾍﾗ削り	密	良好	赤褐色	5/6程度	墨書 入
8	坏	17.8	18.2	(5.3)		(5.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	横篦磨き 暗文		密	良好	淡褐色	1/4程度	内黒
9	坏			(2.8)	7.1	(2.4)	ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	回転糸切り	密	良	茶褐色	底部の一部	
10	甕	26.8	28.4	(8.4)		(8.4)	縦刷毛	横刷毛		密	良	赤茶褐色	口縁の一部	
11	須恵器 瓶？			(5.8)	4.6	(3.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	剥離）	回転糸切り 高台付	密	良好	蒼灰色	底部の一部	自然釉 3色
12	須恵器 壺or甕			(5.4)		(5.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	濃灰色		
13	須恵器 蓋	18	19	(1.7)								淡灰色		
14	皿			(1.2)		(0.8)	回転篦	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	静止糸切り			赤褐色		
15	須恵器 壺or甕			(11.0)		(11.0)	タタキ			密	良好	濃灰色		
16	須恵器 壺or甕			(9.9)		(9.9)	タタキ	タタキ		密	良好	灰褐色		
17	皿	12.4	13.1	(2.0)		(2.0)	回転篦	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	淡褐色	1/8程度	
18	須恵器 壺or甕			(7.5)			横刷毛	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密		灰色	一部	自然釉 黒
19	須恵器 壺or甕						タタキ			密 黒色粒子	良好	淡灰色	破片	自然釉 赤銅色
20	須恵器 壺or甕						タタキ			密 黒色粒子	良好	淡灰色	破片	自然釉 緑
21	須恵器 壺or甕						タタキ	タタキ 雲形		密	良好	濃灰色	破片	
22	須恵器 坏			(1.7)		(0.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り	密 黒・白色粒子	良好	蒼灰色	底部の1/2	
23	坏	14.4	14.6	(3.4)		(3.4)	篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	赤褐色	口縁の一部	
24	甕			(2.0)	6.1	(1.5)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石・雲母	良好	茶褐色	底部の一部	
25	甕			(0.9)					木葉痕	やや粗 長石・雲母	良	明茶褐色	底部の一部	
26	甕			(0.6)					木葉痕	やや粗 長石・雲母	良好	明茶褐色	底部の一部	
27	甕			(9.4)	11.2	8.9	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石・雲母	良好	茶褐色	底部の一部	
28	甕			(2.3)	10.8	(1.7)	縦刷毛	横刷毛		密 長石・雲母	良好	茶褐色	底部の一部	
29	甕			(3.2)	8.6	(2.6)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	やや粗 長石・雲母	良好	茶褐色	底部の一部	
30	坏			(2.2)	5	(1.7)	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	明茶褐色	器体下部の一部	墨書
31	坏				5.2		ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ	篦削り	密	良好	赤褐色	底部の一部	墨書
32	皿				9.4		回転篦	ロクロナデ	篦削り	やや粗	良好	茶褐色	底部の一部	
33	坏			(1.7)	4.6	(1.1)	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文		密	良好	茶褐色	底部の一部	
34	坏				8		ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	茶褐色	底部の一部	墨書
35	須恵器 坏	11	11.3	(1.7)		(1.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰色	口縁の一部	
36	坏			(1.2)	5.4	(0.8)	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	明茶褐色	底部の一部	
37	坏				6.2		ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	回転糸切り 篦削り	密	良好	暗茶褐色	底部の一部	
38	高台坏				8.8		回転篦	ロクロナデ 暗文	横回転篦 高台付	密	良好	明茶褐色	底部の一部	
39	皿				3.6		ロクロナデ	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	明茶褐色	底部の一部	
40	坏	14.6	15.3	(4.3)	8.6	(4.0)	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文		密	良好	黄褐色		
41	甕								木葉痕	密 長石・雲母	良好	茶褐色	底部の一部	見込み部 押捺痕
42	甕			(2.7)	7.4	(1.8)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	やや粗 長石・雲母	良好	茶褐色	底部の一部	
43	甕								木葉痕	やや粗 長石・雲母	良好	茶褐色	底部の一部	見込み部 押捺痕
44	須恵器 瓶？		(1.9)	6.1	(0.8)				高台貼付	密 黒・白色粒子	良好	淡灰色	底部の一部	
45	坏				4.5		ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	黄褐色	底部片	
46	坏			(1.7)	7	(1.0)	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	明茶褐色	底部の一部	

47	坏			(2.2)	6.6	(1.8)	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	黄褐色	底部の一部	
48	皿				9.2		ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	回転篦	密	良好	明茶褐色	底部の一部	
49	皿				12.4		ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	明茶褐色	底部の一部	
50	皿				12.6		ロクロナデ	ロクロナデ	回転篦	密	良好	明茶褐色	底部の一部	
51	甕			(3.4)	5.8	(2.9)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	やや粗 長石 雲母	良	暗茶褐色	底部の一部	
52	須恵器 壺or甕						タタキ	タタキ		密 白色粒子	良好	濃灰色	破片	
53	坏				6.2		ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	茶褐色	底部の一部	
54	甕	21.6	27.6	(3.8)		(3.8)	斜め刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
55	須恵器 蓋	14.8	15.8	(0.9)			ロクロナデ	ロクロナデ		密 長石	良好	暗灰色	部分片	
56	須恵器 壺or甕						タタキ			密 黒色粒子	良好	灰色	部分片	自然釉 光沢有り
57	坏			(2.1)	8.4	(1.6)	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	回転糸 篦削り	密	良好	茶褐色	部分片	
58	坏	11.0	11.9	4.4	4.4	4.0	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	茶褐色	3/ 5程度	墨書 公
59	甕	16.4	19.7	(7.9)		(7.9)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
60	須恵器 坏			(1.6)	7.6	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸	密 白色粒子	良好	灰色	底部の一部	
61	須恵器 坏				6.8				回転糸	密 白色粒子	良好	灰色	底部の一部	
62	皿				5.6		回転篦	ロクロナデ 暗文		密	良好	茶褐色	底部の一部	
63	坏			(1.7)	5.2	(1.2)	ロクロナデ 篦削り	ロクロナデ 暗文	篦削り	密	良好	茶褐色	底部の一部	
64	甕			(5.6)	10.4	(5.1)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	やや粗 長石	良好	暗茶褐色	底部の一部	

B地点　1号住居跡

		法　量(cm)					調　整							
番号	器種	口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	坏	11.4	11.6	4.7	6.4	4.3	ヘラ削り ロクロナデ	ロクロナデ 暗文	ヘラ削り	密	良好	赤褐色	3/ 4程度	墨書 智□
2	坏			(2.7)	5.8	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	密	良好	淡黄褐色	1/ 3程度	
3	坏	13.4	13.9	4.1	3.6	3.6	ロクロナデ ヘラ削り	ロクロナデ 暗文	ヘラ削り	密	良好	黄褐色	1/ 6程度	
4	坏	10.4	10.6	(3.8)		(3.3)	ロクロナデ ヘラ削り	ロクロナデ		密	良好	淡褐色	1/ 8程度	
5	坏			(3.0)	6.4	(2.4)	ロクロナデ ヘラ削り	ロクロナデ 暗文	回転糸切り ヘラ削り	密	良好	淡褐色	1/ 3程度	
6	坏			(3.8)	7.9	(3.4)	ロクロナデ ヘラ削り	ロクロナデ 暗文	ヘラ削り	密	良好	淡褐色	1/ 6程度	
7	甕			(3.9)	8.2	(3.0)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良	暗茶褐色	底部の一部	
8	甕			(2.4)	9.9	(1.8)		横刷毛		密 長石 雲母	良	赤褐色	底部の一部	
9	甕			(6.4)	6.4	(5.9)	ヘラ削り	ヘラ削り	木葉痕	密 長石微量	良好	黄褐色	底部片	相模型系
10	甕	18.1	(23.6)	(12.0)		(12.0)	ヘラ削り	ヘラ削り		密 長石微量	良好	黄褐色	口縁の一部	相模型系 9と同一個体
11	甕	18.6	24.4	(3.0)		(3.0)				やや粗 長石	良	淡赤褐色	口縁の一部	
12	甕			(3.6)	11.0	(2.8)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良好	茶褐色	底部片	
13	甕	23.4	28.0	(10.1)		(10.1)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良	黒褐色	口縁の一部	

14	甕	15.2	20.2	(7.8)		(7.5)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	暗茶褐色	口縁の一部	
15	須恵器 壺or甕			(5.2)	8.0	(4.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ			密	良好	灰色	底部の一部	内面 自然釉緑
16	須恵器 壺or甕						タタキ			密	良好	蒼灰色	破片	
17	須恵器 壺or甕						タタキ	タタキ		密 長石 雲母	良好	灰色	破片	
21	陶器	10.6	11.0	(1.8)		(1.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ			密	良好	茶褐色	口縁の一部	
22	陶器						ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良	黄白色	破片	

C地点　1号住居跡

		法			量(cm)		調	整						
番号	器種	口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	坏	15.6	15.8	(2.1)		(2.1)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	茶褐色	口縁の一部	
2	坏	13.0	13.4	(3.7)		(3.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		やや粗 雲母	良	赤茶褐色	口縁の一部	
3	坏	11.6	12.2	(2.2)		(2.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明赤褐色	口縁の一部	
4	欠番													
5	坏	15.2	15.6	(2.2)		(2.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	赤茶褐色	口縁の一部	
6	坏	11.0	11.4	(2.9)		(2.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	茶褐色	口縁の一部	
7	坏	14.0	14.4	3.4	8.0	(3.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	ﾍﾗ削り	密	良好	明茶褐色	部分片	
8	坏	8.4	9.0	(3.4)		(2.9)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	1/ 5程度	
9	坏	13.8	14.2	(3.2)	8.8	(3.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	ﾍﾗ削り	密	良好	暗茶褐色	1/ 4程度	
10	甕			(6.2)	12.2	(5.6)	縦刷毛		ﾍﾗ削り	密	良	暗茶褐色	底部の一部	
11	甕	18.0	19.2	(5.0)		(5.0)	縦刷毛	横刷毛						
12	坏	14.0	28.4	(2.9)		(2.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ							
13	坏	11.6	12.0	(1.7)		(1.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文						

C地点　2号住居跡

番号	器種	法量(cm) 口径	最大径	器高	底部径	内深	調整 器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	坏	11.9	12.6	3.5	4.2	3.4	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り	密	良好	明茶褐色	3/5程度	墨書
2	坏	13.9	14.3	5	5	4.5	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	暗黄褐色	3/4程度	内黒
3	坏	11.1	11.6	4.1	4.8	3.3	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	茶褐色	ほぼ完形	墨書
4	坏	13.6	14.4	4.6	5.1	4.1	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り 篦削り	密	良好	赤褐色	3/5程度	
5	坏	16.3	17.1	6.8	6.5	6.5	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り 篦削り	密	良	茶褐色	3/5程度	
6	坏	12.5	13.2	4	5.1	3.6	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	黄褐色	3/5程度	
7	坏	12.4	12.7	3.6	5	3.6	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り 篦削り	密	良好	明赤褐色	3/5程度	
8	坏	11.6	12	4.4	7.1	3.5	横磨き ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	磨き	密	良好	明赤褐色	1/8程度	見込み 暗文
9	坏	13.2	13.6	(4.4)		(4.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	暗赤褐色	1/8程度	
10	坏	12	12.6	4.3	4.3	4.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	無調整	密	良好	明茶褐色	1/4程度	
11	坏	15.5	16.3	(5.0)		(5.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	暗茶褐色	1/8程度	
12	坏	12.9	13.3	(4.4)		(4.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	1/8程度	
13	坏	15.2	15.8	3.7	6.7	3.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	明茶褐色	1/6程度	
14	坏	13	13.5	(3.5)		(3.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	1/8程度	
15	坏	10.8	11.3	(3.3)		(3.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	1/8程度	
16	坏			(2.6)	5.6	2.4	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	明茶褐色	1/8程度	墨書 長
17	坏	12.3	12.8	(2.3)		(2.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	1/8程度	
18	坏	14.4	15	(3.8)		(3.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	1/8程度	
19	坏	11.7	11.9	(3.1)		(3.1)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 横磨き	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	明茶褐色	細片	
20	高台坏	17.2	17.4	5.1	8.5	5	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	茶褐色	1/4程度	
21	坏	13.7	13.9	4.8	3.6	4.5	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	暗茶褐色	破片	内黒
22	坏	13.1	13.5	(3.0)		(3.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	暗茶褐色	細片	
23	坏			(1.5)	4.4		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	暗茶褐色	破片	
24	坏			(2.8)	4.2	(2.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	暗茶褐色	1/8程度	
25	坏	10.8	11.1	(3.5)		(3.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 横磨き	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	茶褐色	破片	
26	坏	8.7	9	(2.0)		(2.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	茶褐色	細片	
27	坏	16.3	16.8	(2.5)		(2.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	暗褐色	破片	内黒
28	坏	11.3	11.9	(2.7)		(2.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	暗茶褐色	細片	墨書ｱﾘ
29	坏	14.1	14.3	(2.8)		(2.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	破片	
30	坏	10	10.2	(2.5)		(2.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	破片	
31	坏	12.9	13.1	(2.3)		(2.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	破片	
32	坏	9.5	9.8	(3.2)		(3.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	破片	
33	坏			(2.1)	4.9	(1.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	暗茶褐色	底部片	
34	坏	13.3	13.8	(3.0)		(3.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 横磨き	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	細片	
35	坏	8.4	8.6	(3.5)		(3.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	明茶褐色	破片	
36	坏	11.8	12.2	(4.7)		(4.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 横磨き	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	明茶褐色	破片	
37	高台坏			(1.4)	7.0	(0.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	明茶褐色	底部片	見込み部 にも暗文
38	坏	16.7	17.3	5.4	6.4	5.1	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良	暗茶褐色	1/4程度	
39	坏			(2.4)	3	(1.9)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良	明茶褐色	底部片	墨書 主
40	坏	13	13.7	(3.0)		(3.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良	明茶褐色	口縁片	墨書ｱﾘ
41	坏	9.6	9.7	(3.1)		(3.1)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	口縁片	

42	坏	11.8	12.6	3.9	4.2	3.5	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り 篦削り	密	良好	明茶褐色	1/4程度	
43	坏	12.6	13.0	5.0		(4.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	赤褐色	破片	
44	坏	13.4	13.5	(3.4)		(3.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	口縁片	
45	坏	13.8	14.0	(3.2)		(2.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	茶褐色	口縁片	
46	羽釜	15.8	22.5	(5.0)		(5.0)	刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良	暗茶褐色	口縁片	
47	羽釜	26.2	34.5	(5.8)		(5.8)	横刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良	茶褐色	口縁片	
48	甕	15.8	16.2	(3.7)		(3.7)	縦刷毛	篦ナデ		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁片	
49	甕			(7.3)	8.6	(6.4)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良	茶褐色	底部片	見込み部 押捺痕
50	甕			(8.2)	10.2	(7.3)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良	茶褐色	底部片	
51	甕			(3.6)	8.4	(2.8)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良	茶褐色	底部片	見込み部 押捺痕
52	甕			(12.7)	10.6	(12.0)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良	明茶褐色	底部片	
53	甕			(5.4)	9	(4.7)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石	良	茶褐色	底部片	
54	甕			(2.7)	13	(2.1)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良	茶褐色	底部片	
55	甕			(2.7)	8.1	(2.0)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良	暗茶褐色	底部片	
56	甕			(2.1)	7.6	(1.7)	縦刷毛		木葉痕	密 長石 雲母	良	茶褐色	底部片	
57	甕			(3.1)	5.2	(2.8)	削り	削り	木葉痕 磨き	密	良	明茶褐色	底部片	相模駿東 非甲斐型
58	坏	14.4	15.2	(3.0)		(2.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	茶褐色	口縁片	墨書
59	坏	8.4	9.2	(3.5)		(3.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	茶褐色	口縁片	
60	甕	15.4	17.2	(5.6)		(5.6)	縦刷毛	横刷毛		やや粗 長石 雲母	良	赤褐色		
61	須恵器 甕or壺			(8.6)		(8.6)				密	良好	灰褐色	破片	
62	須恵器 甕or壺			(6.6)		(6.6)				密	良好	灰褐色	破片	
63	須恵器 甕or壺			(5.7)		(5.7)	タタキ	タタキ		密	良好	灰褐色	破片	
64	須恵器 甕or壺			(9.6)		(9.6)	タタキ	タタキ		密	良好	淡灰褐色	破片	
65	須恵器 甕or壺			(10.0)		(10.0)	タタキ	タタキ		密	良好	灰褐色	破片	
66	須恵器 甕or壺			(11.7)		(11.7)	タタキ	タタキ		密	良好	灰褐色	破片	
67	須恵器 甕or壺			(6.4)		(6.4)	タタキ	タタキ		密	良好	灰褐色	破片	
68	須恵器 甕or壺			(3.0)		(3.0)	タタキ			密	良好	白灰色	破片	
69	須恵器 甕or壺			(5.9)		(5.9)	タタキ			密	良好	灰褐色	破片	
70	須恵器 甕or壺			(4.3)		(4.3)	タタキ			密	良好	濃灰褐色	破片	
71	皿	12.2	13	2.7	4	2.3	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	赤褐色	完形	墨書
72	皿	11.2	12.6	2.4	4	1.9	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	赤褐色	1/2程度	墨書 長
73	坏						ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	赤褐色	1/3程度	墨書
74	皿	12.0	13.2	2.6	4.0	2.3	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	淡褐色	1/4程度	墨書
75	欠番													
76	皿	10.6	12.6				ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	赤褐色	1/3程度	
77	皿				2.8		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	淡褐色	破片	墨書
78	甕	32.8	34	(5.0)		(5.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
79	甕	27.6	28.4	(4.2)		(4.2)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
80	甕	37	37.8	(4.0)		(4.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	暗褐色	口縁の一部	
81	甕	32.2	35.4	(4.0)		(4.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
82	甕	30.2	31.6	(4.5)		(4.5)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
83	甕	26	27	(3.8)		(3.8)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
84	甕	14.4	15.4	(5.0)		(5.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	

85	甕	18.2	18.6	(3.5)		(3.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密 長石	良好	茶褐色	口縁の一部	
86	甕	17.6	18.2	(4.0)		(4.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
87	甕	20.4	21	(4.0)		(4.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
88	甕	25.6	26.4	(6.6)		(6.6)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
89	甕	24.4	25	(3.0)		(3.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	赤褐色	口縁の一部	
90	甕	25.0	26.8	(2.3)		(2.3)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
91	甕	22.2	27.0	(2.3)		(2.3)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
92	皿	12.6	13.2	2.3			ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	静止糸切り	密	良好	明茶褐色	1/5程度	
93	甕	26.4	27.0	(4.2)		(4.2)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
94	甕	29.2	29.6	(4.5)		(4.5)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
95	甕	24.4	25.2	(3.9)		(3.9)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
96	甕	23.6	24.4	(4.0)		(4.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
97	甕	17.4	18.6	(4.0)		(4.0)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
98	甕	19.2	19.8	(3.6)		(3.6)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
99	甕			(2.0)	6.6	(1.7)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良好	茶褐色	底部の一部	
100	須恵器 甕or壷			(3.5)		(3.5)	タタキ			密	良好	灰褐色	破片	
101	須恵器 甕or壷			(4.2)		(4.2)	タタキ			密	良好	濃灰褐色	破片	
102	須恵器 蓋			(1.6)		(1.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰褐色	破片	
103	須恵器 蓋			(0.9)		(0.9)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	白灰色	部分片	
104	須恵器 蓋			(1.7)		(1.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰褐色	部分片	
105	須恵器 蓋			(1.7)		(1.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰褐色	部分片	
106	須恵器 蓋			(2.1)		(2.1)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰褐色	部分片	
107	須恵器 蓋			(0.8)		(0.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰褐色	部分片	
108	欠番													
109	須恵器 坏			(2.5)		(2.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰褐色	部分片	
110	須恵器 坏			(1.8)	5.8	(0.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り	密 長石	良好	蒼灰色	底部片	
111	須恵器 高台坏			(2.3)	9.4	(0.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ			密 長石	良好	灰白色	底部片	
112	須恵器 壷	20.8	22.8	(2.8)		(2.8)				密	良	灰白色	口縁片	
113	須恵器 坏			(1.0)	5.4	(1.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良	灰白色	底部片	
114	須恵器 甕or壷						タタキ			密	良	灰白色	破片	
115	須恵器 甕or壷						タタキ	タタキ		やや粗	良	緑灰色	破片	
116	須恵器 壷	20.0	24.0	(5.0)		(5.0)				密	良	淡灰色	口縁片	
117	須恵器 甕or壷						タタキ			やや粗	良好	濃灰色	破片	
118	須恵器 甕or壷									密	良好	灰白色	破片	
119	須恵器 甕or壷						タタキ			密	良好	暗茶褐色	破片	
120	須恵器 甕or壷						タタキ			密	良好	黒灰色	破片	
121	須恵器 蓋	10.8	13.2	(1.2)		(5.0)		ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	濃灰色	破片	
122	須恵器 坏	12.6	13.0	(2.5)		(2.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	蒼灰色	破片	
123	須恵器 甕or壷	19.4	20.0	(2.5)		(2.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰白色	口縁片	
124	甕			(1.8)	7.7	(1.3)				密 長石 雲母	良	明茶褐色	底部片	
125	甕			(2.3)	11.1	(1.6)				密 長石 雲母	良	明茶褐色	底部片	見込み部 押捺痕
126	坏	16.8	17.0	5.6	5.8	5.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 箆削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	口縁片	
127	坏	12.8	26.0	(3.6)		(3.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 箆削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密		茶褐色	口縁片	
128	甕			(1.7)	11.2	(1.7)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母		暗茶褐色	底部片	
129	甕			(2.3)	8.6	(2.3)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母		暗茶褐色	底部片	

C地点　3号住居跡

番号	器種	法量(cm) 口径	最大径	器高	底部径	内深	調整 器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	坏	12.8	13.0	(3.6)		(3.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	明茶褐色	口縁の一部	
2	坏	8.8	9.0	(3.6)		(3.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良	暗茶褐色	口縁の一部	
3	坏	12.8	13.0	(3.5)		(3.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	淡褐色	口縁の一部	
4	坏	9.6	9.8	(2.4)		(2.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	赤茶褐色	口縁の一部	
5	坏	13.2	13.4	(4.6)		(4.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	暗赤褐色	1/ 4程度	
6	坏			(1.1)		(0.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	静止糸切り	密	良好	茶褐色	底部の一部	
7	坏	11.4	11.8	(3.5)		(3.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		密	良好	明茶褐色	口縁の一部	
8	坏	7.2	7.4	(2.4)		(2.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	口縁の一部	
9	坏	6.8	7.0	(2.0)		(2.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	口縁の一部	
10	坏	8.8	9.2	(1.2)		(1.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	赤茶褐色	口縁の一部	
11	坏			(1.0)	6.0	(0.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	回転糸切り	密	良好	茶褐色	底部の一部	
12	坏			(1.1)	7.4	(0.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾍﾗ削り	やや粗	良好	赤褐色	底部の一部	
13	坏	14.0	14.2	(1.2)		(1.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		やや粗	良好	暗赤褐色	口縁の一部	
14	坏	9.6	10.2	(1.9)		(1.9)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	淡褐色	口縁の一部	
15	坏	10.4	10.8	(2.5)		(2.5)	剥離)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	1/ 4程度	
16	須恵器 坏	11.6	12.2	3.9	7.0	3.2	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り	密	良好	濃灰色	1/ 3程度	
17	須恵器 坏			(2.2)	8.0	(1.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り	密	良好	灰褐色	底部の一部	高台付き
18	須恵器 坏	7.6	7.8	(2.2)		(2.2)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	淡灰色	口縁の一部	
19	須恵器 坏	12.0	12.4	(2.8)		(2.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	濃灰色	口縁の一部	
20	須恵器 坏						ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	灰褐色	口縁の一部	
21	坏	11.2	11.6	4.1	6.6	3.6	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾍﾗ削り	密	良好	茶褐色	2/ 3程度	墨書
22	甕	24.6	25.8	(13.6)		(13.6)	縦刷毛	横刷毛		密 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
23	甕			(2.1)	6.3	(2.9)			木葉痕	密 赤色粒子	良好	暗褐色	底部の一部	
24	甕	22.2	22.8	(4.1)		(4.1)				密	良好	明赤褐色	口縁の一部	
25	甕	24.4	25.4	(4.7)		(4.7)	縦刷毛			やや祖 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
26	甕			(4.3)	7.6	(3.5)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	やや祖 長石 雲母	良好	茶褐色	口縁の一部	
27	坏	13.4	13.6	(4.8)		(4.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾐｶｷ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文		やや祖	良好	明茶褐色	口縁の一部	

D地点　1号住居跡

番号	器種	法量(cm) 口径	最大径	器高	底部径	内深	調整 器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	備考
1	坏	10.6	11.2	3.7	4.8	3.5	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り 篦削り	密	良好	茶褐色	1/4程度	
2	坏	12.2	12.8	4.2	3.9	3.8	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	篦削り	密	良好	明茶褐色	ほぼ完全	
3	坏	11.8	12.2	4.1	5.1	3.8	篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	静止糸切り	密	良好	赤褐色	ほぼ完全	墨書人
4	坏	13.4	14	(5.5)		(5.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	暗文		密	良好	暗茶褐色	1/5程度	内黒
5	坏	12.2	12.6	3.2	5.5	2.9	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	暗文	静止糸切り	密	良好	淡褐色	1/3程度	内黒
6	坏	15.6	16	(3.5)		(3.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	赤褐色	1/8程度	内黒
7	皿	12.6	13	(3.4)	4.3	(3.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	1/4程度	
8	皿	13.2	13.6	2.9	4.1	2.6	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り 篦削り	密	良好	淡褐色	3/4程度	墨書人
9	皿	12.4	12.8	2.3	5	1.9	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 篦削り	暗文	篦削り	密	良好	黄褐色	5/6程度	内黒
10	甕	21.4	27.2	(8.2)		(8.2)	縦刷毛	横刷毛		密 雲母	良	暗茶褐色	口縁の一部	
11	皿	14.6	15	(1.9)		(1.9)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	口縁の一部	
12	坏	16.4	16.7	(3.0)		(3.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	暗文		密	良好	暗茶褐色	口縁の一部	
13	甕			(2.8)	9.8	(2.4)	縦刷毛	横刷毛		密	良好	赤褐色	底部の一部	
14	甕			(3.0)	6.6	(1.8)	縦刷毛	横刷毛		密	良	暗茶褐色	底部の一部	
15	甕			(1.1)	8	(0.2)				密	良	茶褐色	底部	
16	甕			(2.0)	9.8	(1.5)	縦刷毛	横刷毛		密	良	暗茶褐色	底部の一部	
17	甕			(5.5)	9.6	(5.2)	縦刷毛	横刷毛		密	良好	赤茶褐色	底部の一部	
18	甕			(4.0)	10	(3.3)	縦刷毛	横刷毛		密	良	暗茶褐色	底部の一部	
19	甕	18.6	23.6	(4.8)		(4.8)	縦刷毛			密 雲母	良	暗茶褐色	口縁の一部	
20	甕			(3.6)	6.2	(3.0)		横刷毛		密	良	暗茶褐色	底部の一部	
21	坏	11.6	12	(2.3)	6.2	(2.0)	篦削り	暗文	篦削り	密	良好	黄褐色	1/4程度	内黒
22	坏	12.8	13	(3.0)		(2.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	暗文		密	良好	茶褐色	口縁の一部	
23	坏	8.8	9	(2.0)	5.8	(1.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り	密	良好	茶褐色	1/4程度	内黒
24	皿	13.6	14.2	(3.0)	5.5	(2.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	静止糸切り	密	良好	赤茶褐色	1/3程度	
25	甕			(3.0)	8.6	(2.0)	縦刷毛			密	良	暗黄褐色	底部の一部	
26	甕			(1.5)	7.8	(0.3)				やや粗 雲母	良	暗茶褐色	底部の一部	
27	甕			(2.4)	8.6	(1.6)	横刷毛			密	良	黒褐色	底部の一部	
28	甕	10.8	13.4	(4.1)		(4.1)	ﾐｶｷ	ﾐｶｷ		密	良好	暗黄褐色	口縁の一部	
29	甕	26.4	30.6	(14.6)		(14.6)	縦刷毛	横刷毛		やや粗	良好	赤茶褐色	口縁～胴部	
30	坏	7.6	7.8	(2.0)	3.4	(1.5)	篦削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り 篦削り	密	良好	明赤茶褐色	1/3程度	
31	甕			(1.9)	8.4	(1.5)			静止糸切り	粗	良	暗茶褐色	底部の一部	
32	須恵器 壺or甕			(20.4)		(20.4)	タタキ			密	良好	濃灰色	破片	
33	須恵器 壺or甕			(7.0)		(7.0)				密	良好	灰褐色	破片	
34	須恵器 壺or甕			(3.8)		(3.8)				密	良好	灰褐色	破片	
35	須恵器 皿	13.2	13.4	(4.1)		(4.1)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密 長石	良	灰褐色	口縁の一部	
36	甕			(2.5)	9	(1.8)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密	良好	赤褐色	底部の一部	
37	甕	24	24.8	(6.6)		(6.6)	縦刷毛			密	良好	暗茶褐色	口縁の一部	
38	甕	14	21.2	(3.6)		(3.6)	縦刷毛	横刷毛		密	良好	赤茶褐色	口縁の一部	
39	甕			(2.0)	6.6	(1.4)	縦刷毛		木葉痕	やや粗 雲母	良	淡褐色	底部の一部	
40	甕			(4.4)	7.2	(3.8)	縦刷毛	横刷毛	木葉痕	密 長石 雲母	良好	赤褐色	底部の一部	
41	須恵器 壺or甕			(4.8)		(4.5)	タタキ	タタキ		密	良好	灰色	破片	自然釉
42	甕			(2.7)	11.2	(2.7)							底部片	
43	須恵器 壺or甕			(6.1)									破片	
44	須恵器 壺or甕			(7.8)									破片	

A地点　土坑

番号	器種	法量(cm) 口径	最大径	器高	底部径	内深	調整 器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	土坑名 備考
1	皿	11.4	12.8	(2.8)		(2.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良	赤茶褐色	1/3程度	A76土 墨書
2	須恵器 壺or甕			(3.5)	8.2	(1.9)			回転糸切り	密	良好	灰褐色	底部の一部	A84土
3	須恵器 壺or甕	38.8	42.8	(6.3)		(6.3)				密	良好	濃灰色	口縁の一部	A84土
4	須恵器 壺or甕	33.2	36.6	(2.8)		(2.8)				密	良好	黒灰色	口縁の一部	A84土
5	須恵器 壺or甕	25.6	30.6	(8.5)		(8.5)				密	良好	灰褐色	口縁の一部	A84土
6	須恵器 壺or甕			(3.5)		(3.5)	タタキ	タタキ		密	良好	赤褐色	破片	A84土
7	須恵器 壺or甕			(5.0)		(5.0)	タタキ	タタキ		密	良好	淡褐色	破片	A48土
8	須恵器 壺or甕			(3.8)		(3.8)	タタキ	タタキ		密	良	茶褐色	破片	A88土
9	須恵器 壺or甕			(4.4)		(4.4)	タタキ			密	良	赤茶褐色	破片	A84土
10	甕			(3.7)	10.0	(3.7)		横刷毛	木葉痕				底部片	A15土

C地点　土坑

番号	器種	法量(cm) 口径	最大径	器高	底部径	内深	調整 器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	土坑名 備考
1	坏	8.6	9.4	(2.7)		(2.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	淡褐色	口縁の一部	C28土
2	坏	11.4	12.2	(2.4)		(2.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	赤茶褐色	口縁の一部	C28土
3	坏	12.0	12.8	(2.6)		(2.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	茶褐色	口縁の一部	C28土
4	坏	12.8	13.4	(2.5)		(2.5)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	明茶褐色	口縁の一部	C28土
5	坏			(1.9)	5.0	(1.4)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾍﾗ削り	密 雲母	良好	淡褐色	底部の一部	C28土
6	坏	12.0	12.8	(2.6)		(2.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	赤茶褐色	口縁の一部	C8土
7	坏			(1.1)	6.6	(0.6)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾍﾗ削り	密	良好	茶褐色	底部の一部	C19土
8	坏			(1.3)	6.2	(1.0)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾍﾗ削り	密 長石	良好	茶褐色	底部の一部	C28土
9	皿	12.0	13.6	(1.7)		(1.7)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	赤褐色	口縁の一部	C28土
10	甕	16.0	19.4	(2.7)		(2.7)	縦刷毛	横刷毛		密	良好	暗茶褐色	口縁の一部	C28土
11	甕			(2.7)	9.6	(2.7)		横刷毛		やや祖	良好	暗茶褐色	底部の一部	C28土
12	甕	19.0	23.4	(3.7)		(3.7)	縦刷毛	横刷毛	剥離)	密	良好	暗茶褐色	口縁の一部	C28土
13	甕	24.2	28.4	(2.4)		(2.4)		横刷毛		密	良好	茶褐色	口縁の一部	C28土
14	甕			(2.8)	9.0	(2.8)				やや祖 長石	良好	暗茶褐色	底部の一部	C16土
15	須恵器 蓋	16.2	17.2	(2.3)		(2.3)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ			密	良好	灰褐色	口縁の一部	C19土

A地点　溝状遺構

番号	器種	法量(cm) 口径	最大径	器高	底部径	内深	調整 器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	溝名 備考
1	坏			(1.8)	5.2	(1.8)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ ﾍﾗ削り	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ 暗文	静止糸切り	やや粗	良好	淡茶褐色	底部の一部	3号溝
2	須恵器 壺or甕			(3.1)		(3.1)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ		密	良好	蒼灰色	破片	4号溝
3	須恵器 壺or甕			(4.7)	19.0	(3.9)	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	ﾛｸﾛﾅﾃﾞ	回転糸切り 高台付	密	良好	灰褐色	底部の一部	4号溝
4	須恵器 高台坏			(1.7)	6.2	(1.7)			削り出し	密	良好		底部片	3号溝
5	甕	20.0	20.2	(3.7)		(3.5)				密	良好		口縁の一部	3号溝 非甲斐型

C地点　竪穴状遺構

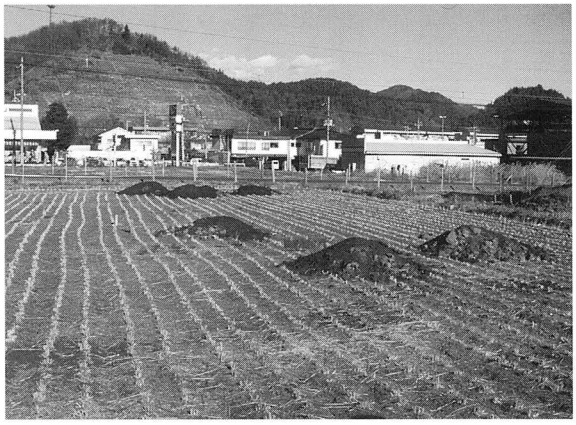
番号	器種	法量(cm) 口径	最大径	器高	底部径	内深	調整 器体部 表面	器体部 裏面	底部	胎土	焼成	色調	残存状況	遺構名 備考
1	甕	18.4	23.6	(2.4)		(2.4)	横刷毛	横刷毛		密	良好	明茶褐色	口縁の一部	2号竪穴
2	須恵器蓋			(1.7)		(1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ		密	良好	黒褐色	破片	1号竪穴

出土鉄製品一覧

番号	器種	法量(cm)		備考・特記事項
1	刀子	全長	(13.0)	刃部長:　7.1cm
		最大幅	1.1	着柄部: 肥厚
		厚さ	0.4	
2	紡錘車	全長	21.3	車部　直径：4.2cm　厚さ：0.4cm
		最大幅	4.2	軸部　直径：0.4cn
		厚さ	-	
3	鑿	全長	14.5	基部に着柄用の突起部あり
		最大幅	1.6	刃部長:　1.8cm
		厚さ	0.5　1.0	
4	鏃	全長	15.2	断面：方形
		最大幅	(3.5)	尾部幅減少
		厚さ	0.4	羽部片方欠損

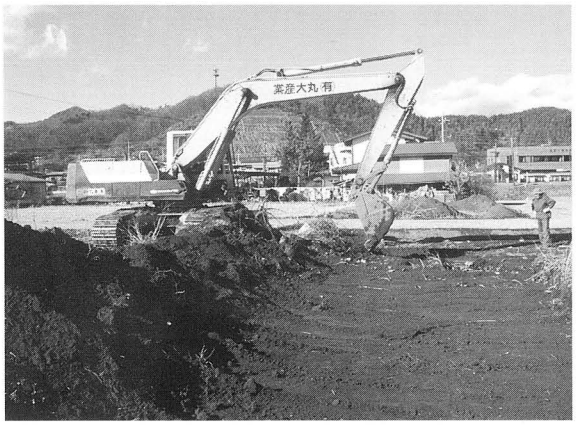
写 真 図 版

A地点１号掘立柱建物跡

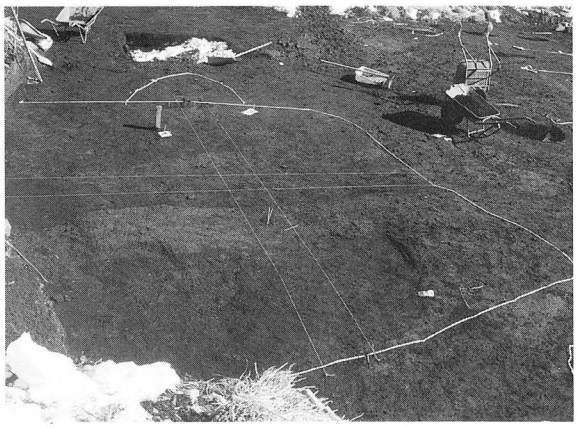


Ａ地点調査前風景

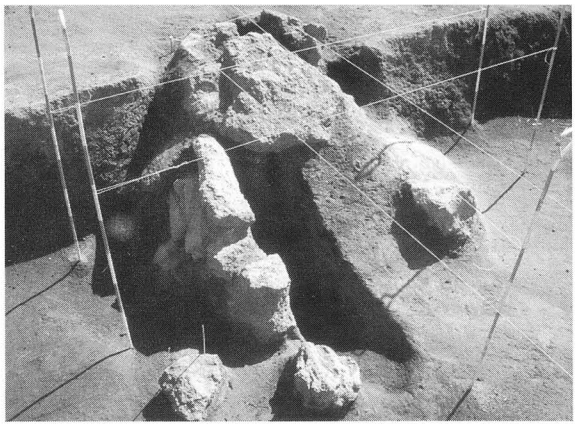
Ａ地点表土剥ぎ



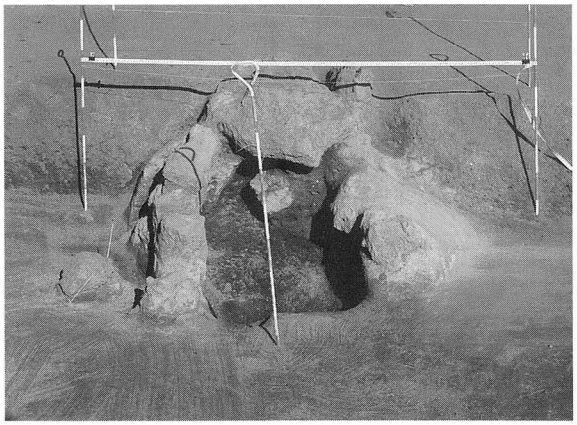
Ｃ地点表土剥ぎ



Ａ１住プラン確認

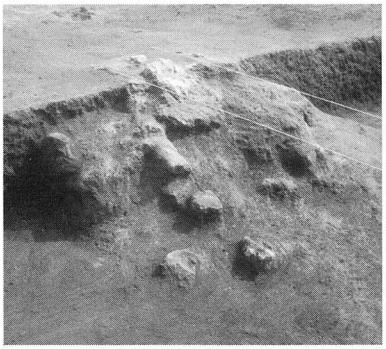


Ａ１住カマド①

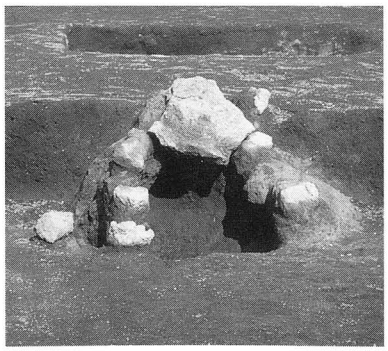


Ａ１住カマド②

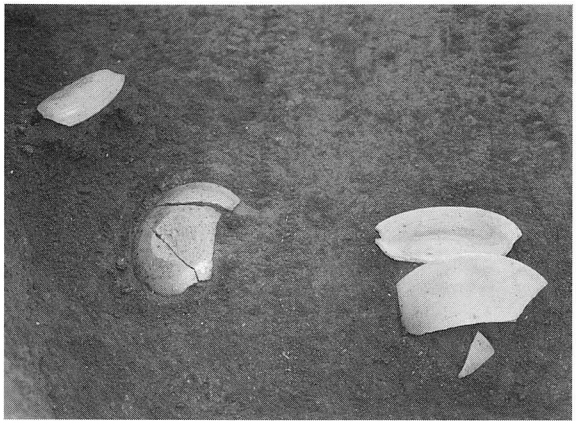
Ａ１住調査風景



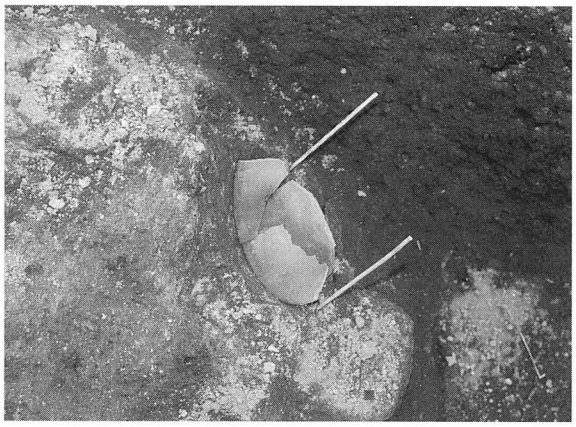
Ａ１住カマド検出状況



Ａ１住カマド③



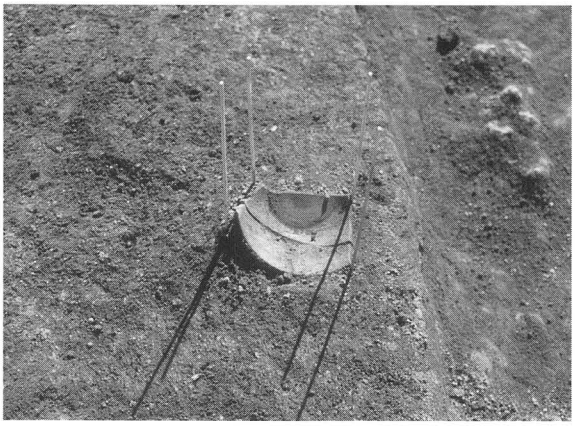
Ａ１住遺物出土状況①



Ａ１住遺物出土状況②

Ａ１住完掘状況

Ｂ１住検出状況

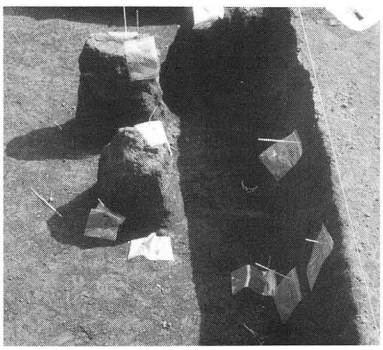


Ｂ１住遺物出土状況

Ｂ１住完掘状況

Ｂ１住カマド検出状況

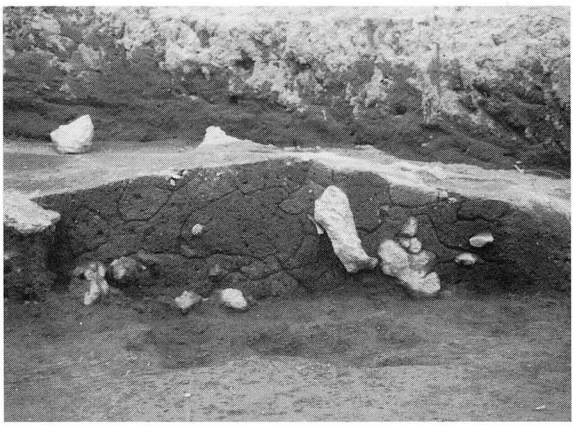
Ｂ１住カマド断面



Ｃ１住遺物出土状況

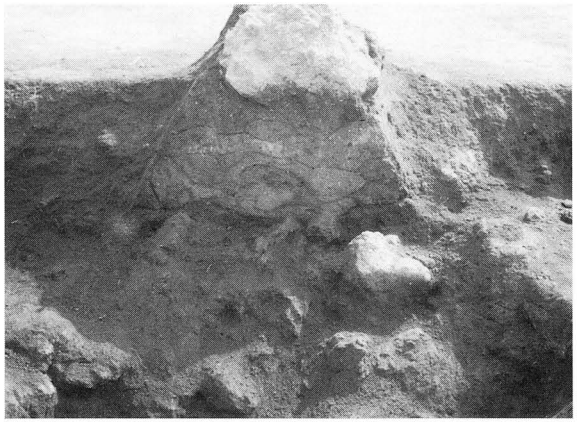
Ｃ１住完掘状況

Ｃ２住２号カマド検出状況

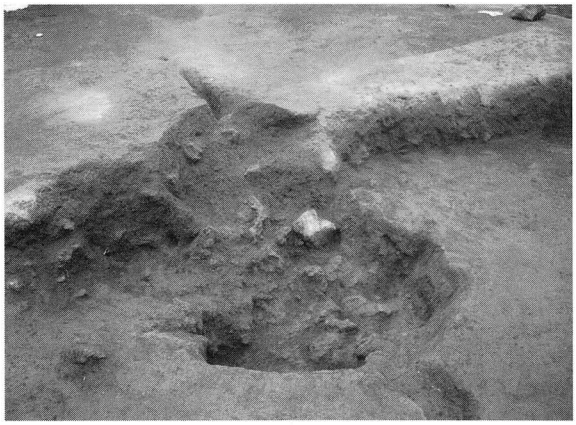


Ｃ２住２号カマド断面

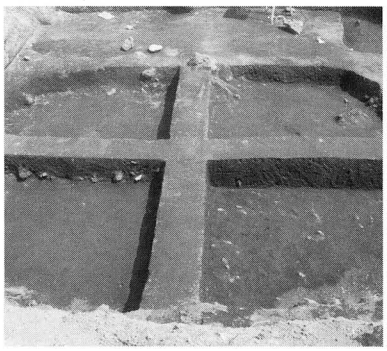
Ｃ２住２号カマド堀り方



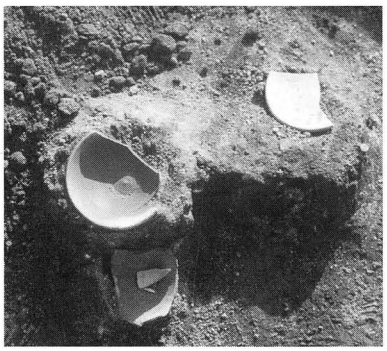
Ｃ２住１号カマド断面



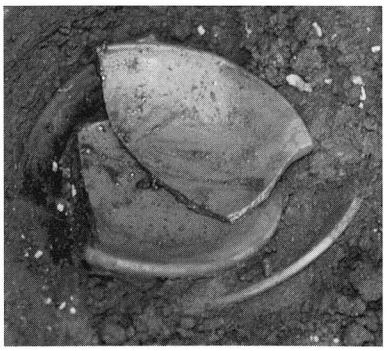
Ｃ２住１号カマド堀り方



Ｃ２住覆土セクション



Ｃ２住遺物出土状況①

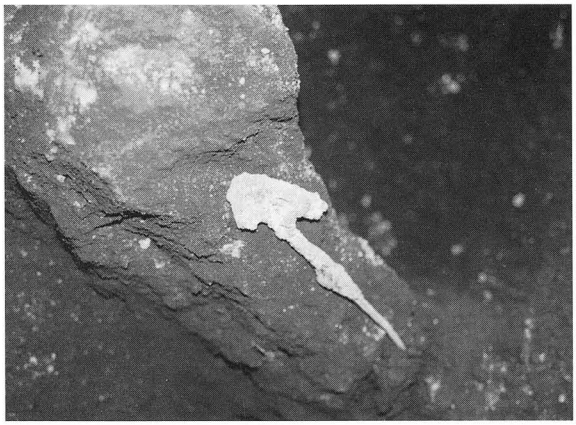


Ｃ２住遺物出土状況②

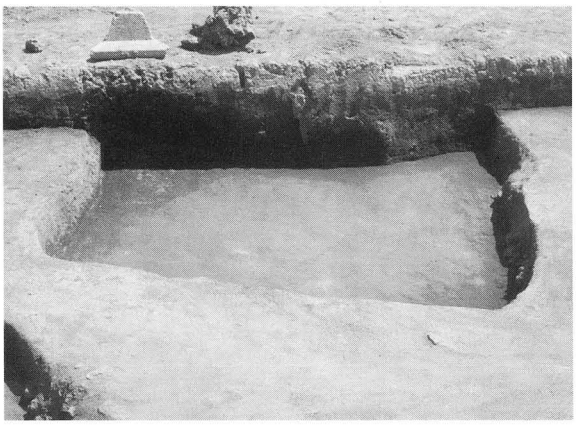
Ｃ２住遺物出土状況③

Ｃ２住遺物出土状況④

Ｃ２住完掘状況



Ｃ３住鉄鏃出土状況



Ｃ３住完掘状況

Ｄ１住検出状況

Ｄ１住カマド検出状況

Ｄ１住カマド構造

Ｄ１住遺物出土状況①

Ｄ１住遺物出土状況②

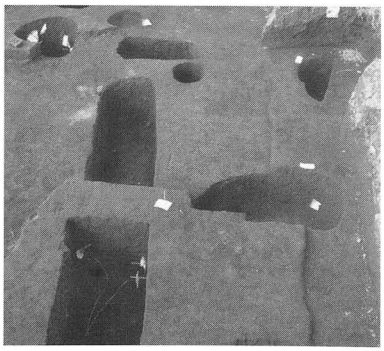
Ｄ１住遺物出土状況③

Ｄ１住遺物出土状況④

Ａ地点プラン確認

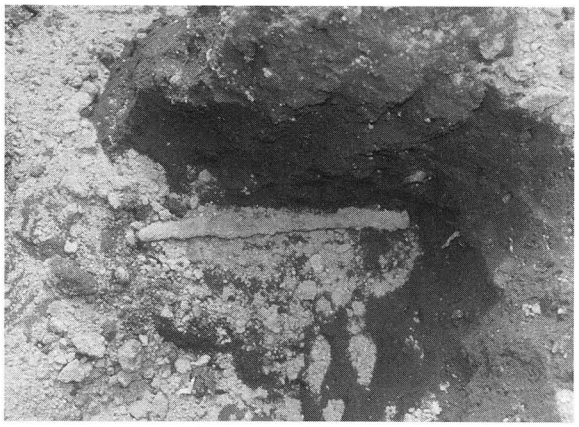
Ａ地点調査風景

Ａ地点土坑群①



Ａ地点土坑群②

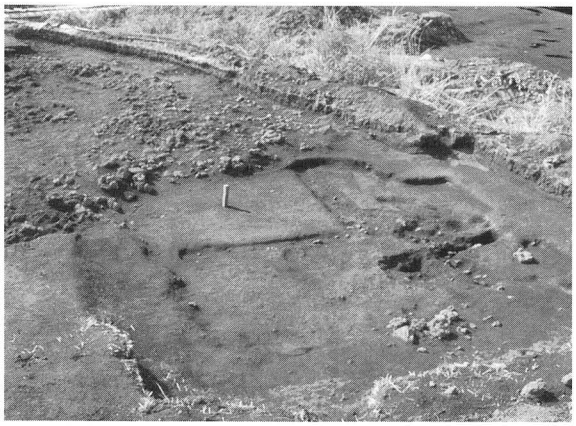
A地点２号掘建立柱建物跡



C地点鑿出土状況

A地点近景①

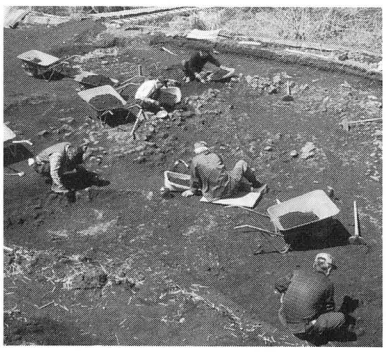
A地点近景②



B地点近景

C地点近景

C地点土坑群

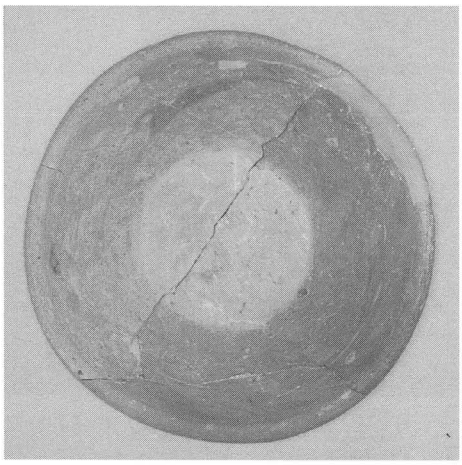


B地点調査風景

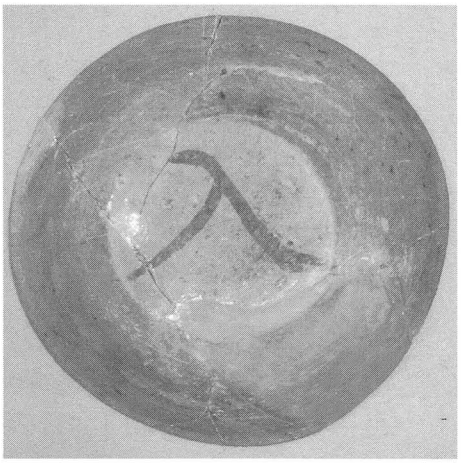
C地点調査風景

Ａ１号住　１

Ａ１号住　７

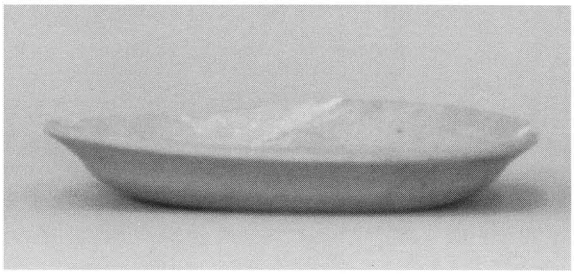


Ａ１号住　１（底部墨書）



Ａ１号住　７（底部墨書）

Ａ１号住　２

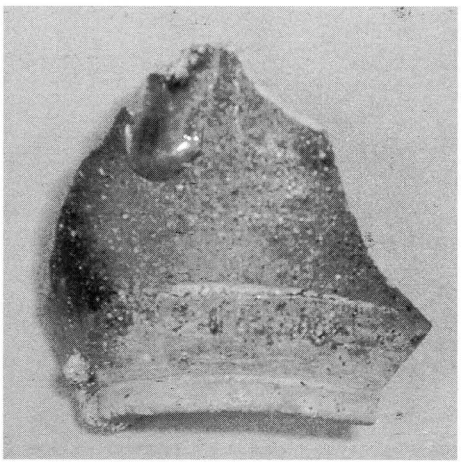


Ａ１号住　３

Ａ１号住　２（底部墨書）

Ａ１号住　３（底部墨書）

Ａ１号住　5

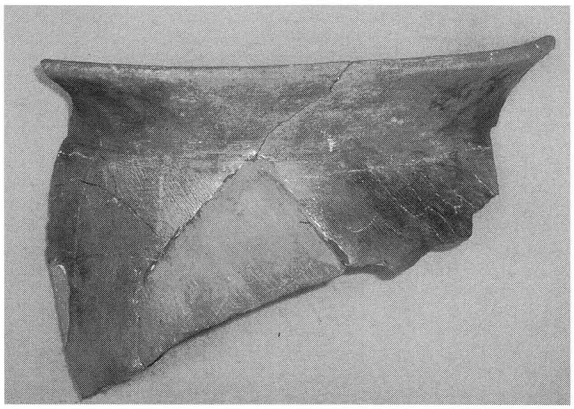


Ａ１号住　11

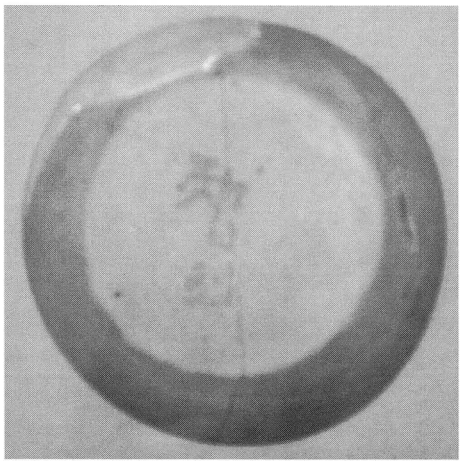
Ａ１号住　58

Ａ１号住　出土土器

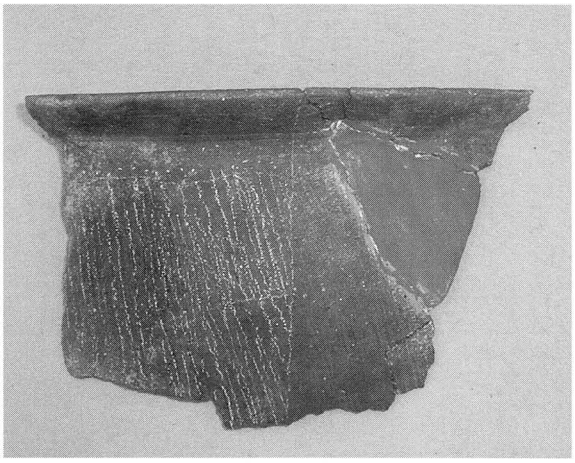
Ｂ１号住　1



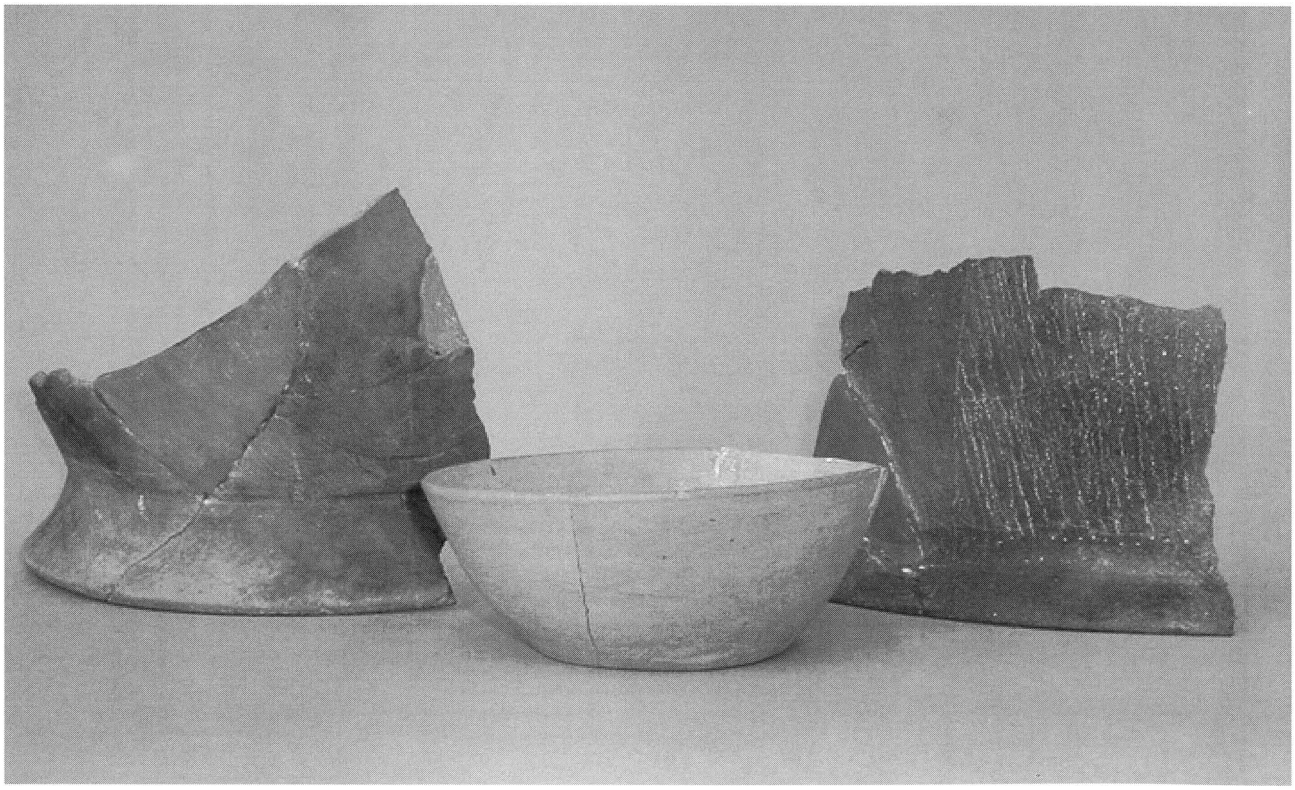
Ｂ１号住　10



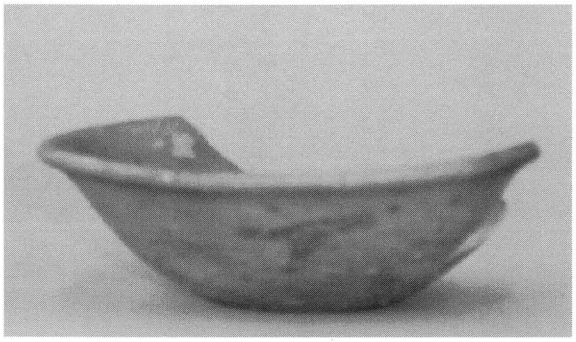
Ｂ１号住　1（底部墨書）



Ｂ１号住　13



Ｂ１号住　出土土器

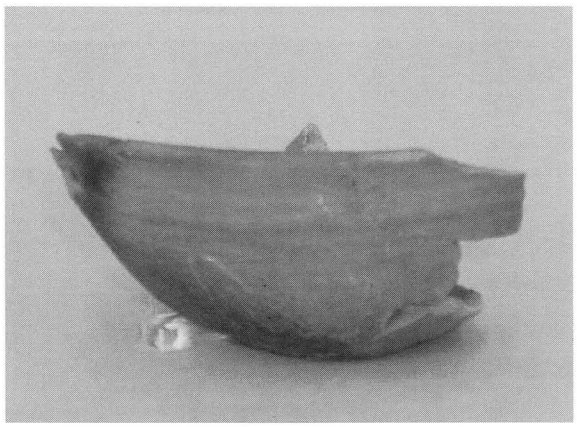


C２号住　1

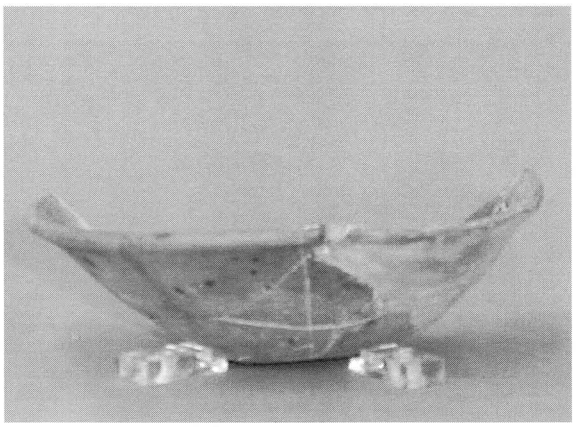
C２号住　2

C２号住　3

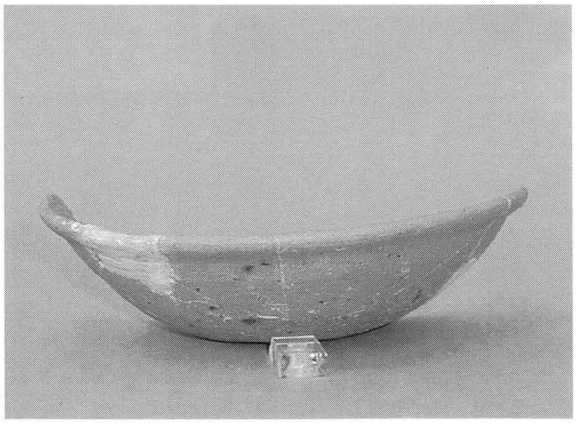
C２号住　4



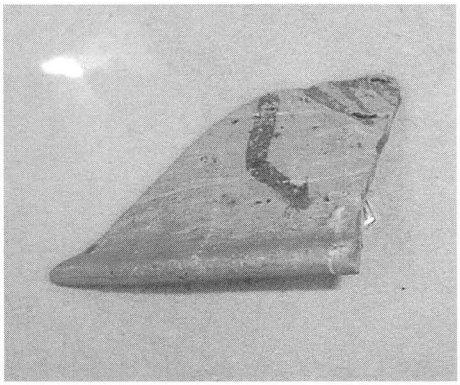
C２号住　5



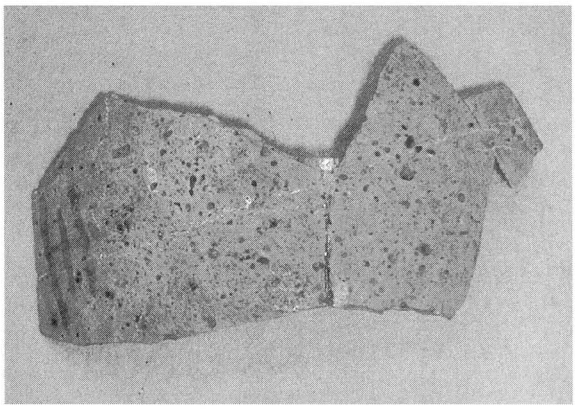
C２号住　6



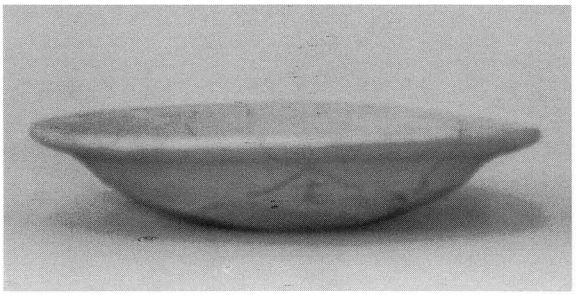
C２号住　7



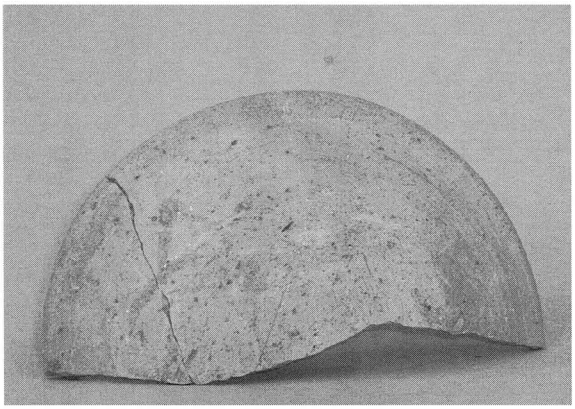
C２号住　58（墨書）



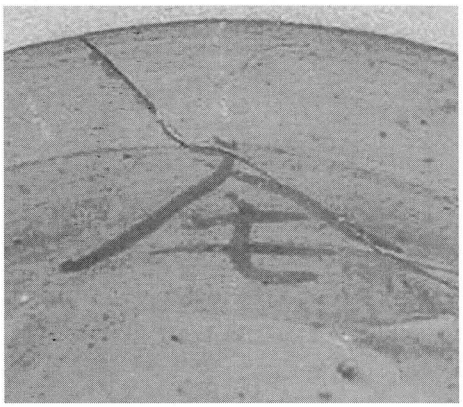
C２号住　39（墨書）



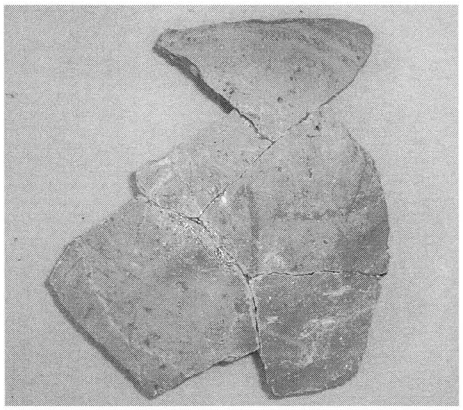
C２号住　71



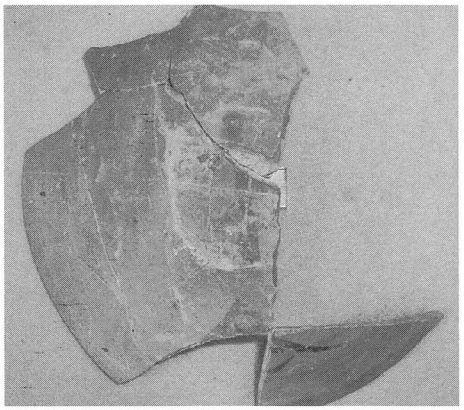
C２号住　72（墨書）



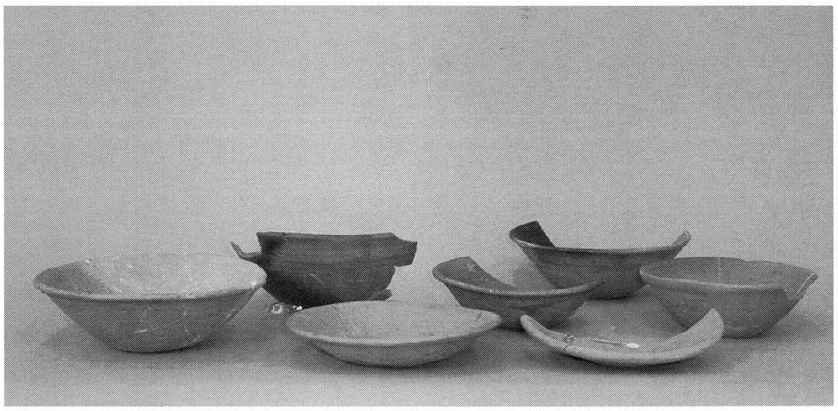
C２号住　71（墨書）



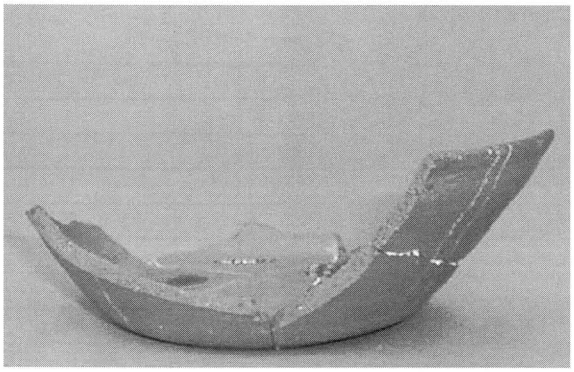
C２号住　73（墨書）



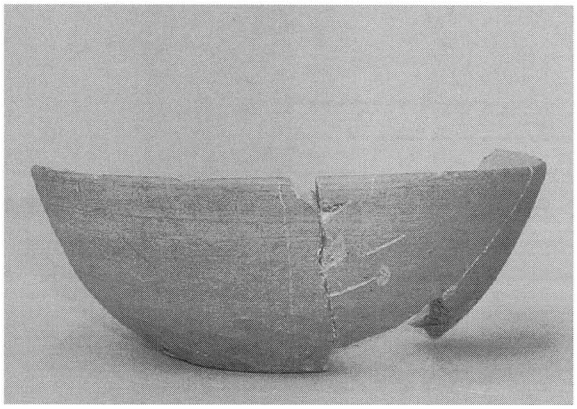
C２号住　74（墨書）



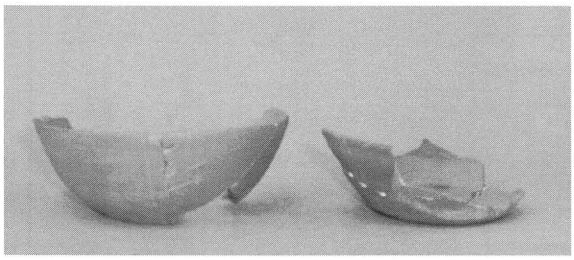
C２号住　出土土器



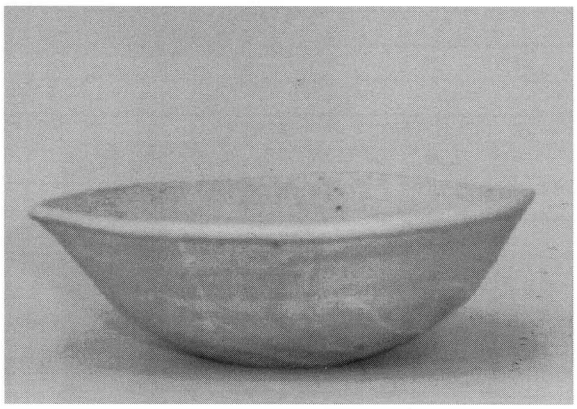
Ｃ３号住　16（須恵器）



Ｃ３号住　21



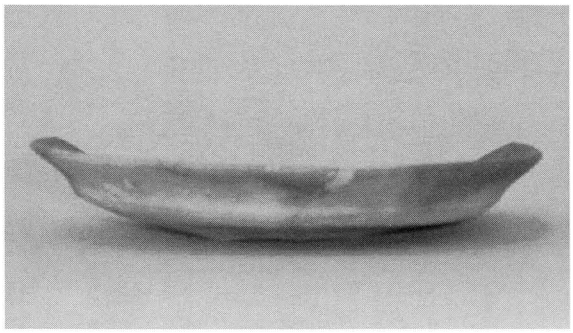
Ｃ３号住　出土土器



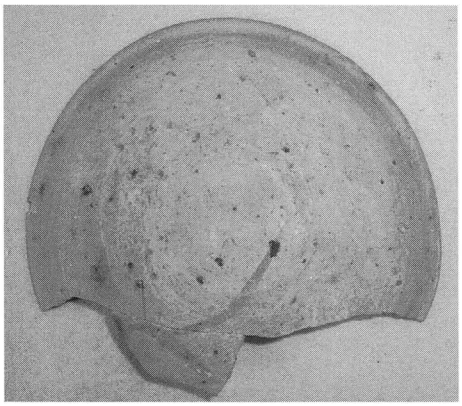
Ｄ１号住　2

Ｄ１号住　3（墨書）

Ｄ１号住　8

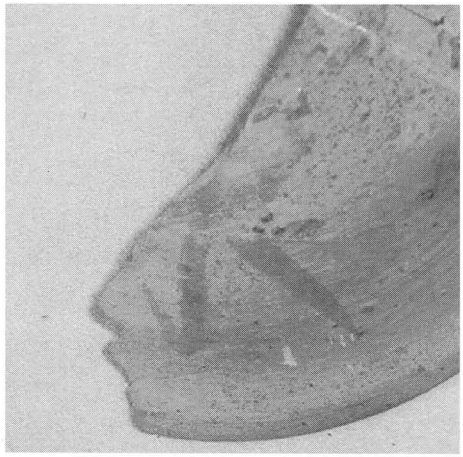


Ｄ１号住　9



Ｄ１号住　8（底部墨書）

Ｄ１号住　出土土器



Ａ76土坑（墨書）

遺構外出土（須恵器）

ミュージアム都留　企画展「古代への旅」にて　出土遺物展示

報　告　書　抄　録

フリガナ		サンノガワイセキ		
書名		三ノ側遺跡		
副題		田原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書		
シリーズ		都留市埋蔵文化財調査報告　第12集		
編著者名		杉本悠樹・井部利春		
発行者		都留市教育委員会		
編集機関		都留市教育委員会		
住所・電話		〒402-0053　山梨県都留市上谷1-1-1　TEL　0554-45-8008・45-8608		
印刷所		（株）佐野印刷		
印刷・発行日		2003年3月25日・2003年3月28日		
遺跡所在地		山梨県都留市田原2-7・2-11外		
1/25000地図名・位置		都留　東経138°61′77″	都留	北緯35°32′45″
概要	主な時代	平安時代		
	主な遺構	平安時代の竪穴住居跡６軒・竪穴状遺構２棟・掘立柱建物跡２棟・溝状遺構５条 土坑150基		
	特殊遺構			
	特殊遺物	平安時代の鉄製品（鉄鏃・紡錘車・刀子・鑿）		
	調査期間	2001年12月10日～2002年4月30日		

都留市埋蔵文化財調査報告　第12集

三ノ側遺跡

印刷日　2003年3月25日
発行日　2003年3月28日
編　　集　都留市教育委員会
発　　行　都留市教育委員会
印　　刷　株式会社　佐野印刷